

専修大学社会科学研究所月報

The Monthly Bulletin of the Institute for Social Science
Senshu University

ISSN0286-312X

No. 684

2020. 6. 20

目 次

調査報告 減災サイクルのステークホルダーと事前復興への取り組みの実相(Ⅱ) —被災地石巻での聞き取り調査から：(脱)仮設・「復興」から日常への収斂— 所澤新一郎・大矢根淳	1	
はじめに	1	
1 ウィーアーワン北上 佐藤尚美さん	4	
2 日本カーシェアリング協会 吉澤武彦さん	14	
3 ベビースマイル石巻 荒木裕美さん	24	
4 ISHINOMAKI 2・0 松村豪太さん	34	
むすびにかえて	45	
Historical origin and customary land tenancy of rural community in Nigeria Regina Hoi Yee Fu	50	
Introduction	50	
Research Area	50	
The Nupe Society	51	
Historical origin and customary land tenancy	53	
Discussion	58	
韓国の男子学校生徒の身長—成長速度に即して日本との比較	森 宏	60
はじめに	60	
身長—成長速度—出生コウホートに合わせて	62	
韓国児童の身長成長速度の低落傾向の背景—筆者の仮説	65	
編集後記	74	

調査報告

減災サイクルのステークホルダーと 事前復興への取り組みの実相（Ⅱ）

—被災地石巻での聞き取り調査から：(脱)仮設・「復興」から日常への収斂—

所澤 新一郎・大矢根 淳

はじめに.

この原稿をまとめている2020年GW、私たちの生活はコロナ禍のただなかにある。「都市封鎖（ロックダウン）」、「三密（密閉・密集・密接）」、「緊急事態宣言（延長・解除）」、「医療崩壊」、「アベノマスク」、「ステイホーム」、「雇用調整助成金・持続化給付金・緊急定額給付金」、そして大学関係では「オンライン授業」、「ZOOM」…。10年後、「新しい生活様式」が普及しているであろう日常は、どのような概念・言説・装置によって覆われているのであろうか。

災害社会学の古典『災害における人と社会』（P.A.ソローキン、1942年刊）は、災害として（日本では馴染みの地震・雷・やまじきオヤジ火事・山嵐ではなく）欧米における主な災害因であるところの疫病、飢饉、革命、戦争をとりあげ、その連鎖・循環を壮大な歴史的な社会変動として論証して見せたものであるが、そこでは、DisasterではなくCalamity（惨禍）と著わされている。社会的惨禍である。

一般的に災害には被災者と被災地が認知されて、そうした状況からの生活再建や復興が論じられる。そして復興の為としてなされた施策によって社会生活が壊されてしまう人々（新たな被災者）が把握されて、「災害復興における復興災害」が批判的に論及される。復興を進めるための法制度やその運用によってそうした被害が発生してしまうことを指して、法災・政災などと言われることもある。

それでは今、全社会（地球）的惨禍における被災者とは誰なのだろうか。コロナ禍における復興は、何がどうなることなのだろうか、誰が何をすることなのだろうか。そして、それではさらに…、「コロナ禍復興災害」の位相・実相とは？

本稿は、2018年度以来、社研グループ研究A「減災サイクルのステークホルダーと事前復興への取り組みの実相」として3年間継続設置されている調査研究の2年度目の成果報告となる。

対象フィールドは東日本大震災の被災地・石巻市で、そこで生活再建・コミュニティ再興の現場に対峙する様々なステークホルダーを探索的に渉猟して、その活動を再評価して位置づけてみているところである。東日本大震災(2011.3.11 発災)は2010年度末に発した災害であるから、2019年度はその10年度目にあたり、政府が措定する2015年度までの5年間・「集中復興期間」を経て、復興期間の後期5か年である「復興・創生期間」も今年で最終年度になる。すなわち、政府の復旧・復興事業財源としての10年間総額32兆円が完了することとなる。しかしながら、復興とは、「復興」を冠した公共政策(例えば土木事業)の予算消化(「竣工」)をのみ指し示すものではない。そこに生活を賭ける人々が、生活再建・コミュニティ再興に取り組むプロセスそのものであることを鑑みる必要がある。現実的に、そこに対峙して、様々なステークホルダーが奮闘努力している。試行錯誤を繰り返して組み上げられる生活再建の実相を、具に把握し評価しておく必要がある(そうしておかないと、竣工すれば復興完了と断定されてしまう)。全社会(地球)的惨禍に見舞われて私たち一人ひとりが被災者(近い将来の被災者=「新しい生活様式」に適応し得ない層を含めて)たり得る状況にあつて、しかしながら、だからこそ、東北被災地の復興の実情を眼差す視角が曇っては(目を逸らしては)ならない。潜在化する被災・復興の実相を果敢に掘り当てて言説化しておかなくてはならない。

2020年3月8日のNHK「日曜討論」¹で、復興研究者・室崎益輝(日本災害復興学会・初代会長)は現況を「復興のおどり場」と表現した。政府施策は完了年度を迎えるが、対象現場の実相は、被災者の生活再建が未だ半ばにも達していないと、各種調査データを披瀝しながら、こう表現したのであった。

本稿では昨年度に引き続き今年度も、現場に対峙するローカルの復興ステークホルダーを探索²して、その活動のいくつかを取り上げていく。2019年度は以下の要領で現地調査を行い、調査データの取りまとめ³をおこなった。

¹ 同日の「日曜討論」はコロナ禍時勢を受け、東日本大震災とコロナ禍の二題展開となった。「(前半) 新型コロナウイルス どう向き合う」/「(後半) 震災9年 復興はいま」。

<http://www.nhk.or.jp/touron/backnumber.html>

² インタビュー対象者とのアポイントメント取り等は、昨年度同様、所澤客員研究員が担った。「共同通信に勤務する所澤は、これまで各支社在職期間の20余年にわたって常に我が国の大災害の現場を取材する機会に遭遇し関わり続けてきた記者としての経歴を持つ。雲仙・普賢岳噴火災害(1991年、長崎県)、北海道南西沖地震・奥尻津波災害(1994年、北海道)、東日本大震災(2011年、宮城県)など。このたびの社研現地調査は(そして2017年度の調査においても)、こうした所澤氏独自の取材ルートに全面的に頼ったところで、調査企画が構想され実現した。」(所澤・大矢根, 2019, 脚注7参照)

³ 2019年度の本研究グループの成果は、本稿の他、以下の機会に紹介してきた。

・NHKスペシャル「終わりの見えない被災(パラレル東京・5日目=12/7)」に佐藤所員が出演・解説。

<https://www6.nhk.or.jp/special/detail/index.html?aid=20191207>

・全国市長会・全国都市問題会議@霧島(11/8)に大矢根所員が登壇・報告「コミュニティ・レジリエンス醸成のカギをさぐって—結果防災(活動・組織)の掘り起こし—」

現地調査名称：「減災サイクルのステークホルダーの実相」調査～(脱) 仮設・「復興」から日常への連繫

調査実施日時：第一次調査 2019年9月15日-17日 インタビュー①②

第二次調査 2020年2月22日-24日 インタビュー③④

調査対象者：①一般社団法人ウイーアーワン北上 代表理事 佐藤尚美さん

②一般社団法人日本カーシェア協会 代表理事 吉澤武彦さん

③NPO 法人ベビースマイル石巻 代表理事 荒木裕美さん

④一般社団法人 ISHINOMAKI 2・0 代表理事 松村豪太さん

調査メンバー：2019年度社研グループ研究助成 A (大矢根グループ) メンバー

大矢根淳 (研究代表、社研所員)、飯考行 (同所員)、近江吉明 (同所員)、

所澤新一郎 (同客員研究員)、三澤一孔 (同客員研究員)、宮定章 (同客員研究員)、

佐藤慶一 (同所員)、福島義和 (同所員)。_____が、今年度インタビュー参加メンバー。

調査方法：所澤が対象者にアポイントメントをとり、調査メンバー全員で指定された施設に赴き、インタビュー形式で2時間前後お話しをうかがった。質問項目等はあらかじめお知らせしておき、インタビューの流れに沿って適宜、詳細質問項目を加えていった。会話をICレコーダーで録音して、後日、テープおこし原稿を作成した。テープおこし原稿については所澤が文体調整したうえで対象者に送り、チェックしてもらって掲載許可をいただいた。

本稿は、2019年9月中旬および2020年2月下旬の二回、宮城県石巻市で2019年度社研G研A(大矢根グループ)メンバーが中心になって行なった4団体代表へのインタビュー記録をまとめ、若干の考察を加えるものである。

本研究グループの昨年度成果報告(所澤・大矢根 2019)において、我々は、サブタイトルに『仮設住宅』生活を射程に」として、仮の住まいに関わって展開されている石巻の事例を紹介・検討した。仮設住宅の見守りからリエゾンして創設され復興(公営)住宅で活動を続ける「石巻じちれん」や、その展開に伴走する医師の取り組み(仮設(地域)医療介護支援「石巻市立病院開成仮診療所」)、そして、その実際の足となって人の尊厳(移動への根源的希求)を守る移動支援NPO活動など。それらが結果的にいわゆる社会福祉需要、すなわちおおむね高齢者層をターゲットにしているのに対して、同時期・同位相における子どもをまなざす「仮設のこども支援」も取り上げた。これらは組織名称からとらえられる活動内容は全く別々である。しかしながら、応急避難生活から仮設、恒久と復興政策上の住居形態が異動していくなかで、一人の

・法学研究所公開シンポジウム「大川小学校津波訴訟とその意義」(11/23)を飯所員が主催。

<https://www.senshu-u.ac.jp/event/nid00000502.html>

・社研定例研究会(2019.12.19@神田社研分室)「阪神・淡路大震災から東日本大震災の10年総括検証に向けて～復興・減災ステークホルダーをたどりつつ」開催。

<https://www.senshu-u.ac.jp/event/nid00000493.html>

・社研公開研究会(2020.1.31@生田キャンパス)「フランス革命・ベルンシュタイン文庫に見られる災害復興」で近江所員がレクチャー、資料紹介。

<https://www.senshu-u.ac.jp/event/nid00000475.html>

被災者が経験する生活困難の展開をイメージしてみると、連続して発生する課題に連繋して対応しているゆやかではあるが実質的なネットワークであることに気づかされる。こうした取り組みが復興行政においてオーソライズされると、最近では「災害ケースマネジメント」（津久井 2020）と呼称されるようになってきている。しかしながらローカル復興の現場には、未だそのように呼称されずとも、確かにその内実を担っている諸活動が地道に展開・蓄積されている。昨年度はまずは石巻市において4例を掘り下げてみた。

今年度は仮設から次の位相、すなわち復興から日常生活への収斂のサイクル・位相に射程を延伸して継続展開されている活動事例を掘り下げてみた。これら地道・果敢な被災対応経験が現場には確かに存在する。それらを精確に把握して言説化することで、惨禍への長期的な対峙姿勢・視角のありようが明らかになってくるのだろう。そうした認識論的位置づけであることを前置して、今年度の4団体事例を紹介していきたい。

（以上、大矢根淳）

1 ウィーアーワン北上 佐藤尚美さん

石巻市北上地域は市の東部にあり、2005年の合併で市になった。太平洋と北上川と山に囲まれた自然豊かな地域だが、震災では535棟が全壊、300人近くが死亡・行方不明となるなど大きな打撃を受けた。一般社団法人「ウィーアーワン北上」代表の佐藤尚美さんも被災し、地域から離れることを余儀なくされながらマーケット運営や子ども支援、海水浴場再開、若手チーム「きたかみインボルブ」結成など北上地域でさまざまな取り組みをしてきた。復興応援隊としても活躍し、各地で実施された防災集団移転促進事業で、行政や建築家等と連携しながら合意形成支援をしてきたことも特筆される。2019年9月16日、拠点である施設でお話をうかがった。

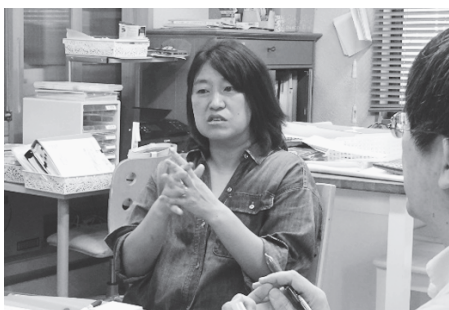


写真1：インタビューにこたえる佐藤さん



写真2：ウィーアーワン北上

—石巻市の蛇田地区ご出身ですね。

そうです。平成9年に（北上に）来ました。北上では白浜に住んでいました。

—最初の北上の印象は。

人との関係が近くて面倒くさい（笑）。人が天性的に明るいという印象がありましたね。1市6町が合併してまちづくり委員会があって、声を掛けてもらって所属していました。地域活動はそれくらいですかね。集落の行事は進んで参加する方でもなかったし、婦人消防団の加入を断ったのは私が初めてじゃないかな。断ったら私の義理の母がまた入ったりして、若干浮いていたかな、いま思えば。消防団の必要性は分かっていたんですけど、主人も入っていたんです。1軒から1人ずつのルールだけど、男性でも入らない家もあって。

—まちづくり委員会に入っただけですか。

結婚して石巻のIT会社でパートで経理をしていたんです。市が「ファシリテーター養成」のような講座を男女共同参画推進委員会でやっていて。男女共同参画は分かってなかったんですけど、委員は無料で受けられるので入っていたんですね。そこからピックアップされて、（市の）北上総合支所から「まちづくり委員会に入りませんか」と。まちづくりというワードも知らないし、まちをよくしようというより、嫌いなどころが多かったので「ひとくされ言ってやろう」くらいのつもりで参加しました（笑）。

—人の関係が面倒というのは、よそから来た女性が抱く普通感覚ですよ。

そう思っていた一方、思い返すと、震災のときは白浜で女性も男性も契約会をなくして4月から自治会に移行する年だったんです。女性契約会の財布にお金が残っていて、解散でどうするか。公民館に網戸がないので「網戸を付けて残ったお金でみんなでおいしいもの食べに行こうよ」って。お嫁に来た当初ってご飯食べに行くのもいやや行っていたんだけど、最後の幹事は私がやっているんですよ。実はノリノリで仕切っていたんじゃないの、最後はね（笑）。網戸の手配も私がやった。嫌いじゃなかったんだな、今になってみると。

—契約会は自治会とは似て非なるものですよ。

白浜の人に言われたのは、共有で管理する山を持っていて、炭を焼いて仕事にして家で使う、そこがスタートだって。市の制度で、自治会や行政委員はそのあとなんですよ。お金を出し合って年に2回くらいお祭りがあって。お嫁に行った当初は、男性は正月は着物で集まっていた、江戸時代みたいに。女の人のご飯の支度していましたが、私のお嫁さんも増えてきて「何で男の人たちのためにご飯作らなきゃいけないの、カップヌードルにしろよ」と思っていたら、そのように変わりましたね。最後は。

—「佐藤さん」とは呼ばれなかったとか。

地元の人は屋号で呼んでいました。スカって。だから「スカの嫁」って言われて。お墓に屋号が彫ってあるんです。横須賀の須賀と書くんだって、お墓を見て気づいたんです。それまではカタカナで「スカ」。ザルにもスカって書いてあって。

家で電話を取ったら「スカだすべ」って言われるんです。「違います、佐藤です」って言うと、「だからスカだすべ」って、この人ほんと何言っているんだろうって（笑）。面白かったというか、面倒くさいけど好きになっていった。近所のお母さんたちも面白くて、人間としての教育はその人たちに受けたような気がする。おにぎりを落としたら捨てるじゃないですか。お米は捨てるなって言われたり。白浜に嫁いで、小学

生から挨拶されたんです。大人なのに挨拶されたみたいなの、あそこで人間に育てられた気はする。

—段々と北上に慣れて…。

蛇田ではほかの家の子どもを怒るって、よっぽどじゃない限りなかった。北上はうちの子どもも含めて、並ばせられて隣の家のおじいさんが怒るんですよ。うちの主人カズヨシっていうんですね。怒られているのは息子のカイトなんだけど、おじいさん年をとっているからカズヨシ、カズヨシって怒るんです（笑）。顔もたぶん似ているんですね。笑いをこらえながら小学生が聞いているんです。面白いなと思って。地引き網をしても、都会から来た子どもたちって魚に触れなくて大量に廃棄したりするんですね。それを知っているから、地引き網が入るとみんな影に隠れて待っているんです。都会の子が取れないと言っていると「取ってあげる」と寄ってって魚持って帰ってくるとか。段々、「田舎っていいな」みたいな。それでもコンビニも電車もバスもないし、近所に友だちもいないし飲みにも行けないので、不満の方が多かったというか、文句ばかり言っていたように思います。

—文句は地域の大人の前では言いづらいのは。

私、言うんですよ（笑）。契約会でも「おかしい」って。何で私たちがお酌をしなきゃいけないのとか。怖いおばちゃんもいたけど。婦人消防団は私が入らないと言ったら、私の後の世代が誰も入らなくなって、若干責任感じたけど、またおばあさんたちが入れられる面白い現象があって、心の中で笑っていました。

—消防団の活動が盛んでお祭りも…。

一般的なお祭りじゃなくて、カラ祭りといって、ただ集まって男の人たちがお酒を飲むだけなんです。2月の春祈祷だけは1軒1軒回って、お酒を飲んで、1品食べて獅子舞してというのを全世帯回るんですね、男の人たちが。それくらいがお祭らしいお祭りで、あとは飲み食いする、女の人たちは台所に集まって手伝いをする感じでしたね。

—震災前、北上で別の浜の行事に参加したことは。

全くないです。白浜から奥は行ったことがなかった。長男が中学生のときに1回、小滝といういちばん端の浜の子の家に送ってと頼まれて初めて行って、長男に「ここ、もはや北上じゃないよね」って怒った記憶があります。すごく遠く感じて。小学校区も違うし、中学校は一緒ですけど親同士のコミュニティってさほどなくて、中学のPTAは（橋浦、吉浜、相川）3つの小学校区の中で役員を出すので、ほかの集落の人と関わることはほぼなかった。

—小学校はそのうち吉浜と相川が被災して。

震災後1年ちょっと蛇田の実家に身を寄せていたので、小学生の長女と次男の2人が吉浜小学校から蛇田小学校に移ったんです。長女は6、7人のクラスからいきなりマンモス校でなじめなくて10日くらいで朝になると吐いたり、これはまずいと思って。いまの北上小に間借りしていた吉浜小学校の校長先生に連絡したら「手続きするから明日から戻しなさい」と言われ、すぐに戻して。次男は、もとのクラスは、元々男の同級生は3人しかなくて、3人中親友の1人が亡くなって、もう1名は転校。北上に戻っても友だちがいない。次男は男の子がいっぱいいる蛇田小が気に入って、長女と次男は別々の小学校に通ったんです。

—送り迎え、大変でしたね。

大変です。送っても居場所がなかったんですね、家もないし。義理の両親は橋浦のみなし仮設の小さい

家を借りていたんですけど、古いみなし仮設に1日いるのも嫌だし。息子も中学2年に上がることで学校変わりたくないと言って、毎日北上に通わなくてはいけなかったので、居場所を意識したというのは活動のきっかけにありますね。取材で、今の活動は地域のために始めたと言われると、いやそうじゃないですけど。お店も一軒もなくなって牛乳も卵も買えないのしんどいね、八百屋みたいなことやろうってノリですよ、スタートは。

—今のお住まいは？

隣の河北地区に自力再建して、亡くなった主人の両親と義父の母も一緒に住んでいます。子ども3人はみんな大きくなって出て行って2人は大学生で東京、いちばん下が高校2年ですけど、1年間留学でアメリカに行って。

3.11のときって家を壊して建て替える予定で、図面も出来上がっていたんです。3.11の朝に主人と「いったん、どこに住む？」って。3月中に出なきゃいけないのに何も考えてないねってしゃべったんです。震災に遭ってローンを組む主人もいなくなったじゃないですか。仙台のパナソニックのショールームで子どもたちとキッチンを選んで準備は終わっていてどうしようと。主人もいないのにどう建てるのっていうクエスションで、直後は計画は終わったと思っていた。実家に身を寄せましたけど蛇田ってほぼ被災してないんです。新しい住宅地で立派な家が外国みたいに並んで、散歩していたら次男が「この人たちみんな幸せそうだね」って言ったんです。「うわー、もういいや。全部変更なく計画通りに行こう」と思ったらやっとな腹落ちて。出来ていた設計図で家を建てて、おじいさん、おばあさんとまた一緒に暮らそうって。やたらでかい家で、納まる土地を探してもらって。

—前の図面を完全に生かして。津波で流されなかったんですか。

そのまんまです。図面は設計事務所にもあるし、3.11は工務店に最終これでいいと返事をする日で、朝に主人が「この窓どうしても気になる」と言って鉛筆で○をした図面が私を持って家を出たんです。

—2012年、ウイーアーワン北上を立ち上げ、この年の12月に復興応援隊になって、13年1月にこの建物ができる。その前の12年2月に北上のまちづくり委員会に入られていますね。

「設立いつですか」って聞かれるんですけど、12年1月から私の活動自体は始まっていたので、最近では12年1月って答えています。お店をスタートしたのが6月。北上総合支所も半分職員がいなくなってばんばん、次々と住民説明会をしなきゃいけないタイミングで、まちづくり委員会に私がいたので声をかけやすかったと思うんです。職員の今野照夫さんが「女性の力を出さないといけない」という人で、まんまと乗せられて、説明会の受け付けや、手伝いからスタートしているんです。そのうちに「尚美さんたちがやっていることが復興応援隊という制度で給料も出るから」と言われ、復興応援隊に活動をシフトして。復興応援隊に声をかけられた当初は「もういい」と言っていたんだけど押されて。

—直後の何もない状態で、こういうお店ができてどんな反応がありましたか。

そんなに売れるわけでもないし、毎月赤(字)になるのは分かっていたんです。もともとあったお店がいつ戻るかわからない、それまでのつなぎという意識で。みんなに喜んでもらって嬉しいというより、どう食いつながるか。じーっと店番というのが向いてないのは分かっていて、店にいたくないんです。だから雇うアルバイト代もどう稼ぐかと。北海道大と法政大の先生から連れてってやると言われて(新潟県中越地震で被災した)山古志を見にいったら補助金や助成金、復興支援を知って、そういうことをやればいいのね、と。

―震災前のお仕事は。

辞めました。その後、主人が若いときに手伝っていた土建屋さんが困っているというので経理の手伝いを。最低限の給料を稼いで、こっちのマーケットをやる感じですね。朝早く石巻青果市場に事務服で仕入れに行くんですよ、台車を持って。積んだまま桃生の職場に行って午前中経理や給料の計算をして、仕入れたものを北上に持って来て、夕方、子どもを乗せて帰る。朝は子どもを北上への途中まで乗せて、おばあさんがそこまで迎えにきて。

―離れ離れになった北上の人たちがここで再会するようなことは。

子どもの方が多かったかな。中学の野球部やバレー部は夜練があるんです。その間の居場所がなくて、ここでご飯食べてから行ったし、子ども会も再開してなくて、学校以外の子どもたちの居場所づくりも、本当に場所がなかったのだからここでやっていたし。

―ここで子どもたちは学習もしていました。

英語教室は、娘が幼稚園から習っていて、石巻の若い先生で、震災後もう1回習わせたい、本人も習いたいって。私が塾にさらに送り迎えするのは無理と思って「先生こっちに來られませんか」という話から、ちょうどコミュニティづくりで英語教室をしたらほかの子どもたちも来るかなって安易にやったら、いまだに続いていますね。

―復興応援隊⁴の制度はどう評価されていますか。

応援隊に入ることでは自分は育成されたという認識ですね。税金で給料をもらって、もらった分の時間は明らかに地元に戻している。成果は住民さんがどう思うかだけれども。応援隊は石巻のほかの地域でもやっているけど、「高台集団移転の合意形成とか本当に純粹に復興支援をしたのってうちしかない？」って思っています。ほかはその制度を使って稼げる仕組みを作ったけど、うちはずっと合意形成だったから稼げる仕組みを作れないで「もうすぐ制度も終わり、どうする」というのはあります。よかったのかどうか。この間、今も復興応援隊をしているみんなに、現時点で稼ぐ仕組みが作れていないことは謝りました(笑)。

―いろいろ手掛けた復興応援隊の中で、北上は合意形成。

行政の人たちが大変というのももちろんあるし、行政任せにした結論で残念なことになるよりは、自分たちでやって、正解かどうかは分からないけど、納得して終わりたいというのはすごくありました。集団移転地を11か12作って、いちばん少ないと(一つの移転地で)4、5世帯しかなくて、限界集落をまた作り出している違和感がずっとあって。「北上はすごい」と言われたけど、今だから言えるけど私の中では違和感でしかなかった。これがいいとは思えない。今やっている男の人たちはいいだろうけど、20年後に暮らす子どものことを考えたら、合意形成にあと1年かかっても、一つか二つの集落にまとめるべきだったといまだに思う。私個人の中では失敗。

―文化が違うそれぞれの集落を尊重し、コミュニティを大事にした面もあるのでは。

ただ、変わると思うんですよ。住む場所が変わっても、白浜出身とか思いを残すのは別な方法もある

⁴ 東日本大震災からの一日も早い復興を目指し、被災地の地域づくりを目的とした住民主体の地域活動を促進するため、県が市町村及び関係団体と連携して、それぞれの地域の復興に向けて意欲的に取り組む人材を内外から募って結成するもの。

宮城県「復興支援」HP。 <https://www.pref.miyagi.jp/site/hukkousien/futtukou-ouentai.html>

はずで、かじりついて何が何でも白浜集落って言っても、もうこれからどうするってなっている。白浜ビーチパークですらオープンしたばかりなのに2、3年後はどう管理運営するのか。いい機会だったから、北上全体で一つにまとまればよかったのに。そしたらバスも利便性よくできたはずだし、お店は成立しただろうし。子どもがいる世帯は1軒だけって集落がざらだから、遊ぶ相手もない。若い人も戻りたいって思わないって。

一どのくらい戻ってきている感じですか。

4割出ています。3月に全住民アンケートをやったんです。行政から集落単位の人数を聞いて実際配布すると聞いた人数よりさらに3割、4割余ったところもあって、住民基本台帳と実際住んでいる人のデータはたぶん違います。中学生以上で配布したのが1,822通。いま住む実数ですね。

一北上には国際協力団体の「パルシック」⁵が長く入っていました。

パルシックさんあっての今の私です。井上（禮子）代表（理事）が「いいよ、やってみなさいよ、何かあったら私が責任とるから」という人で、本当に自由にやらせてもらって。2、3年目になると私たちも勘違いして、復興応援隊にできることはもうないとかって偉そうに言い出すんですよ。そうすると井上代表に「まだまだよ」と言われ、育ててくれた1人ですね。パルシックが（復興応援隊の）受託団体で、私は傘下の応援隊で何でも挑戦できたというのがありますね。応援隊って市がパンク状態だから県とのやりとりでした。市は総合支所が日報を受け取るとか、一部を担っただけで。3年たって県から市に移行し、パルシックが引いて、井上さんから「もうウイアーワンでできる」って言われて、私が代表になって法人化して復興応援隊事業も引き継いだ。

一ウイアーワンは復興応援隊と地域おこし協力隊が混在しているわけですね。

地域おこし協力隊⁶は熊本から移住してきた女の子1人でコミュニティナースを試験的に。復興応援隊は兵庫県から移住してきた子と、もともとやっている2人。移住してきたスタッフは最初は市街地に住んでもらうようにしています。北上に住んでいると休みも仕事もなくなっちゃうんです。慣れてきて住みたいと思ったら住んだらっています。

一白浜で2日間の海水浴の実行委員会を始められましたね。実行委員を誘うのに、北上から出た方をあえて意識していると話していたのを覚えています。そうした方々から「よく声を掛けてくれた」という、離れても北上に関われることを喜んだ反応がありました。

知っている限りの人に声を掛けまくる名目でもあるし、私も北上にお嫁にきて、自宅は隣まちに建てた、出ていった1人ですよ。なかなか帰ってくる機会もないし、人手不足でひねり出した苦肉の策。でも年に1回、海開きの1カ月くらい前になるとそろそろ集まろうとなって、みんなで打ち上げして。海開きはすごく疲れるんですけど、楽しくやれた。今年ほぼ招集かけることなく、土日に私たちがいると分かっているから、何となくみんなぼろぼろ集まっているという感じですかね。

⁵ 外国の占領や侵略あるいは紛争の下で自立的な発展を阻まれた人びとが暮らしを取り戻すことに協力する活動を展開するNGO。国際協力とフェアトレードを主な活動内容とする。PARCiCのHP：<https://www.parcic.org/about/>

⁶ 人口減少や高齢化等の進行が著しい地方において、地域外の人材を積極的に受け入れて地域協力活動を行ってもらい、その定住・定着を図ることで、都市住民のニーズに応えながら、地域力の維持・強化を図っていくことを目的とした制度。2009年度から総務省によって制度化された。総務省HP「地域力の創造・地方の再生」。https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/

—海水浴場は北上のいろいろな集落の人が集まりやすかったですか。

集落間の帰属意識がもともと北上は強い。ただ白浜海水浴場となると、集落を越えられるんですよ、地元の海という認識で。白浜漁港や大室漁港だったら白浜の者、大室の者だけど、海水浴場はみんな思いがある場所なので比較的集めやすい。白浜ビーチパークデーというのを月に1回やっています。私たちの世代は相川の人と一緒にやるって違和感ないけど、60代、70代の人には白浜で大室の人と一緒にやるって考えにくい光景なんです。でも復興応援隊や若い世代がそれを取っ払って、最近は白浜の60代、70代の人たちと大室のお母さん、おじいさんたちも一緒にイベントをやるようになったんですね。

—女性が広く声を掛けると、集落や世代の壁を越えやすい…。

女の人が右といったら右という家が多くて、お母さんたちが味方になれば男の人もついてくる。結構ジェンダー系の団体の視察が来るんですよ。たまたまですけど、うちの団体は女ばかりなので。女性だから成し得たことはありますかって聞かれるけど、あるわけないじゃんと思って(笑)。女の人って、子どもの代まで想像してものを考えるのは男の人よりも強いなというくらいです。防潮堤も、男の人って勾配や海拔とか得意気にしゃべるけど、女の人って海拔の高さも勾配なんかもどうでもよくて「えー、じゃあ、子どもたち遊んでいた場所から海が見えなくなるね」って子どもを育てた環境を思い浮かべる部分が違うのかなと。

—北上インボルブの話を。

海開きをしていた私たち実行委員会メンバーが12、13人いて、一方で大室の南部神楽を再建させようという若いグループが別について。復興応援隊の制度がなくなったら活動をどう続けようと思ったときに、今のうちに地元のネットワークを作っておきたくて、こっちのチームだけで完結するのしんどい、そっちは？と尋ねたら「こっちもしんどい」、じゃあ一緒にやらない？というのが北上インボルブのスタートで。

まちづくりの復興計画書を作りたかった。本庁の復興計画書って分厚いけど、北上は1、2ページしかなくて、自分たちでちゃんと作りたくて、まずはそこから一緒にやらないかと持ちかけたんですね。やろうやろうって集まって。みんな向いている方向は一緒なんだけど、いざ、話をするとならばら。10人20人で話し合っても作っても、こんなに思いは違うのに意味がない、計画を作る仕組みが北上で必要なんだと考えが変わって。ただ、復興計画書づくり名目で補助金を市から取っていたんですよ。これはまずいと思って苦肉の策で「北上を面白くする提案書」を作ったんです。それが「きたかみインボルブ」の初仕事で。

—名前の由来は。

毎週1回、1年間集まり続けたんですよ。私は地域づくりって何となく分かっていたけど、みんなにイメージをつかんでもらうのに岩手県大槌町に視察にいったんです。北上の皆さん、どの程度話し合い進んでいますかと聞かれ、こっちは全然進んでないわけですね。すぐ対抗意識を持つんです、こっちの人たち(笑)。帰りのバスで、週1回集まらなきゃ駄目だって。「ウソでしょ!？」って思ったけど、実際、毎週集まって。インボルブという「巻き込む」ような名前にするのだけでも3回集まって。くだらないことを1年しゃべっていた気もするけど(笑)。

—「ウイーアーワン北上」という名前のいきさつは。

志を引き継いでいるんです。主人がサーフィンをしていた縁で。ハワイで「GO-NAMINORI」というサーファー集団があって、代表の1人がwe are oneという団体を立ち上げて、日本に復興支援に入って。それで世界中のサーファーが来て仲良くなって。初めてボランティアと関わったんですけど、全く会ったこと

もない人が、極端な話お金をくれるわけですよ。そういう人たちがいること自体が衝撃だった。受け取りっ放しも嫌だし、恩を次につなげなきゃいけないという意味で名前を引き継がせてもらったんです。

—ハワイの方々には、ご主人がサーフィンをやっていたことも伝わっているわけですね。

そうですね。いまだに仲良く付き合っています。先日の海のイベントも3人来て、ずっと手伝ってくれました。we are oneに入っている人は世界中に。日本でもいっぱいいます。

—合意形成って難しいと思うんですけど、感じられたことは。

市から事業を引き受けている立場だから、制約条件とかあって住民さんの合意形成をしなきゃいけない状況ってしんどいですね。こっちはAの方向にしたいけど住民さんはB。分かるけどAに持っていかなきゃいけない、市の方針、そういう制度だからみたいな。この仕事嫌だと思っていた時期もあったけど、こっち側の制約をまずは取っ払って考えるようにしてから吹っ切れて、そしたら合意形成も楽しくなってきた。

4年くらい前から地域自治を意識していました。島根県の雲南市に視察に行ったり、北上で講演会もして地域内に種まきしながら。全住民アンケートをやって新しい仕組みづくりに入る段階になったんですね。市は組織図が好きじゃないですか、代表や役員がいて、行政委員や自治会長が入って、社協、学校、地元企業、みんなで話し合うみたいなの。正直うんざりしつつ、でもやんなきゃ。今年になって「市が望む形で仮に組織を作ったところで3年か5年しか持たない」って思ったんです。もうやめよう、やるけど、組織体系は気にせず、まずは本当にやりたい人たちが組織を作ろうって。行政委員や自治会長は困ったときに助けてくださいと第2層の応援団的に入っていてもらう。若い人を助けてという立場で声をかけると、それはいいさと言ってくれるんですね。

地域自治システムって、まち協みたいなのですよ、市が言うのは。石巻全部で16のまち協を立ち上げる計画で、成功事例として北上に期待していると言われてプレッシャーはあって。一方で、地域を維持するために頑張る人たちが頑張らなきゃいけない仕組みにうんざりして。誰も頑張らなくても地域が維持できるようにしなきゃ無理って。暮らしのサポートセンターみたいな地域運営をサービス業の視点ももって、どうやって確立していくかは社会問題なので、取り組もうとしています。

—高台移転の合意形成で心掛けた点があれば。

集落に私たちが意見することはないです。基本は全部集落の人たちが決めます。こういうことが課題になるねと気づいたらクエスチョンを投げるくらいで、集落の人たちが決めますね。

—中越を視察された際、おじいさんのお話が印象に残ったという話を以前されました。

「復興って普通に死ぬることなんだよな」って言われたんですね。いろいろ迷うときの判断基準にしています。自分が死ぬとき、どう思うかな、よかったかな、後悔するかなって考えます。震災で家が流された、みんな大変って聞くけど、何がいちばん不幸って普通に死ぬなかった人たち、子どもも含めて、そこに尽きると思っているんですね。必ず人って死ぬから、少し早かったとかすごく早かった人もいるけど、普通に死ぬなかったことがいちばん気の毒と思う部分。死ぬときって「あとはいくら任せたよ」って言って死んでいきたいじゃないですか。私も「お疲れ」って言って死んでいきたいし、できなかった人もたくさんいたのが東日本大震災で、みんな安心して死んでいける地域だよなって思いたい。

地域のことを頑張る人が正義で、頑張らない人は悪みたいになっているんですよ。私も無意識にしてきたところもあって、頑張らなきゃいけないけど、もう嫌というのがあるから重苦しかったんですね。いま

頑張っている人も、地域のことは自分でやるしかない和责任もってやっているけど、疲れてもういいって思っている人もいるだろうし、やめたいという選択肢もないと、誰かが頑張り続けなくっちゃというのは安心・安全じゃないわって。

ある程度行政に委ねる部分、ビジネスに任せる部分、最低限の集落でやらなきゃいけない部分と3つに整理して、サービス業とコミュニティで担う部分を地域自治で作らなきゃいけない、思いだけで集落を運営するのはしんどい。1個の会社と思えば福利厚生も担わなきゃいけない、それを作る事業は面白いかなって思えるようになったんです。

—北上に関わってこられた原動力って何でしょう。

自分も子どももこの時代にこの場所に生きていたことを後悔するのいやだし、何だかんだ大変だったけど、最終的にまあよかったよねと言えるように生きたいというのもある。震災でいろいろなものをむしり取られるように取られたわけじゃないですか。泣き寝入りみたいなのも嫌だし。若いときから夢みたいのとはなかったんです。でもこの仕事を通じて地域に仲間ができて、私単体で夢は見つけれないけど、こうしたら面白いね、楽しみだねとみんなで共有する夢みたいな面白さはすごく感じる。それが原動力かな。

—やってよかったなって思うことは。

全住民アンケートはすごいしんどかったけど、やってよかったな。あとは白浜海水浴場かな。4年くらい前にビーチパークの図面が市から出てきたときは全然違うものだったんですよ。いま大きい東屋があるけど、当初の計画では公園にあるような小さくて屋根がついた丸いものが4つか5つあって、シャワー室もよく市民プールにあるブース型、更衣室と、ありきたりの図面が出てきて。こんなのつまらないって。3年くらいで何回ワークショップやったか。パーベキユースペースの話のときに、地元の人って誰もキャンプ場行ったことがないですよ、近所で済むじゃないですか。新潟のスノーピークまで見に行くと、役所の人も一緒に「これがキャンプ場か」って(笑)。そういうところはすぐ競うから、どうせできないくせに見に行くと、楽しみながら。やっぱり東屋はでっかいのがいいよとか。ハワイで格好いいなと思ったのは、青空の下でのシャワー、ヘッドだけ椰子の木の下から出ていて。市民プールみたいなブース型って古くなると気持ち悪いんですよ、髪の毛落ちてたりじめじめして暗くて。市が最後まで反対したんだけど、男女関係なく外の開放型だと粘って、今は市は「あれはよかった、評判いいわ」って。ちっちゃい子連れて、ちっちゃいブースでシャワーを浴びて着替えるって大変なんですよ、暑いし。外でパーッとシャワーを掛けられた方が楽なんですね。

—全住民アンケートはどういうところがよかったんでしょうか。

しんどい作業だったけど、住民さんはどう思っているんだろうと聞きたくて前からやりたくて。一つの集落から1人か2人協力者を募って回収、配布をやってもらったんですけど、すごい協力的で、回収率も92%くらいで100%の集落いくつもあって。60代後半の「協力してあげるよ」と言った人は、ちよくちよくここに来て「あと1通集まんない」と言うので「もう大丈夫ですから」って(笑)。ある別のおじいさんは途中経過を連絡くれるんです。何件集まって、この家は去年まで住んでいたけどお嫁さんが入院してって、私には実は誰のことか全く分からないのね(笑)。3日か4日おきに途中の報告くれて、集落事情も見えてきて。労を惜しまずやってくれる人たちも地域自治システムでぜひ活躍してもらいたくて。働いた分に見合うようにお金払いたい、仲良くやりたいなって。本当にあの世代はすごいなと思った。

市は、北上の地域自治システムは1個、要はまち協1個って設定したんです。最初はこれだけ地域内で

も帰属意識違うのに、1個にできるかって思ったの。でも調査で集落単位の自治会機能が崩壊しつつあるところも見えて、これは1個しかないなって。総会もしてない地域もあって。ある地域でアンケート結果も報告しながら、自治システムの説明会をしたんだけど、最初は2人しか来ないんですよ。地域のことを話し合おうといっても興味ないんですね。

―震災後、より深い付き合いを北上の人とする中で、印象は変わりましたか。

みんな人は好きですね。変な人もいるけど、ひっくるめて面白いと思うし。世界中からたくさん支援をもらってここまできて、内輪もめで地域が終わっていくのも絶対嫌だし、それは誰も口に出さないけどみんな腹の底に持ちながら関わっている気もして。意外と高齢の人たちも仲間を欲しいという人たちがいて、そういう部分も見えてきた。

私たちはまちのトップセールスマンと思えよううちのメンバーには言っています。北上の暮らしをサポートする会社を作って、住民の福利厚生もやりながら、まちのトップセールスマンという思いでやる。何で私たちがやらなきゃならないの、支所でやれよと思うことが今までいっぱいあったわけですよ。市で説明会をするときに「尚美さん悪いけど、おれたち苦手だから司会やって」とか。「何でそんなことを私がするのって思うけど、自分はまちのトップセールスマンと思ったら腑に落ちますね」って言ったら、メンバーみんな「ウン」で言って。

私たち行政に委ねすぎたから、行政依存になったのかなと思って。でも、この人口構造で総合支所は縮小せざるを得ないと思うんです。その部分を住民に担ってもらいたいという流れは理解できるけど、住民の思いだけでは限界があってお金をもらわないと無理です。思いだけでやれる人はいないよなって。やれる層もいなくなる。かといって地域運営をサービス業でやっていくのはデメリットも出てくる。逆にコミュニティを壊してしまうとか、地域を何でも知っている人がいなくなるとか、気をつけて、地域でできることはぎりぎりまででも頑張ってもらうところは崩さないで、できなくなってきたときに備える、仕組みづくり。

―災害後、支援者や支所との関係で印象に残ったものはありますか。

(日本建築家協会東北支部の)手島さん、法制大の西城戸教授、北海道大の宮内教授たちはじめ、支援に関わってくれた人たちは相当大きい。中でも「れんぷく(一般社団法人みやぎ連携復興センター)」とパルシックの存在はすごく大きくて、今に結びつけられたと思います。私が「分からない」って言うと、れんぷくは「尚美さんそこに行ってきたらいいよ」「あの人の話聞いたらいいよ」「これ読んだらいいよ」とアドバイスをくれて。(れんぷく代表理事の)石塚(直樹)さんなんて、「ちょっと今日来て」というときも過去にはあった(笑)。「れんぷく」振り回したし(笑)。ああいう人たちに育てられたし、総合支所って支所長も担当官も2、3年で代わる中で、こっちは同じメンバーだから、当然、情報量も違う。新しい職員も市に入ってきて「何で私より給料高いの」と変なこと思っていた時期もあったけれども、いまは母親の目線になって「こういう子たちを育てなきゃならないよな」って思いながら接するようもなったし。

―あまり行政に文句を言う感じでは…。

言うときは言っていましたよ。キャラ的にクレーマーと思われていてもそんなにクレームしたことないと思うんだけど。行政からすると提案もクレームの一種のときもあるんです。だから提案はやめて自分たちでやってみせる方式にしたんです。市内にいっぱいNPOもあるけど、1団体だけでは解決できないこともあって、3年前に「石巻NPO連絡会議」をいしのまきNPOセンターがやって、うちはその幹事団体に入って3年間月に1回会議を続けてきたんですね。ただ、そこで固めた意見を市に提案するけど、無理で

すってあっさり切られるんですよ。担当者ベースで切られるって何だろうと思って。組織化して役員も決めて、無視できない存在に私たちがならないと話にならない。「いしのまき市民公益活動連絡会議」という組織体に変更して、私は一期の共同代表になって、おととい設立総会委員をしたんです。

—市の上層部に持っていきたいですね。

まちをこうするって1本軸があって、面白いものを枝に肉付けする人たちが軸にくっついていくと成長するんだけど、石巻って軸がないと言った方がいて、私も全くそう感じるんですよ。楽しそうにやっても、尻すぼみになっていきますよ。この幹をみんなで作りたかって思って。市に提言できるようになるには、きちんとガバナンスもとれる組織にならなきゃならないねって当時の幹事団体で話し合ってた。休眠預金や財源も考えると、単体で発信して外部からお金を集めるって皆無に近いですよ。北上で地域自治頑張っていますといっても何のインパクトもないし。でも、社会問題の縮図みたいな地域でみんなやっていけるというネットワークがあれば、期待して資金提供をする企業も出るかもしれない、私たちはつながろうって話しています。

2 日本カーシェアリング協会 吉澤武彦さん

東日本大震災で石巻では約6万台の車が被災した。一般社団法人「日本カーシェアリング協会」は石巻入りした代表理事の吉澤武彦さんが設立した。ペーパードライバーで運転もおぼつかなかった吉澤さんが手探りで、車を失った人に寄付で集めた中古車を無償で貸し、協働で利用してもらって活動を始めた。「石巻発 寄付車でつくるやさしい未来」を掲げ、病院や買い物の送迎から、旅行など利用者同士の交流まで支え合いが広がってきた。石巻を拠点としつつ、活動範囲は災害のたびに全国に広がり、生活・移動手段を失った人に車を届け、たくさんの笑顔を生んできた。2019年9月16日、九州豪雨で被災した佐賀県の支援から戻ったばかりの吉澤さんに石巻の事務所でお話をうかがった。



写真3 インタビューにこたえる吉澤さん



写真4 日本カーシェアリング協会

—事務所があるこの建物は…

福島県浪江町の皆さん 4 世帯が二本松市で生活されていた仮設住宅です。解体して持ってきて、建て直して再利用しています。延べ 400 人くらいのボランティアが手伝ってくれて、カーテンもエアコンも再利用です。トイレも流し台も全部。

—事業内容を。

「寄付車で作るやさしい未来」のキャッチコピーでやっています。寄付で集めた車を使って持続可能な共助の社会、地域で支え合う持続可能な形を車で作る。実現のために 3 つの事業をやっています。カーシェアリングで支えあう地域をつくる「コミュニティ・カーシェアリング」、人と地域を寄付の車で元気にする「ソーシャル・カーサポート」、災害で車に困らない地域をつくる「モビリティ・レジリエンス」です。カーシェアリング協会という業界団体のような名前ですが、東日本大震災をきっかけに石巻で、1 台の車を集めるところから始まった小さな非営利組織です。スタッフは 11 人、車が 120 数台です。

—経緯を教えてください。

「神戸元気村」の山田バウさん⁷ が師匠です。僕がサラリーマンを辞めて世界旅行へ行こうとしていたところで出会い、バウさんと行動するようになって、色々学びました。

東日本大震災で、僕は福島に駆けつけて子どもたちを疎開させたり、避難所に炊き出しセットを置いたり、個人で動いていました。2011 年 4 月、バウさんから「提案がある」と連絡があり、東京タワーの 1 階で会ったんです。「避難所に今いらっしゃる方が仮設に移ると、行政主導で自治会が形成される。そこにカーシェアリングを提案する準備を今からやったらどうや」と。その時、僕はペーパードライバーで、車に関して全くの素人でしたが、車を集めたら何とかやれるかなと思って「引き受けます」と始めました。

「会社四季報」を見ながら一部上場企業に「車ください」と言って回りましたが、何の実績もありませんし、車のことも全然知りませんし、カーシェアリングという言葉も初めて知ったくらいですから、当然、断られるんです。でも、やっていくうちに 1 台目をくださる社長が現れ、その車を石巻に持っていったのが 7 月でした。

車をどこに渡そうか、最初はモデルとなるようないい人柄の人がいるところでやるのが大事と思いました。できたての仮設住宅を回って、「移動に困っていませんか」と協力してくれる人を探して、いいなと思ったのが（前回インタビューに登場した「石巻じちれん」の）増田さんがいた万石浦団地なんですね。この時、協力を申し出てくれた方々ご自身はそんなに移動に困っていなかったけど、皆さんのために何かやりたいという気持ちがあふれた方々だったので、ここでやれば成功すると思ったんです。

陸運局や県警といった公的機関と調整し、全部オーケー取って仮設住宅の敷地に車庫証明を発行できたのが 10 月です。半年かけてようやく 1 台目が使えるようになった。でもニーズはまだあったので、そこからどんどん展開しました。仮設は不便な場所で、皆さん車もなく移動に困っていました。見ず知らずの人ばかりでコミュニティが生まれづらい状況でした。復興住宅に移っても高齢化が顕著になって、交通弱者や孤立、担い手がない中でコミュニティづくりという問題があり、向き合いながら取り組んできました。

— 3 事業のうち、まずコミュニティ・カーシェアリングを教えてください。

カーシェアリングから支えあう地域をつくるという目的が、巷のカーシェアリングとは違います。乗り

⁷ 阪神・淡路大震災で「神戸元気村」代表として活躍した山田バウさん（故山田和尚さん）。

合いで買い物、高齢者の通院支援、親睦を深める旅行、地域の活動の送り迎えにも使います。お出かけサークル、活発に動くサロンとして車を活用しながら、気がつくと移動の問題も解決している感じですね。

サロンやツアーって色々な自治会でやっていますけれども、それに外出支援を組み合わせた形です。合体させることで継続的な形をつくる。外出だけでは担い手がいなかったり、頻度が少なかったり、なかなか継続できないんですけども、元気な人も助けが必要な人も混ぜれば、本当の意味の互助が起こりやすいですね。

各地域でルールと役割を決めて、運営してもらうのも特徴です。予約をする人、ドライバーとの連絡役が必要だし、何人くらい参加するのかといった窓口、お店を予約する旅行係も要ります。机を並べるのも担当がやります。皆さんができる範囲で協力する。カレンダー見ながらの相談も、手帳というアナログな形で。月1回くらい開くお茶っこでルールを調整します。花が咲いたから行きたいねとか、お出かけ企画も決めていきます。

—お金の負担などは。

経費は平等に分担する仕組みです。運転日誌に、誰がどのくらい参加したかを記録で残しています。ガソリン代もかかりますし、使った分だけ割り当てて負担します。その意味でカーシェアリングですね。道路運送法で、送迎して対価を受け取る単純な行為は白タク行為になるので、料金を決めてやるのではなく、経費を分担します。5km・500円、旅行に参加すると1,000円といったようにルールを決め、集まりすぎたら返し、足りなかったら割合に応じて追加で徴収します。年1回の総会で清算します。経費が賄える運営ができるように、積み立てがどのくらいかを確認していきます。

カーシェアリングを導入している地域の人は、導入していない地域に比べて仲のいい知り合いがたくさんいます。半分以上の会員に仲のいい知り合いがたくさんいて、仲のいい知り合いがいない人はほとんどいない。友だちに困まれた生活を、復興住宅に入って2年前後で実現しています。移動の問題も7割5分くらいが改善したと言います。もともと困っていない人も参加しているのもポイントで、困っていた人は何らかの改善をしています。

ユーザーで免許返納される方が結構いらっしゃいます。それぞれ事情がありますが、皆さん「カーシェアがあるから」という話をされます。安心して返納できる。市長も返納しましたけど「カーシェアに期待している」と言っていました。導入しているのは石巻で10地域。岡山で2地域あるので12地域です。テスト的に鳥取も2地域で始めていますし、滋賀県の大津も1地域これから始める予定にしています。

—参加者の平均年齢は74歳ですか。

若い人も参加してもらいたいと思いますけどね。会員数は増えています。去年は月平均9人増えたので、1地域1人のペースですね。2カ月に1回はお出かけして、買い物ツアーは平均月1回くらい。僕らは導入や運営のサポート、ルールづくり、地域との連携を。石巻専修大ともコラボして、トヨタでエンジンを開発していた先生の学生さんがタイヤ交換、オイル交換をしてくれます。経営学部のゼミは車を管理するシステムの開発を、会計のゼミは会計を手伝ってくれましたし、ゼミ生が就職して経理を担当しています。

石巻で7、8年やってきたので、ある程度形ができました。ほかの地域に雛型を持って行って、月1くらい通いながら運営のサポートプログラムを作っていきます。自治体や民間財団も協力してくださり、鳥取は日本財団、岡山ではトヨタモビリティ基金。大津は自治体が予算を確保してくださり、カーシェアリングのグループを作ることにしました。

—二つ目の柱の「ソーシャル・カーサポート」について。

生活に困っている方に安く車を貸し出し、レンタカーの事業もしています。石巻の半島部の店で買い物をするとキャッシュバックします。普通のレンタカーよりも意味があって、地域起こしになることをしています。1回購入すると500円の割引があって、買い物したり宿に泊まったりすると最大2,000円の割引。軽自動車1日借りると3,000円くらいなのでだいぶ安い。店側の負担がないので、半島部ほぼ全ての店が加盟しています。レンタカーで震災遺構を訪れる人は3割引。震災を伝えていく役割は僕らにもありますので、車の面でバックアップする。石巻に電車で来た人は大川小学校まで公共交通では行けないです。

あとはリースですね。起業する人、非営利活動をする人、移住してくる人、地域の力になる人に安くリースしています。被災した方に無料で貸し出すんですけども、期間が終わったら格安リースをして車を買戻せるまでサポートをする仕組みも作っています。

—三つ目の柱の災害支援、モビリティ・レジリエンスは。

車がないと災害からの再建が進みません。買い物や行政手続きもできないし、避難所が自宅と離れていれば片づけもできない。車を集めて1~3カ月の無料レンタカーを熊本地震や西日本豪雨でもやりました。8月に豪雨があった佐賀の支援に入っています。車が1台もない人、近所の人と一緒に使える人を優先して貸し出します。できるだけ車を有効活用しながら、簡単なシェアの仕方をお伝えして使ってもらっています。

—一つの災害で利用件数は。

西日本豪雨で629件。一気にそれまでの10倍くらい支援の規模が大きくなりました。行政と連携できたからです。岡山県に僕らが車を運んだニュースをたまたま伊原木岡山知事が見ていたのがきっかけです。移動や車が水没した問題で行政がバックアップできないのをもどかしく思われていたそうで「ここを応援するのが被災者にとっていいんじゃないか」と産業労働部長を呼んで「ここを調べて、よかったら応援してあげてください」と……。

岡山県から自販連や軽自動車協会という地元の業界に要請いただいて車を集めてもらったんですね。13社のディーラーが協力してくれて43台集まりました。倉敷市は真備体育館という、支所機能が移った先の1室を鍵付きで確保してください、インターネットつきでした。総合公園で駐車場もありましたから車集めの広報を徹底的にやってくれたんです。仮設住宅の案内に僕らのチラシも一緒に同封してくださいました。車が合計100台くらい、半分は地元で集まりました。佐賀の豪雨でも連携の教訓が生かされて、僕が佐賀県庁で業界に声を掛けてくださいとお願いしたら動いてもらって、佐賀の自販連と軽自動車協会が動いてくれています。武雄市もぜひということで、インターネット付きで場所を確保してくれて、いろいろ広報もやってください、モデルができました。

岡山県とは災害連携協定を結びました。県が自治体と連携して場所を確保して、車の業界が車を確保して、僕らに対応に当たる内容です。石巻では電気自動車も扱っていますので、電力の供給も含めて協定を結んでいます。

—車が駄目になる災害は水害や津波がイメージしやすいけど、地震はどうですか。

水害の方が車に対するニーズは高いですね。でも地震でも下敷きになるし、結構なニーズがありましたね。熊本地震では、熊本の被災者から「車が被災してにっちもさっちもいかないんですけど、遠いから無理ですか」と差し迫った電話がかかってきました。

—日本カーシェアリング協会という名前の由来は。

バウさんが「ヤフーで調べてもどこも使っていない。この名前はどうや」と勧めて。ある業者は「その名前使いたかった。業界団体でないことは言っといてね」と言いました。

バウさんから「一時の支援ではなくて新しいものを作る。社会にインパクトを与える雛型を石巻で作ることこそが地域への貢献であり、いちばん大事」と教えてもらいました。コミュニティ・カーシェアを導入したいと思ったら気軽にできる環境を作りたい。寄付でもらった車なので、できるだけ有効活用したくて。この車から何が生まれ出せるか、最大限どんな貢献ができるのか挑戦する、そういう気持ちが大きいですね。

災害では東日本大震災級でも対応できる体制を2025年までに作りたい。西日本豪雨は広島も愛媛も被害が大きかったけど、真備中心の取り組みしかできなかった。複数地域で展開したい。複数の拠点を持ちながら運営できる仕組みを作っていきたい。活用できない車も集めてリサイクル企業と連携し、買取価格を活動資金にすることも始めました。

—ご出身は兵庫の姫路ですね。阪神・淡路大震災とは。

全く関わってないです。高校1年でしたけど支援に行ったりもせずに。部活で精一杯でした。ただバウさんと出会って、神戸元気村の活動も教えてもらって、感銘を受けて。そういう意味では神戸の経験という流れにあると思っています。

—関係機関との調整は大変でしたか。

県警がいちばん大変でしたね。許可、管理体制とか、責任者を明確にしないとイケなくて。カーシェアリングはヨーロッパが発祥で、キーボックスで鍵を管理することをヨーロッパではやっていたのでキーボックスを大量に手配したけど、人かシステムで管理する形でないと駄目だと言われて、困りました。でも、その方法で会話も生まれればいいかなとも思いましたから、従いました。

—長い準備期間が大切だったわけですね。

堂々とやりたいなと思ったので、行政機関とも色々面倒でしたが、まともにやっていきましたね。規約もチェックされて「もっとこうして」と言われて。この頃、携帯で掛ける電話番号は、県警交通規制課の係長が1位でした。それくらいやりとりしていた。それだけ粘り強くやったから県警や陸運局も応援してくれたというか認めてくれたというか。今は東北運輸局も応援してくださり、シンポジウムにも呼ばれるようになりました。

—仕組みが東日本大震災の前にあれば、直後から困った人たちを助けられましたね。

今だったらできますね。業界もある程度協力していただけますし、人の確保だけです。佐賀の支援は電話の受け付けは真備でやっているんです。真備で経験した人がやってくれて、それを基に僕らが車を貸し出す人を決めています。リモートでできますし、やり方は整理できましたので。直接対応する人が確保できたらもうできますね。

—ドライバーはどうやって確保を。

コミュニティができているところは、地域の中で手伝ってくれそうな人の目星がつくので地域の人が集めてくれます。ドライバーが全然違うところに住んでいるのではなくて、基本的には地域で完結するように。石巻はなかなかコミュニティができなかったの、1軒1軒回りながら「協力してもいいよ」という人を探して、お願いしています。

―カーシェア会へのサポートは。帳簿のつけ方とか、どうされていますか。

基本的に石巻の場合は事務局的なところを最初は僕らがやっています。それをどんどん渡していく感じです。前向きで、センスのいい人がどの地域にも1人くらいいてるんです。その人にちゃんと手を渡せば、僕らが人を雇うよりも地域にとっていい場合があるので、切り換えようとしています。遠方は石巻から通うのは難しいので、最初から自分たちでやってくださいと。僕らのところに来る地域は意識が高いので、できます。

―企業から受ける支援は新車ですか、それとも中古車。

中古車ですね。個人の方が結構多いですね。買い換えで下取りに出しても二束三文だったとか、最近は無免許返納で車を手放すという理由が多いですね。所有者が亡くなられて、「廃車にはしたくないので車を活用してもらいたい」という方も。使い終わった車は「売る」「廃車」にするという選択肢がこれまであったけど「寄付」はなかった。選択肢が増えました。

―遠方からの車の輸送費は。

基本、僕らが負担しています。石巻に運んでもらった帰りの旅費は負担してもらいます。こちらが運ぶときのガソリン代と高速代は僕らが払います。遠方でお金がかかるのに見合う車でない場合はお断りしています。車をお金に換えて活動費にする選択肢も作りました。

―この事業をはじめのころから「全国展開できるかも」と思いましたか。

最初から「できる」という感じでは思っていました。僕らが支所を作ってもやれますが、車を集めて貸すだけなので、車屋さんやレンタカー屋さんが本気になったら簡単にできます。コミュニティを作るサポートのノウハウは違う連携が必要になるので、僕らが見せていきますけど。徐々に災害時は、車屋さんやガソリンスタンドが無料で車を貸し出す動きが、小さな規模だけ出ています。コミュニティ・カーシェアは道路運送法の絡みもあるので、教えていく必要があります。省庁のアドバイザーを任せてもらえそうになってきたので、そうなれば国のお金で教えに行けますから、手を挙げたところがやれる仕組みが進むと思います。

自動運転はまだかかりますし、公共交通で賄える財源も限界がある。地域の助け合いや個人で助け合いをしている地域には、ルールや法に触れるところだけ教えてあげるとできるですよ。それなりにできるんじゃないかと思っています。

―交通手段が廃止、高齢化で運転もできない人ばかりの地域に導入できますか。

石巻のように、仮設住宅や復興住宅という形で、ある程度、人が集合している方が事業に向いている気がしますね。でも、岡山で山の中の140人しかいない集落でもうまく回っているんですね。地域のおじさんとおばさんが窓口やドライバーを担い、協力してやっている。ここの面白いポイントは、移住してきた若い人がうまく地域の中に入って、あまり出すぎないように気を遣いながら、サポートしたり、運転を時々手伝ったりしているんですね。

中山間地域はやっぱりニーズはあって、宮城県南三陸町の入谷でもテストが始まりました。地元の議員さんが課題に思っ、地域の人に声をかけて、3つの町内会の区長さん、老人クラブの会長さんと呼んで、やるぞとなって、ドライバーをそれぞれの地域で3名ずつ確保したんです。コミュニティがあるところはまとまれる。

—女性に比べて高齢男性は地域で孤立している人も多いです。加わってもらう工夫は。

地域の集まりには参加しなくても、何か関わりたい気持ちを持った人に担い手になってほしくて石巻で声をかけてきました。自治会役員をやっていない人がドライバーになって、存在感が出てきて役員になって、自治会長まで上り詰める人を3人輩出したんですね。1人が増田さんです。

—役割を与えることで性格も変わるというのは男の人に多いらしいですね。

そういう役割を付与していく、男性が参加しやすいところをつくることでもあるんです。お金や、運営の世界は男の人は関心があります。お茶っこには参加しないけど、3カ月に1回くらい数字の話が出る時は参加する人もいます。親睦旅行でドライバーとして協力してほしいとお願いすると、おばさんたちにすごく感謝されますから、お手伝いする喜び、充実感が芽生えてきます。その人の居場所、居心地のよさにもなるんですね。

—前回インタビューで増田さん、「石巻じちれん」の仕事がなかったら、酒好きで、1人暮らしだし酔いつぶれてどういう人生を送っていたか分からないと話していました。

そういう人は何人かいらっしゃいます。震災前は休日はパチンコ・競馬だったけど、おばあさんを送迎してありがたいと言われてたら、まんざらでもなくてライフワークに。地域の集まりに行く柄ではなかったけど、復興住宅の団地会長になった人もいます。

—運転なら誰でもできて、参加する敷居が低い。

不器用な人は運転しても何もしゃべらへんのですよ。乗せてもらったおばあさんは1人でしゃべるんですけど、おっちゃんもくもくと運転して相槌打つだけ。「あの人、話をよく聞いてくれて優しい」って、評判がうなぎ登りで上がるんです。

—トラブルはないですか。この利用者とこのドライバーは合わないとか。

多少の相性はありますね。あの人旅行に行ったらこの人は行かないみたいなことはあったりするんですけど、あまり首突っ込みません。一緒に旅行に行って一緒に飯食ったらそれなりに仲良くなったこともありますし。

—各地域の参加者はほぼ固定ですか。人数が頭打ちなのか、増えていくのか。

最初は様子を見ていた人が徐々に「続いているし、楽しそうだし、いいかもしれない」と1年後くらいに問い合わせすることもありますね。5人くらいで始めるんですよ、参加できる人たちで。毎月1人くらい増えて、1年後には15人くらいになって、2年くらいで20人～30人になって、運営できる体制になっていきます。時間の経過で安心する人たちがいるというか、地域の仕組みに徐々に慣れていくところはありますね。

「困っていますか」と聞かれて「大丈夫です」と答える人がいます。プライドもあると思いますけど、「一緒にお出かけしませんか」と誘うと参加できるんですね。レクリエーションで親睦が深まって「本当は病院に連れて行ってほしい」と、遠慮していたときから気軽にお願いしやすい関係になる。地域では「関係」がすごく大事で、単純に「困ってるでしょう」じゃなくて、違う切り口から参加しやすい形にする。社協や生活支援の団体から「困っている人がいるけど乗せてあげられないか」と相談を受けて、対応することもあります。

—石巻には移動支援の Rera という団体もありますね。

両方使い分けている人が結構いらっしゃいますね。1回あたりの負担は、Reraの方が安いです。ただ、月に使える回数とか、予約の期限があるので、困っているときはReraで、超えて利用したい場合は地域のカーシェアを利用する棲み分けはできています。僕らは全部の地域でできているわけではないし、Reraもカーシェアを導入している地域はできるだけカーシェアを使ってもらいたいみたいです。Reraにカーシェアを案内してもらうこともあるし、車椅子や介護が必要な人は地域では手に負えないので、Reraや介護タクシーを使いますね。

—そういう車を用意する自治体があるんですけど、石巻は。

やってないですね。僕らは福祉車両がありますけど、日常のカーシェアリングは普通の軽自動車です。地域の方が車椅子のおばあさんもお出かけに誘いたいような場合は、車椅子を積める車を貸し出します。みんなで押しながら花見なんて、素晴らしい助け合いです。ただ、日常でドライバーが介護も含めて手に負えるかと思ったら自信がないですね。

—印象に残っているエピソードは。

(団体の)ガイドブックに利用者のインタビューが載っていますが、三ツ股という地域のカーシェア会で95歳のおばあさんは「いまが最高なんです」と語っています。仮設では震災のショックでよくしゃべれなかったんですが、復興住宅に移ってグループに入ってお出かけするようになって、安心したのか、しゃべれるようになったんです。耳が不自由で補聴器つけて会話していくうちに、人気者になって。下の階の若い子はおばあさんを気にしていて、定期的に「元気でやっている」って覗いて自然な見守りもできています。このグループは「今がもう最高なので、続いていけたらいいな」と、復興住宅に入って2年たたないところで、ほとんど初めて会う方々ですけれども。すごく感謝されているんですよ、おばあさんから。行くと抱きついてきて。みなさんとお話するのがいいみたいで、2カ月に1回は旅行に行っていますけど、楽しみで生きる力になっているんじゃないですかね。

—ガイドブックには2人の男性ドライバーも登場しますね。

両極端な2人です。左は校長先生までした紳士的な方。右側のおっちゃんは震災前はパチンコをして過ごすことが多かったような方ですけれども「ろくなことしてこなかったから、人生の最後くらいいいことしてえなあ」と言っています。最近目の手術をしてドライバーは引退するんです。跡を継ぐ人と助手席に座ったりしています何か役割を持って関わってもらいたいと思っています。手術となったら会のメンバーが「ふだん助けてもらっているから」ってカンパを持ち寄って手術代を。お兄さんの介護とか、年金生活でやり繰りしながらなので大変な部分もあるんですね。

—地元のタクシー会社とは役割分担があるのでしょうか。

石巻では早い段階で業界との話し合いもできて、挨拶にも行きました。僕らの仕組みはいま病院に行きたいからといって行けるサービスじゃないです。事前に予約して、都合が合えば行けるし都合が合わなかったら行けない、片道は行けるけど帰りは帰ってきてとなるので、タクシーは使われています。タクシーの頻度が少なくなった人もいますが、それ以上に外出頻度が増えた方が多いので、タクシー会社やバス会社と一緒に外出する気運を作りたいと話をする、納得していただけます。岡山ではタクシーの連絡先を車に積んで、これで帰ってきてみたいな連携をやっていますね。カーシェアを始める地域はそのへんを気にして事前に話しに行ったりしています。だから心配していませんね。

一月々の負担は平均でどれくらいですか。

石巻で僕らはレンタカー代で3万5,000円もらっているんです。遠方はサポートの具合によりまして、サポート代を含めて2万円くらいのリースで貸し出します。レンタカー代は保険込みですけどリースは保険の契約が必要で、結局地域が負担する維持費は3万5,000円くらい。たくさん使う人がその分負担します。ちゃんと運営できている地域は役割や役員の手当を設定しています。予約を担当してくれる人が月5,000円手当を受け取っている地域もあります。

一収益性は高くないように見えますが、資金の調達はどのように。

寄付もありますけど、自主事業をしっかりやるようにしています。レンタカー、リースは安いけど、多少は利益が出るようにしています。車の寄付や大学の協力で安くできています。3万5,000円のレンタカー代を負担するのは厳しい地域もあるんですね。蛇田のような人数が多い地域は会員も50~60人で運営できますけど、人が戻ってなくてメンバーが増えても10人くらいの地域は、運営のやり方が変わります。3万5,000円のうち1万円は企業がサポートする仕組みも始めました。その代わりにステッカーで広告を。

一動く広告だ。

テスト的に5地域、企業から1万円ずつもらって。CCS スポンサー⁸という制度を始めて。助かるので利用者の好感度がいいし、僕らも交流の機会をプロデュースできます。石巻でできたら岡山や鳥取でも企業と連携して、適正な価格をいただける形を目指しています。

一寄付は震災直後と同じペースでいただいていますか。

復興予算自体は減っていますね。市から委託でもらっていたのが去年終わって、がくんときますね。寄付や関心は増えています。災害支援で全国で活動して、応援してくれる人も増えているので。カーシェア・ピットクルーという名前でファンドレイジングも。あの手この手で、復興財源がなくなってもできる手を打っているところです。日本カーシェアリング協会という名前では活動が伝わりにくいところがあります。動画や、「寄付車で作るやさしい未来」というキャッチコピーを作って、努力はしています。

一佐賀の支援と、倉敷との関係を詳しく教えてください。

倉敷で臨時職員だったメンバーが「佐賀の支援に協力します」と言ってくれて、電話番号をしてもらっている時に時給を払っています。倉敷で100台集めましたけれども、落ち着くとそんなに必要ないので、石巻に運んで管理しています。市も感謝してくださって、石巻まで車を運んでくれて。佐賀は倉敷から行った方が早い。武雄市長も車を置く場所を提供してくださって。九州は拠点が要ります。台風の通り道なので土地があれば20~30台置きたいくらい。真備で定期的にエンジンを掛けてくれる人もいますが、そうすると初動が楽です。助かる人が多くなります。

一理解者が全国にいればいいわけですよね。

岡山で行政と業界に協力いただいて、佐賀も含めて2つ事例ができました。宮城県ではできなかったですね。行政から連携しようと話してもらって業界は動きやすいようです。実績を積んで、内閣府の推薦みたいなものをいただけると進めやすいですね。

⁸ 取組に共感する企業が CCS (コミュニティ・カーシェアリング) を実施する地域を金銭的にサポートする仕組み。

—さまざまな事業はほとんど吉澤さん1人でお考えになってきたんですか。

ボランティアもスタッフも一緒にする中で生まれてきたと思います。石巻を助けたいという支援から入って、寄付の車を最大限生かそうと。雛型を作るのが僕の中ではすごく大きくあるので、ほかでも展開できるかどうかはずっと頭にあって「どうしたらできるか」「もっとシンプルにせなあかん」と意識しながら。

—パウさんとはどんなきっかけで出会ったのですか。

知り合いからパウさんの逸話を聞いて、ホームページ見てメールを送ったら1週間後に会いに来てくれたんです。「すごい人やな、僕1人じゃ受け止めきれへん」と思って「講演会をしますので、仲間と一緒にじっくり聞かせてもらえますか」と話をしたら「おう、いつでもいいよ」となって実現した講演会が10時間。3日間に分けて。2007年です。すごくよくて、主催した私がいちばんしびれたんです。講演会でプロジェクトをパウさんが提案されて「タケちゃんやってくれへんか」と言われ、一緒に動くようになって。ちょいちょいアドバイスをくれて、それが的確で色々なことを学習していった感じです。

—カーシェアを進めるのに、パウさんから具体的なアドバイスはあったんですか。

一部上場企業を回れというのがパウさんの提案。でも実績もないし、ちょっと無理なので「ターゲットを個人に変えたい」と言ったら「お前は何か1つでも人生でやり遂げたことあるんか。やり遂げるまでやり抜け」と言われたのがアドバイスでしたね。引き続きやったら、企業が協力してくれて。ちゃんと自分で考えるというスタンスでした。

—パウさんはカーシェアリングを以前から考えていらしたんですか。

神戸ではやっていなかったけど、常にアンテナを立てている人やったので、カーシェアリングと災害が結びついたんでしょうね。途中から「お前カーシェアリングやりすぎやから、違うことやれ」と言われたので、今だと何て言われるか分からないですけど。

—今後石巻で活動を続けるのか、あるいは何年くらいと区切られているのか…。

頑張ってくれるスタッフができたので、できるだけ渡していきたいなと思っていて。パウさんから「仕切り屋さんになるな、自分にしかできないことをやりなさい」と言われました。「何もやらないことがわしの仕事や」とも言っていて、回せるようになったら僕も引退というか、別のことを追求めたいと思うんですけど。

—スタッフは地元の方の割合が多いですか。

外から来ているのは僕以外に1人ですね。みんなしっかりやってくれて。石巻からほかの地域に教えていく、今度は支援する側になって恩返しをしていく構造を作りたいですね。

—地元の方々と被災された方もいっしょるわけで。

ほとんど被災していますね。最初は車の利用者からヘッドハンティングしました。平均年齢が高くて運営上苦労したんですけど、今は割と若いメンバーで切り盛りしていますね。

—事務所内に掲げた「教訓」のイラストがユニークですが、その心は。

ユーモアというか、遊び心を持ちながらゆとりある感じでやりたいなと思っています。パウさんの話も

いつもウィットに富んでいて、真剣に話していると思ったら全然違う話になったり。肩に力が入りすぎないようにしたいです。最終的には幸せになることやと思いますから、真剣にやるところは真剣にやりながら楽しむところは楽しんで。成長しながら人生の喜びも満喫してやれるように。人が育まれていく組織や活動、それが根底にありますね。僕はバウさんに「真面目すぎる」とよく怒られました。テーマとして真剣に向き合わなければいけない思いも多いけど、面白いところも入れておきたいなと思って。

— 運転は、地域に入りにくい男性も関わりやすいですね。

若干、引きこもりだったけど勇気を出してドライバーをやるようになって、地域に溶け込んでいる人もいます。社会や地域に参加するきっかけとして、割とスムーズな地域デビューができるということはありませんね。

— 「民民」でこういうサービスは、乗せる人が個人同士だと気を遣いますか。

個人の貸し借りはお金の話がなかなかしづらいですね。でも地域でルールを決めれば、車の維持費のことも話せる。石巻市が年間最大 18 万円まで補助してくれるのは、個人の車はやりづらいけど、専用の車は補助しやすい面があるんです。補助しやすい例として市がカーシェアリングを挙げてくれているくらいです。

3 ベビースマイル石巻 荒木裕美さん

災害が起きると、妊婦や子育て中の母親はなかなか身動きがとりづらいだけに情報や支援から取り残されやすい。子ども 1 人を抱え、妊娠中に被災した荒木裕美さんがこのことを痛感し、震災直後に立ち上げたのが NPO 法人「ベビースマイル石巻」だ。災害時だけでなく平時も育児で孤立しがちな母親にエールを送り、石巻の妊娠・出産・子育てをハッピーにしようとの 9 年間、イベントやサロン、各種講座などさまざまな活動に取り組んできた。命を守りたい、命を育みたい。震災のあの日から原点を大事にしながら、児童館運営や多世代交流といったよ



写真 5 インタビューにこたえる荒木さん



写真 6 ベビースマイル石巻

うに活動の幅を広げてきた荒木さんに 2 月 23 日、現在の活動拠点である 2 階建ての素敵な事務所で話をうかがった。

—ご出身は。

生まれだけは東京なんですね。仙台市宮城野区に移って小学 2 年生くらいまでいて、そのあと仙台市泉区に引っ越しをして、そこでずっと育ちました。

—震災前、旦那さんと知り合って石巻に来られて。

2006 年に結婚し、08 年から石巻で。何も知らないで来て、家と買い物以外はあまりつながりがいい状況でした。家族が一緒だったので、ひとりぼっちではないですけど。中学校が一緒だった子がたまたま石巻に来ていましたけど、あとは話せるような人はなくて。

—お子さんは 3 人…。

震災のとき、長男は 1 歳 9 カ月で今 10 歳、次男はおなかの中で妊娠 7 カ月。6 月に生まれて、いま 8 歳です。長女は 25 年の 12 月生まれで 6 歳になりました。

—震災前ですが、お子さんが生まれてママ友はできましたか。

妊娠して産婦人科、あべクリニックに通うようになってイベントが 2 つ、マタニティピクスとマタニティヨガがあったんです。参加して産前の友だちができました。いろいろ情報交換できて、自分には大きかった。妊娠期からのつながりは大事ですね。

—13 年春発行のベビースマイル石巻の文集『子どもたちへ ママたちがいま、伝えたいこと』で、11 年 3 月 11 日は親子ピクスのあと、午後は市役所や海側へ行く予定だったと…。

親子ピクスサークルはお母さんたちで運営を回っていて、すごいな、子育てしながらやっているんだと興味を持って近づいたら、一緒にやりませんかと言われて、チラシをまく担当をもらったんです。それだけでもドキドキで、この日もまきに行く予定でした。

—なんとなく予定変更して親子ピクスを休み、海の近くは午前中に行った、となっています。

時間がずれた日で、お昼を食べたところも定食のごはんが炊けてないと言われて、待ったりしたんです。2 時前ぐらいに家に帰って「なんか変な 1 日だな」って。いつも息子は昼寝するんですけど、寝ないので抱っこして 2 階でテレビ見ていました。そしたら震災が起きて、息子が寝るところに箆が倒れてキャーとなって、つかまるのが精いっぱい、ガタガタガタッて。お腹をどうしよう、上の子守らなきやって考えたけど、自分の体も押さえられなくて。マッサージ器があったのでつかまって、子ども抱えて丸くなっていました。

—お子さんは昼寝できなくて、ぐずっていたんですか。

おとなしくはしていました。震災のあとは電気もなくて夜真っ暗になったじゃないですか。暗くなると寝ましたね。子どもは手がかからなくてすごくいい子だった感覚がありますね。妊婦だったので、大きな動きや重いものは持てない。歯がゆかったけど、子どもと一緒にいるのが自分の役割かなと思っていて。

—あの日の話では、昼寝していなくてよかったということですね。

タイミングがずれたことが…。外に出たままだったらもしかしてって思います。私を引っ張ってくれたお友だちがいたんです。東京から来て、石巻を知りたくていろいろ動いていっぱい誘ってくれたんですね。私もその子が好きでくっついていました。2歳ぐらいの子がいて妊婦さんで、彼女の方が先に生まれる予定でした。一つだけ私、彼女と一緒にやってないのが太鼓で。その日、彼女は太鼓の練習で（海に近い）渡波に行き、帰りに亡くなってしまったんです。山のところで曲がったら上がっていくと地元の人なら知っている道で。一緒にいた人は曲がることができたけど…。

私もまさか、ここ水こないだろうという自宅にいたけど、下水があふれて流れてきて。一部損壊でした。その時どこにいるか、地理を知っているか救われたり犠牲になったりするんだなって。土地を知って大事です。今もどこ通ればいいのか、主人に聞いています。

—文集で、すごい揺れのあとで「私たちは大丈夫で一す」って1階の義理のお母さんに伝えたら、身を硬くしていた長男が大泣きしたと。3日目に買い物に外出したそうですね。

家に少し残っていたものはありましたけど、十分ではなくて。お店の棚にはお菓子しかなかったけど、それでもいいからと言って買ってきたのは覚えていますね。

—ご自身だけなら2、3日はなんとかなくても、お腹の子を気にされたでしょう。

ちょっと体調崩したんですね。お腹をこわしちゃって、トイレもないし、大丈夫かなみたいな不安な気持ちはあって。（かかりつけの）産科を主人が見に行ったら、「できるだけ早く復活するから」という話は聞いたけど「ぐちゃぐちゃだった」と帰ってきて。

—石巻全体が大変な状況で。

石巻のどこが駄目と分かって、友だちや仲間が気になりました。何が起きているか分からないし、携帯電話の電波が入るようになったけど、もしかしたらお子さん失っているかもしれないので。やっと連絡したら、みんなあちこち奔走していて、お願いして回っておむつもらったとか、全壊だったとか壮絶さが大きくて。1年経たずに記憶がどんどん薄れていくので、そのときこう感じたとか、どんな行動を取ったのかを文集にしました。

—文集はどのように呼び掛けましたか。いきさつをもう少し。

みんな心細い中で、日常を取り戻したかったし、集まることに意義を感じて気持ちがあく一致したんです。生きて、子どもを育てたり産んだりするのはすごいよねって。体験を残そう、文集がいいなとなりました。地震がまた来ると思っていて、次は情報やモノのことで連絡を取り合っただけで子どもを守ろうってネットワークをつくったんです。一斉配信のメールで。そこに呼び掛けたら「書いてみたいです」ってワッと集まって。

—震災の前から知り合いだった人たちが多いですか。

いや、違います。口コミで、新しいつながりが多くて。親子ビクスでつながっていた人もいましたけど、この会は解散しようとなったんです。バラバラになって続けられないねって。でもこういう場に助けられたし、これから逆に必要になる感じがすると思って。ベビースマイルやるんだったら新たにスタートした方がいい感じがあったから、賛同できる人いたら一緒にと声を掛けて。そのメンバーもいろんな面でサポートしてくれました。

—それでベビースマイル石巻に。

5月24日、任意団体として市民活動登録を市に届けました。お母さんたちがただ集うよりは、声を届けて、暮らしやすい地域にしたいという話を親子ビクスのメンバーにしたんです。アロマをしている女性がいて、NPOを立ち上げようとしたことがあって「裕美ちゃんの言っていることはこういうことだよ、NPOというのがあってね」と話してくれて。

—震災前はチラシを配るのでもドキドキだったのが、度胸がついて…。

全然違いましたね。吹っ切れていた。ドキドキしていましたが、多少場数を踏んで。ショックでしょうがなかったけど、亡くなった親友は3月に仙台に引っ越し予定でした。いまでも続けている体操の会があって、親友が私は引っ越しけどリーダーはもう一人と一緒に遊んだ子がやってくれる、その子を助けてあげてと言っていました。そんなことも自分の中にあっただけですね。じゃあなんかしていこう、やるんだと思って。

—スイッチが入っちゃった瞬間、覚えています？

いろんな考えていたことが一つにつながったときがあって、命ってすごいことを伝えたい思い、それには団体が必要ということ、つながった中にすごい人たちもいてNPOやNGO、ボランティアいろんな活動があると知って「じゃあこれ」となりましたね。妊婦や乳幼児に特化して、災害で受け入れたり動いたり、日々つながっていける団体が絶対必要だって。

—文集では「ここからは第2の人生。生かされた命を大切に全うしないと」と書いています。

そうですね。生きているからできることあるよねって思って。

—ベビスマを届け出た時は妊娠9カ月。間もなく出産という時期に。

産んだり育てたりってすごいな。自分がやろうとしていることは地域にも必要って気持ちが強かったんです。いま動かないで産んだら、産んだあと動けないのはって、変に焦ったのもありますね。段取りして産めば、あとは動くかなと思って、7月末にイベントを入れて6月出産。床上げして1カ月ちょっとなら大丈夫かなって。

—仙台で里帰り出産は考えなかったですか。

一瞬、考えたんですけど、焦ってという感じではなかったですね。はじめは石巻は無理かなって思いましたが。でも、石巻を出ようとは思わなかったですね。仲間ができていたのは大きい。参加したビクスは、自分の居場所のようでした。自分で広げたネットワークだし、居心地がよかった場所だったというのがありますね。

—7月末のイベントには予定通り復帰されましたか？

しました（笑）。いま人を雇用するようになってそんなことはさせられないですね。

—文集ができて反響は。

地域の人たちもそうですけど、外の人が連絡をくれてお話しさせてもらう機会は増えました。でも、お母さんたちは文集を出した時期でもあまり震災の話はしなかった。話をするのは違うというのか。仮設にいる方もいて、それぞれ状況が違うし、控えていましたね。

—文章を読まれて「ああ、あの人はこういう事情があったんだ」という気づきは…。

それはありますね。今だと「あの時こうだった」という話で「えーっ、そうだったんだ」ってやるけど、全然話さないから。泣いてばかりいるお母さんに「大丈夫？」って声を掛けると「大丈夫、ごめんね」って言うけど、語れないところがありました。そういうお母さんも参加してくれて、全壊して子どもに見られないところで泣いていた話があって「そんなつらい思いしていたんだ」って。「読んだよ」と言って、ちょっと話しましたが。みんな心に秘めながら、でもその中で生活を一生懸命再建しようとしていると感じましたね。

—体験を寄せてくれる人がたくさん集まって。

文集書くのに子育て支援センターにもお願いしてアンケートを取ったんです。質問は地元が石巻だけけどその時は北海道にいて戻ってきたママに書いてもらいました。自分は体験してないけど参加したいって言うてくれて。私たちは（外部の人が）何を知りたいか分からないから。必要だったのは何ですか、とか質問をそのママがつくって。たくさんのお母さんに聞いた方がいいねって、子どもがいて身軽に行けないので電話営業。私、日本生命で営業していたんですけど、スキルを活かしましたね（笑）。バンバンかけるみたいな（笑）。

—そうして活動が本格的になっていって。

楽しくてしょうがなかったです。今も楽しいけど、おんぶしたり抱っこしたり授乳したりしながら。私を見て「勇気出た」みたいな人が。「すごいんだよね」「おっぱいあげながら説明してさ」とか（笑）。イベントに来た人も「こんな感じでやっているんだ」って驚いて。

—ママさん像を変えた。

ちょっと崩れた（笑）。「子どもと一緒にやれることって結構ある」と思っていたし、見せることできたかなって。そのままのスタイルでプレゼンして、みんなドヨドヨみたいな（笑）。ドヨドヨしているの知らなくて、普通におんぶしながら「これがですね」「こうやっています」と言って、あとから「みんなびっくりしててさ」って聞いて「えっ、そうだったの」みたいな（笑）。ごめんあそばせ、みたいな感じで。助成金申請のプレゼンも「最強の仲間を連れてきて」と言われ、ずるいと思われたかな。これがスタイルなんだけど。

—13年春から毎週水曜、開成団地仮設のグループホーム「あがらいん」⁹を交流スペースとしてコミュニティカフェ「ボンボンカフェ」を開いていましたね。

生協で場所を借りていたある時に「これでいいのかな」って急に思って。楽しいし、みんな意義を感じているけど、やりたいのは地域の人たちとつながって、お母さんたちの声をまちづくりに入れてもらうことだったんです。ちょっと物足りないなって思ったんです。

お母さん仲間は増えたけど、地域ともっとつながりたい、ネットワークが全然ないって。その頃トヨタ財団の助成金を知って「いいな」と思ったんですね。多くの職種でつながって何かをする感じで。でも10人ぐらい申請書に書く欄があって、「誰もいない」と思って、申請書を眺めては閉じ、眺めては閉じの繰り返し。

⁹ 石巻市開成地区と隣接する南境地区に大規模な仮設住宅が建設され、2011年8月、開成仮設住宅の敷地内にグループホーム型の建物が建設された。その後、石巻市からCLC（NPO法人 全国コミュニティライフサポートセンター）が受託して2011年12月27日に「石巻・開成のより処あがらいん」の運営がスタートした。 <http://www.clc-japan.com/agarain/>

返しだったんですね。

申請を2日後に締め切る時に、助産師さんが来ました。京都から来ていた方で「荒木さんのチラシ見ました」って。彼女は助成金を申請しようと、石巻の子育てに関心がある人たちを集めたと言って賛同を得た人の名前を見せてくれて。「ええっ」って。私が見ては駄目だと思っていた助成金でした。産婦人科の阿部先生、女川の子育て支援運動の方、PTA 協議会の方、中央公民館の先生とか。キーになって動いてくれそうな人の名前があつて。私、「この助成金、ずっと見ていました。全く書けないけどこういうことできたらいいなと思っていました」と返したら、助産師さんが「代表を探しています」と言うんです。「ここまで集めたけど代表がいなくて困っています。代表になってください」って言われて「ええっ」って。「それ、代表しかないんですか」と言ったら「代表がいらないです」って。「皆さん忙しいし」と言うので「私ひまじゃないです。子育てして忙しいし」と言ったけど、これ変な出会いだけやってみるかなと思って、「じゃあやりましょう」となりました。

—ベビスマなど10以上の団体による「ボンボンカフェプロジェクト」。「絆」を意味する「ポンド」と「生まれる」を意味する「ポーン」の掛け合わせでしたね。

阿部先生がボンボンどうかたと提案して。私はお母さんたちとの集まりはしているけど、何にも知らない。はじめの挨拶で、代表になったけどどうしようと思っていると言ったら「お母さんと赤ちゃんのことをやるプロジェクトだから、リーダーはお母さんがいい。子育てでお母さんが感じていること、お母さんと子どもはどう過ごしているか、それが知りたい」ってみなさん言ってくれて、「いいな。やってみる」とのせてもらって。がががん引っ張ってくれて。あつたかい縁に恵まれました。助成金が出たので、それで1年間。

—グループホームという場所で子育てのスペースというのもユニークでした。

あがらいいさんが、お年寄りの元気づくり、生きがいづくりにお母さんや赤ちゃんとのつながりっていいと思うからぜひ使ってと言ってくれて。会場費も取らないで。

—お母さんたちは近くの開成・南境の仮設からというよりは、市内から車で来て…。

外からばんばん来ましたね。そういう場所が少なかったですからね。ボンボンカフェつくるとき、お母さんたちにアンケートを取ったんです。子どもと一緒に入れるお店もなかなかなくて、ゆっくり過ごせる場所がほしいという声があつて実践しました。ワンコインでランチ食べられて朝から夕方まで、お母さんたちが利用してくれました。

—市の指定管理も受けるようになって。

ママの必要な情報を楽しく載せようと「お産と子育てリソースマップ」というフリーペーパーをつくったんです。市役所も「この情報発信いいね」って言ってくれて、新生児訪問で配布してくれて連携できました。父子手帳を市がつくることになったとき、「私たちならこうします」と提案して、受けました。

—（聞き手が持参した「ベビースマイル」というフリーペーパーを開く）

これです！書きたいことありすぎて文字ちっちゃすぎ。虫眼鏡で見ますみたいなの（笑）。こんなちっちゃいフリーペーパー、ないぐらいちっちゃい（笑）。でも結構人気あつて内容もいいんですよ。文集をつくって、形にすること、伝えたいことを「見える化」するのも大事だなんて思っていました。編集なんてやったことないけど頑張ってる。

—石巻に限らず、行政との連携は難しいと聞くこともありますが、市に営業もしましたか。

営業しましたよ。はじめの頃はお母さんたちのアンケートを取れば「声をまとめたので見てください」と渡しました。こういう会があるので来てください、来られなければ当日の様子をまとめたので見て下さいって。市もはじめはそんなにノリノリではなくて「じゃあ預かって見ますね」みたいな感じでした。国の政策で（新しい）3本の矢に子育て支援が入ったとき、市がパートナーとして私たちの積み重ねを見てくれて。私たちもこだわりがないわけじゃなくて団体の考え方もありますが、市と寄り合わせるのも大事と思って。活動全部ではなくて、ここは市とうまくいかなという部分を委託にしていきました。行政との関係ってコミュニケーションが大事ですね。相手を否定するのではなくてきちんと伝えて、分かってもらうように。そのあたりはちょっとタブかもしれないです。

—お母さんたちの声を形にしたのが市やいろんな人を巻き込む上で大きかったのかな。

私の声じゃ駄目だと思っていました。みんなの声で届けなきゃいけない、だからこそ広く声をもらって。市も、団体のビジョンより、いろんなお母さんの声を知りたいんです。市から「声を聞きたいけど、持っていますか」と聞かれて「ありますよ」と答えたことがあって。団体の思いだけで突っ走っても、みんながついてこなかったら駄目ですよ。特定のお母さんじゃなくて、いろんなお母さんたちからたくさんニーズがあることを…。

—行政にとって、はじめて聞くような声だったのかもかもしれませんね。

あちら側のことは聞いてみたいですけどね（笑）。でもやっぱり、こういう団体なかったから。居場所に集まるお母さんって、発達のことや経済的に悩んでいる方、いろんな方がいます。相談機能を強くして、市とタイアップして委託でやっています。

居場所と違って相談になると、関係機関、保健師さんとの関係も必要です。市だからできること、NPOだからできることってあるし、気をつけないとすき間ができる。委託を取ることで実現したいことが実現できていいんですけど、難しさも感じていて。より市民のことを分かった行政になってほしいし、課題をやりわりつつしているけど、あんまりそっち向きすぎてもなって。市政の限界もあるから、NPOとしての市民力を強くするのが大事だなって、また戻りつつありますね。

—心が折れそうだったというお母さんがイベントに参加して、荒木さんから「来られただけでもハナマル」って声を掛けてもらったと書いています。

つながってきたことがまずすごい。お母さんは何かしら子どものためになると考えて来ると思うんですけど、何かできたらいいとか、できなかったから駄目じゃなくて、「今日ここに来て出会えたことに意味があるよね」とよく話します。イベントも「やるぞ」という気合いは捨てて、来られたことで満点。同じメンバーでやる会ではないから一期一会というか、こうして会えた奇跡を今日ゲットできた、いい日にしようねとは言いますね。

—子育てで悩まれているお母さんが、初めて受ける肯定的なメッセージかもしれない。

私なんか「荒木さんの考えすごいいいよ」って、肯定的な言葉をいっぱいかけてもらって「そうなの、そうなの？」って活動してきて今があるじゃないですか。自分の力以上のものを周りの人が見つけて引っ張ってくれるって自信になるし「これでいいんだ」とか、生きる力になるわけですよ。それをお母さんが体感しないと、「子どもをほめなさい」とか「自己肯定感が増える言葉がけを」って言われても、自分が感じられなくて、もらってなかったらできないし。だからお母さんが感じるのがいちばんいいし、同時に子ども

たちも、そういう言葉をかけられたらうれしいですね。子育てって「しなきゃ」みたいな感じだけど、親が子どもと一緒に社会に接して学んで、自分が育つことで子どもはそれを見ながら自然に育つかな。あんまり育てようって、思わなくてもね。

—荒木さんご自身がこの9年で育ったと思っていますか。

育ったと思います。こんないい子じゃなかった（笑）。いろんな方の話を聞いて、自分の見えている世界は狭かったんだって。もっと学びたいことがあるから、いろんな分野の話を聞きたいし、学ぶ育ちっていうか、私にとっては楽しい学びですね。

—お子さん、なんか言います？ ママのこの8年を振り返って。

（長男は）たまに神がかったこと言います。「もう疲れたからやめようかな」と言ったら「ママのことだからママが決めればいいんだよ」「でもママがやっていることはみんなにいいことなんだ」って。この間も「ちょっと疲れたな」って言ったら「ママならできるよ」「こんなに頑張ってきたじゃない」って。こんな励まし、してくれるんだ〜って。

—お子さんの励ましも受けながら、活動を続けてきた原動力って何でしょうか？

震災で感じた「命が大事」という気持ちを伝えたい。そこにいつも戻りますね。命をつなぐために、この活動は大事だと思えるから、やろうって。やりすぎちゃうんですけど（笑）。

—悩んだとき、亡くなられた親友だったらどうするかなって、対話することありますか。

震災から3年ぐらいは結構意識していました。いる気もしていたんですよ。そこにいるみたいな。ほんとに。夜中、こんこんとやっていると、いま来ているとか、ちょっとスピリチュアルなことが。その頃は一緒にやっている感覚があって。納骨をご主人がされて「やっと納骨できた」と聞いて、そしたら、自分の中でもちょっと気持ちが変わった感じはあって。お墓に報告に行くのも振り返るエネルギーになったし。いまは一緒にやっているというよりは、見守られている感じかな。「無理しないでね」って。

—ここの建物は5年前にできたということですが、利用人数やいきさつを。

年間で延べ6,000人ぐらいですね。イベントをしても（後では）会えないお母さんもいて「つらそうで泣いていたな」って。そういう方が戻ってこられる場所がなかったから、拠点がほしくて、空き家を借りて「みんなのひろば」をやりました。（建物がある）蛇田は移住した方も多くて市が拠点事業をするということで、手を挙げました。ただ（自前の）場所がなくてどうしようというときに、赤い羽根共同募金のチャリティホワイトプロジェクトという助成金から声がかかったんです。候補にベピスマイルさん入りましたと言われて「ええっ」ってびっくりして、2,000万円ぐらいでした。活動を始めたころに赤い羽根を使った後も見てくれていたそうです。建物でもいいですかと尋ねたら「大丈夫です」というので、ぎりぎり建てました。土地はパパに借金してもらって、建物はベピスマのものです。

—支援、助成金について振り返ってどうですか。

困った支援はあまりなかったな。支援をみんなにどう届けるか、手腕が必要とは思いましたね。お母さんたちがちゃんと「ありがとう」って言えるように、コーディネーターが大事でした。でも思いあって、支援して下さることはなんでもうれしかったですね。子育てフェスタというイベントを続けています。お母さんたち、支援して下さった人とは出会っていないので、直接会える場として。応援してくれる人と顔

が見えるのはいいですね。

—お子さんが大きくなった後、お母さんたちはどうつながっていますか。

熊本地震で「助けてもらったから、ものを送ろう」と一斉メールで伝えたら、古株のメンバーが持ってきてくれました。緩やかだけど、つながっている感じはありますね。ベビスマで活動して、別のNPOにスタッフで入った人もいます。顔が見えるからやりやすいし、全域につながったお母さんたちがいる。活躍していますよ。すごいと思う。仕事の広がりもあるし、PTAで小学校に行くと知っている顔があるし。やっぱりうれしいですね。

—災害時の妊産婦支援について、何か取り組まれていますか？

市に妊婦の防災を担当する課がないので、少しずつアプローチして、気になるところを聞いたりしています。冊子をつくりました。困ったらほかの人に言ってもいいとか、啓発をしています。新しい人がお母さんになっていくので、ゼロ歳向けの防災講座も。困ったら知り合いや身近な情報源が大事だと言います。地理や道路を知っておくことも。備蓄は3日間分と言うけど、妊娠7カ月すぎたら必ず買った方がいいよと言います。妊婦さんは備蓄品を持ってないので、避難所でも準備してほしい。急な出産もあり得るので介助の仕方や、赤ちゃん生まれたらホイルみたいなもので包むことも知っておいてほしいですね。

—備蓄の動きも出ている液体ミルクはどうですか。

母乳が出ないとか、水がなくて困ったお母さんがいたんですよ。そう思うと液体ミルクはいいのかなとなりますけど、母乳の面から言ったらなんとも言えないですね。使いようだと思うし、難しいですね。非常時におっぱいが出なくなるかもしれないし、役立つかもしれないから、必要そうな量を置いておくのはありかもしれないけど、母乳のよさもあるから。使うときに大事にする視点とか、日頃から考えておくことが大事なかな。お母さんたちで話し合っただけで賛否両論の意見があるのを知っておくといいですね。その中で私はこうする、というように選択する力がつくといいなと思います。

—避難所では、妊産婦さんが「困っている」と言える雰囲気があるといいですね。

マタニティマークあるじゃないですか。「妊娠中」ってめっちゃ分かるビブスをつくりたかったんです。母子手帳と一緒にビブスを渡して、困ったら着けてもらおう。社協さんやメーカーが話を聞いてくれたけど、頓挫して。でも言わなくても分かるっていいと思う。腕章でもいい。そう言ったら、ニセ妊婦が出るという声があつて。「ええっ」って(笑)。そこまで考えなかった。困っていてもみんな「言えなかった」って言うんですよ。周りも聞けないです。ただ太っている人かなとか。聞けないから、ビブスいいと思って。

—妊産婦さんの声を集めたのが貴重でした。

女性が妊娠中や子育てのことで発言するって、結構わがまま(と見られる)というところがありました。勇気があるっていうか。でも、必要と思っていることだから「わがままじゃないー」みたいな(笑)。みんなが感じた共通項はきちっとしたニーズだよと思います。

—初期の話をかなりうかがいましたが最近のご活動は？

市の指定管理で、児童館「子どもセンターらいつ」の運営をしています。5年契約で、3年目に入るところです。子どもの権利を柱にして子ども参加、子ども自身の力を大事にすることを学んでいます。震災で赤ちゃんが持つ力に気づかされたことと重なりますね。

—赤ちゃんが持つ力？

あのとき地域の人たちはすごく暗かったし、どんな話も相手を傷つける可能性があって言えなかった。でも「赤ちゃんが生まれる」という話はすごくまぶしくて、みんながうれしかった。地域をつなぐ、前向きにする力があると思ったんです。

子どもってお母さんの連れているものではなくて、一人の主体で一緒に仲間。子育てでお母さん悩むけど、そう分かると楽になるのではと思います。児童館で子どもたちとの会話や、声に耳を傾けることが増えて、もらうアイデアもあって、子どもってすごいと思う。もちろんお母さんも主人公だけど、地域をつくるのに子どもたちが主役という考えが私の中で大きくなっています。子どもを主として子育てを考えるように変化してきました。

—ベビスマのウィングが広がって。

悩み抱えているお母さんとは継続的につながっている方がいいけど、行政の担当者は代わる。私たちはずっとつながっていたいけど、4歳ぐらいで「ベビスマ卒業」という感じをお母さんたちから受けます。来なくなっちゃう。ずっとつながっていくのに児童館はいいなと思って。いいですよ。小学校に入って児童館に来る中に、乳幼児のときに出会っている子がいます。新たな出会い、お母さん抜きみたいな（笑）。その子のお母さん分かるから、子どもがしたいこと、お母さんを思い浮かべながら、トークできるのが面白いですね。

—ベビスマが、ベビー・チャイルド・スマイルになりつつある話ですね。

いろんなNPOが連携を深めることも必要だけど、少し長く、ゆるく多世代にかけて。

—いずれは老人ホームも（笑）。じっちゃん、ばっちゃん世代との交流もされてますか？

結構しています。新蛇田の「石巻じちれん」がある集会所で出張イベントをしています。独居のご高齢の方も多くて孤立が懸念されていますよね。多世代の場づくりのサロンで、おじいちゃん、おばあちゃんにもバザーのお店出してもらっています。子どもとすごく相性がよくて。フリーマーケットや居場所などごちやごちやにして、人がいっぱい来ます。

この場所も、めだかという小規模多機能型施設のおじいちゃん、おばあちゃんが来ます。月1回、歌ったり遊んだり。はじめそういう交流に「えー」というお母さんもいたんですよ。続けていたら、そのために来る子や、仲良くなる子もいて。いい場になっています。

—震災のあと進んでこられた、その行動力はすごいですね。

お子さんを亡くした人もいたし、そういう人たちのこともすごく考えました。子育てを前面に出すことで傷つく人もいるから。だけど誰かが始めないと進まないかなとも思って。だからそういう思いもありつつ進むぞと思って進んだ部分はあって。活動を大事だねって理解してくれる人たちがいたから強くなれたとは思っています。

—活動する上で外のご出身というのは大きいのかなと…。石巻を俯瞰的に見る目というか。

あると思います。動いたときの刺激がすごいですもんね。ずっといた場所じゃないから、全部が新しくつながっていく感じて外から来た人はあるんじゃないですかね。

—スタッフは何人いらっしゃいますか。

有償が20人ぐらいで、正職員は5人。みんなママさん。活動で出会った人がほとんどです。事務局費や運営費がずっとカツカツで、その割にやっていることは大きくて体制づくりしたいけど、子育て中のお母さんってめちゃくちゃいろいろあるし、難しいですね。

—今後どういうことに取り組んでいきたいですか。

事業はいろいろやっているし、これからもニーズがあればやりたいことがどんどん出てくると思いますけど、ちゃんと活動していける自立した体制づくりがしたいですね。

市との関係は悪くないけど、NPOと本当の協働ではない部分もあると思います。下請けになりたくないし、力をつけて対等のパートナーとして政策提言もしたいですね。相談の場所を増やすという話がこの間あって、手を挙げる予定ですか？と聞かれたけど、キャパオーバーで、時間も合わないの。そう言えるようになって、少しは育ったかな。

私たちもやりたいと思っている主要なところが市の委託なので、まずここで。助成金が震災でパーッと入ってきたじゃないですか。それでももちろんたくさんのができたけど、それが委託に変わって、次のステージに行きたいですね。お金じゃない、もっとボランティアな事業、小さくてもみんな困っていることで支え合う自主事業をつくりたいですね。

—ほかの地域でもこうした団体が増えるといいですね。ただ妊産婦さんは制約あるし、荒木さんのように超人的に動く人じゃないと無理でしょうか。

そういう活動をされている方は結構いらっしゃる。でもしんどいときってやっぱり何回かある。どんどん責任も背負うし、支えてくれる仲間や指導してくれる人がいると、グッと乗り越えて活動していけるかな。私も素人ですけど、困ったときに「あっ、そうか」と気づかせてくれる人がいるんですよ。活動をする人たちだけではなくて、そういう団体が必要だよ、っていう周りの人たちも大事ですね。

3人目を産むときに、ボンボンカフェ続けるのはきついなって思ったんです。活動できない、難しいなと思ったら、仲間が「とめないように頑張る」って言うてくれたんです。あがらいいの方も「荒木さんの出産ぐらいでできないならどうしようもない。いない間、守るから。帰ってこられるようにしておくから、ゆっくり産んできて」と言うてくれて。そういう言葉って「続けられる」と思えるんですね。だから活動を起こすことはできるけど、続けるとか、ちょっとつらいときに乗り越えるとか、そこにポイントはありますね。続けられる理由があるっていうか。

私、とめようとされなくてすもんね(笑)。誰もやめとけと言わない。大きいお腹してNPOセンターに、1歳8カ月の息子を連れて急に行っただけです。「お母さんたちが集まれる場所をつくりたい。NPOと関係ありますか」と聞いたら「あるよ」って。「どう思いますか」と言ったら「やったら」って。出会いの不思議さで応援されている感じはしますね。

4 ISHINOMAKI 2・0 松村豪太さん

「世界で一番面白い街」に。一般社団法人ISHINOMAKI 2・0は石巻を震災前の状態に戻すのではなく、新しい石巻をつくろうと震災直後から立ち上がった団体だ。何かやりたいことがあ

る人、まちを変えていきたい人たちが集まるプラットフォームとしてさまざまな事業を展開してきた。インタビュー日の2月23日も、中心市街地のガレージを改装したオープンシェアオフィス「IRORI 石巻」は多くの人でにぎわっていた。アート活動団体や家具工房など10以上の団体がブースを出展したIRORI 博覧会というイベントだった。この9年間、さまざまなアイデアを提示し、実践してきた代表理事の松村豪太さんにイベント終了後、お話をうかがった。



写真7 インタビューにこたえる松村さん



写真8 IRORI 石巻の二階事務室にて

—石巻を出たのはいつごろですか？

高校は北海道で寮に入ったので、石巻は中学までですね。一浪して、東北大学で憲法の研究を。大学院法学研究科前期課程修了です。修士論文のテーマは自己決定権でした。

—石巻に戻って、仕事は叔父様の石巻スポーツ振興サポートセンターで。

何となくだらだらと、実家に戻って。クラブマネージャーをしていて、比較的運動の苦手な人や子ども、障害者を主に対象にしていました。僕が直接やっていたのはウォーキングプログラムで、ウォーキングが流行る前でしたね。コースづくりで町の歴史やきれいな場所を探ることが、今の活動に無理やりつなげるとしたら（笑）、通じるかもしれないですね。

—2011年3月11日は。

事務所の2階にいました。経験したことのない、大きな長い振幅でゆらゆらと。びっくりしましたね。壁の一部が落ちましたし、クラブが入居していたスポーツ用品店も荷物が散乱しました。通りに出ると、信号もストップして、全部ベコッと落ちた土壁も散見されて、ただごとじゃない。直近に何度も大きな地震はあってその度に津波の情報が出たけど、来なかったり、来ても「何々浜で5cm観測しました」程度でした。今回もそのくらいかな、今までなかった大きな揺れだったので、道路まで津波が上がるかも、くらいの意識でしたね。40～50分後、川からお風呂の水をこぼしたような水たまりがパッと広がって、見る見る大きな水の塊、流れになったのを思い出しますね。水は1階の天井近くまで来たので、一晚。

—ずっと津波を見ていた…。

写真や動画を撮っていました。残念ながら、12年の台風でこの辺りは地盤沈下もあって水没して、ハードディスクが全部だめになる経験をしました。先日の（19年）台風19号でも被災して、4拠点持っているんですけど、全て床上浸水してしまい…。

11日は一晩暗い中で、建物は壁面がガラスだったんですけどそれも割れて、雪で非常に寒かったですし。プープー、車の警報音が、そこらじゅうで鳴っていて。静かな夜で、多分いつの間にか寝たんでしょうね。明るくなったら水が引いていて、膨大なヘドロを残して、干潟みたいになっていました。

12日は流された台帳、お金、重要な書類などを必死に探す叔父・叔母を手伝いました。電気も何もストップして「このままはよくないね」となって、日和山にみんな避難しているだろうという予想のもと、叔父、叔母、スタッフと歩き出して。記憶に残っているのが、見たことのない人が店内にいて。小売店ですのでもらな人が出入りするし、誰かが知っている人だろうと思っていたら、後で「あの人、誰？」となって(笑)。結果、泥棒で。用品店なので、2階の濡れていないところにはタオル、靴下、マフラーがあります。勝手に持って行った人を、目の前で何人か見ましたね。12日、まあ非常事態ですからね。営利目的ではなく生きるため、緊急避難的に必要なだけ持って、それが被災地のリアルなことでした。

—12日は、どこで寝たのですか。

たまたま着いたのが石巻高校の武道場で、運よく畳があつて。布団はないけどほかの床に比べると、ありがたかったですね。非常に狭くて、隣の人と横は触れるし、足も伸ばすと人の頭に当たるんで身をかがめながら。泊まったのは2~3日かな。

—そのころ、ご自宅・ご実家は。

中里という内陸の住宅地で、母と同居していました。父は変わり者で、蔵王に別荘を買って、仙人みたいな生活を。親と連絡が取れないので2日後ぐらいに家に向かいました。冒険でしたね。至るところが水没しているし、泥水の下は、ガラス、釘、蓋のなくなったマンホールがあつて。来る人来る人と「あちらは通れるみたい」と情報交換しながら、半日ぐらいかけて、水に胸くらいまで浸かりながらたどり着きましたね。周りが水没していたし、家も床上浸水したけど2階は無事で、家で寝る時間がだんだん長くなりました。

—まず初めにされた活動が…

ブログでの情報発信ですね。1~2週間たってインターネットが回復したら、スポーツ振興サポートセンターのブログで、揺れが来た時から撮っていた、ちっぽけなカメラのデータを時系列で上げました。たくさんの人に見ていただいて非常に大きな反響で、いろんなメッセージがあつて励まされて、返信するのも僕にとって心の支えになりました。

—どんな思いで、何を伝えようと思いましたか。

「これは伝えるべきことだ」というのは間違いなくありましたね。何か明確に、「どこそこが壊れて」「誰々が亡くなった」ということではなく、周りのランドスケープとしての、奇異な状況ですね。目の前、自分の把握できる範囲が、想像もつかなかったような、アメリカ映画さながらの状態になった、それに尽きますね。

—ヘドロ洗い隊という活動も。

身近な復旧作業の延長でした。叔父が経営するスポーツ店、事務所があるスポーツ振興サポートセンターの泥をある程度掻き出した後、お隣は高齢のお菓子屋さんなんですがご主人が不在で、頼まれたわけではないけど普段から助け合う関係だったので、自然と勝手に泥やり込んだ瓦礫を外に出しました。じゃあお向かいもとなって。泥掻いて困ることはないだろうと、数日間勝手に。ブログで書いたら、「必要なもの

ありますか」「スコップは足りていますか」と聞かれて、「もっと欲しいな」と答えたら、タオルや衣類と一緒に届いて。プライベートからソーシャルな活動に、少し意識が向きだしたのかもしれないですね。石巻専修大学にボランティアの拠点ができたと聞いて出入りもしながら。

日本財団の支援助成に応募してヘドロ洗い隊の活動が始まりました。ヘドロだらけの臭い状態を早く取りたいから、高圧洗浄機が手に入ればボランティアと一緒に回れると書いて。ブログを見てたくさん段ボールでタオル、子ども向けのお菓子の詰め合わせなどが届いて。中には着古した使用済みの下着じゃないかというものが雑然と入ったものもありましたが（笑）、非常に喜びました。クラブのクライアントでもあったので、小学校や幼稚園に届けて回りました。

—震災前に戻りますが、石巻に対するイメージはどうでしたか。

単純に「つまらない」という理由で嫌っていた、それに尽きますね。「シケた町」というか、経済的にも停滞して、人通りも少ない。時々いい映画をやっていた映画館がなくなってシネコンができていし、言葉にならない怒りですかね。カルチャーのなさ。「ようやく石巻に」というチェーン店ができて、たくさんの人が行列することに対する、嫌悪感（笑）。

—何かやろうとしたけどつぶされた、という経験は。

つぶされる前から諦めていた。「ダメだろう」と勝手に決めていましたね。やろうとしても、仲間が見つかる気がしないし、賛同者が出るかどうか期待できなかったから。

—石巻に戻って「こんなところにいるべきではない」と鬱屈した気持ちは？

人間の気持ちは微妙で、0か1か決められないし、文字にするのに困ると承知していますけど、高校で親元を離れて、青春を謳歌したわけです。寮を抜け出して停学になり、異性との付き合い、カルチャーに触れるといった楽しみを早い段階から。大学も一人暮らしで自由でしたし。映画を見るために深夜バスで東京まで行って、安宿で1週間過ごすこともしました。いつの間にか何事も自分次第だなと達観したというか。絶望して石巻に戻ったのもなくて、ある程度の情報や生きる知恵を身に着けて、インターネットもあるし必要な本も手に入るのだから「どこでもできる、実家でもいいか」みたいな。仙台で兄貴みたいに慕っていた人たちが石巻でバーのお店を出したのも、小さなきっかけだったかもしれないですね。

—シャッター街という言葉が当てはまる状況はどうでした？

なるべくしてなったという、自分もその一部として、自然と受け入れて、諦めていました。高校・大学で、戻ってくる度に寂れ、店舗数は減るばかりで「ここも閉めたんだ」となくなるのを感じていました。憤りを感じるのではなくて「そういうことだよ」と。

—シャッター街になる前の光景は記憶にありますか。

かろうじてあります。感受性の高い高校時代はなかったもので、微妙といえば微妙ですが。石巻川開き祭りの人通りやエネルギーは圧倒的であってワクワクしました。他校の生徒や異性と交流があるかも、みたいなドキドキもありましたし。あとは洋服ですね。今はZOZOTOWNとかで購入する人が多いかもしれませんが、おしゃれな人が仙台ではなく、石巻のジーンズ屋さん、セレクトショップで買っていました。洋服が買えるのは、カルチャーに関するある程度の指標だと思っていて、ちゃんと洋服がある・買える商店街ではありましたね。

—昔から、お祭りはワクワクするものだったと。

僕はマッチョじゃないので(笑)、オタク的な領域、ナード・ギークと思うんですけども、まあ嫌いじゃないですね(笑)。「みんなで御輿を担ごう」というタイプではないですが。ハレとケのハレですかね。非日常な、楽しい日、楽しい時間。

—叔父様のお店は、どれぐらい、中心市街地で続いてきましたか。

ネット販売を手伝って、ホームページ作っていたので、2010年か11年で40年目だったと覚えています。キャッチコピーで、「実店舗40年の信頼」と書いたので(笑)。

—叔父様や叔母様が、かつての賑わいを懐かしそうに語るのを聞かれたことは？

親族から昔の話を聞く環境ではなかったですね。叔父の家は沿岸部に近く跡形もなく流されて、少しでも写真を持ち出して、がれきの中をとぼとぼと一緒に行き帰りしながら昔の話をしたかな、ノスタルジックな映画みたいに(笑)。震災の1カ月前、父親の妹の叔母が亡くなったのですが、おしゃれな服屋さんをしていました。まだピザが出回っていない小さいころ、初めて食べさせてもらって。いま「元氣いちば」がある場所にあったデパートで、叔母さんにエビグラタンを食べさせてもらうのが楽しみで。新鮮ですね、こうして話す機会(笑)。

—石巻の外からやってくるボランティアに対する印象は。

ただただ「ありがたい」に尽きました。多くは写真を撮るのを遠慮して。中には「ちょっと控えろよ」という人もいましたが(笑)、地元の人間として「撮っていいよ」と言ってあげたかった。大変な数の方に助けていただいて、来てくれるだけで嬉しかったですよ。

—この災害は、そういう人たちなくしては対応できないという思いでしたか。

うーん、微妙に違うかな。想像もつかなかったこの非常事態は、地域だけでは済まない、つまり「みんなでやるべきことだ」という意識だったと思います。国も挙げて、世界規模でこれは取り組むべきだという意識が当たり前になりましたね。

—ボランティアから「ご飯がおいしい」とか、石巻への肯定的な言葉を聞きましたか。

最初の3か月くらい、食べ物は確保するのも大変でしたし。ある程度落ち着いて、店舗が再開してから「お魚美味しいですね」と、社交辞令か分からないけれども(笑)、悪い気は当然しないですよ。でも、「美味しいかな」って(笑)。漁業が身近な街ほど魚に対するリスペクトがないですから、当たり前に入るので。観光客が目の前の魚の食べ方を聞くと魚屋は十中八九「生かな」と。素材に恵まれすぎて美味しく調理する工夫が生まれません。

—2・0は立ち上げが非常に早いですが、時期は諸説あって(笑)。

最近、公式には11年5月としています(笑)。今のコアメンバーが集まりだしたのは4月の終わりぐらいからで、夜も「闇鍋」をしながら意見交換するようになりました。電気がともらない、全壊した元旅館の2階で、泥から掘り起こしたお酒を酌み交わして、限られた材料で鍋。建築家、都市計画の研究者、広告代理店のプロデューサーの人たちと、地元の元の状態に対する問題意識を持っていた人間で「こういうことしたら面白い」とやりとりして。「松村君、ゲストハウスを作ればいい」と言われてピンと来なかったけど、バックパッカー、外国人が泊まって交流するドミトリー形式で、「それ、いいね」となって。

それまでは「どうせ誰も分かってくれない」とウジウジとしていましたが、いろんな人たちが、自分のアイデアにもいろいろ返してくれて「今なら、町を変えられるんじゃないか」と企画を練りだし、対外的に名前があった方がいいと ISHINOMAKI 2・0 という名前ができました。「面白い人」たちとの会話は毎晩全ての時間、刺激でしたね。

—震災がなければ会わなかったような人たちに気後れは。

いや、全くない、ワクワクするばかりでしたね。名前を知っている大きな企業の人、大学の人たちとの交流は、楽しく、好ましいものでしかなかったですね。そういう話ができなくてウジウジしていたところに、会話ができる人が来て、「やったぜ」って（笑）。

—個性や主張が強い人が入ってきて、さばくのに苦労されたことは。

清く正しくみたいな、ドストレートな復興には、初めから「違いますよ」と表明したのでやりやすかった。つまり、面倒くさそうな人には距離を置く、そこは匂いで判断してきたところはあります。何回かめめたことはあるし、人間関係は難しいですけど。

—2・0の意味として、ソフトウェアのバージョンアップで使われる「2.0」と、インターネット用語で双方向の情報発信を意味する「Web2.0」の二つが使われてきましたが。

今、公式見解は（笑）シンプルにバージョンアップとしています。フルバージョンチェンジした状態を2.0とも言うので、元の状態に戻すのではなく、バージョンアップした町を作る決意表明ですね。Web2.0から取ったのも嘘ではないですが、最近通じなくなって（笑）、面倒くさくて話さなくなったところもありますが、そう記録に残していただいた方がいいかもしれないですね。インターネットは情報の受け手と発信者が分かれてスキルやリソースのある人だけが発信できていたのが、ブログとか誰でも送り手になり得る状態を、Web2.0と定義していて、双方向の状態を大事に。石巻の外と中とか、支援される側・する側とか区別するのではなく、「みんな主体的に自分ごととして動く」ということですね。

—震災直後の5月ぐらいからこうした発想が出てくるのは、すごく早い。

もともとそう思っていたということでしょうね。前の、眠りゆくような状態を受け入れていたけれども、よしとはしていなかった。「この非常時、混とんとした状態に、昔のしがらみとは違うアクションを起こそう」と思い、ノロシを上げ、旗を掲げよう。

—『石巻 VOICE』というフリーペーパーを4回出して、面白い人たちを紹介しました。

中心メンバーで、東京工業大学の真野洋介さんが「私の石巻」というインタビュープロジェクトをしていました。今の真実を、必要な情報を浮かび上がらせようと、VOICE というメディアに形作られたところがあります。真野さんから「どういう人がいいか」と聞かれ、編集会議で誰を取り上げるか、名前を挙げて。僕も取材される対象でした。商工会議所の会頭（笑）や魚市場の社長といった肩書のある人ではなく、市井の人を並べるのは初めから決めていました。活動している人、思いを持っている多様な人を拾おうとしましたね。

—どんな捉え方でこのVOICEを出すことを考えていましたか。

僕の個人的な魂胆で「戦略的に仲良くなりたい、もっといろいろ協力したい」という人へのアプローチツールでもありました。賛同者というか、仲間を集める手段（笑）にもなったらしいなど。それだけが目的

ではないですが、そういう下心はあったと思いますね。

—2・0は刊行物が多いですね。

最初の VOICE の成功体験で、便利なツールということを実感したことがあると思いますね。早い段階から、ボランティアだけでなく、ゆくゆくは、デザイン、イベントの企画を請け負って、広告代理店的な生業を持ちたいと思っていましたから、協力してくださる人がいるうちにいただけるノウハウはいただいて、作れるようになりたいと。

—最初の片付け、清掃から活動の質が変わっていった。

使命感というか、やる必要があったのも事実ですし、やって喜んでいただける達成感や自己承認感もあったと思います。ヘドロ洗い隊はもともとやっていた NPO で日本財団の助成でやったので、2・0とは別です。ただ、おっしゃる通り、生存するため、身近な人を助けるためというところから、どこからか活動の質が変わったのはあると思いますね。

—闇鍋は、どのように始まったんですか。

芦沢啓治さんというイケイケで異端児的な建築家が言い出したと思いますね。夜の情報交換に、単純なミーティングよりいいだろうと、スーパーで手に入れた豚肉や野菜を持ってきて鍋を囲んだんですが、とてもいいアイデアでした。お酒も入って一緒に鍋をつついて直感的な交流も生まれますし、非常に優れたアイスブレイクにも。その人たちと会うときは常にその形式で(笑)、「鍋はつきもの」でした。地元側は、僕と阿部久利さんという闇鍋の場の提供者。阿部さんは、震災の前の年、老舗旅館からダイニングレストランに大規模な改修をしたばかりで担当したのが芦沢さんでした。阿部さんのお姉さんは芦沢さんの親友と結婚していて、家族ぐるみの付き合いです。芦沢さんは兄弟分でありクライアント、作ったばかりの建物が流された阿部さんを助ける意識で石巻に入ったんですね。仲間に(理事の)西田司さんという横浜でオンデザインという事務所をもっている建築家や東工大の真野さんがいて。建築家は避難所の間仕切りプロジェクト、「自分たちのスキルで、少しでも住環境をよくする」と来ていました。町をもっと知るにはどうすればいいかと阿部さんに言ったら「松村君という、ヘドロ洗い隊という面白いことをやって、ブログを書いている子がいる」と紹介してくれて。

—2・0が始めた活動の第1弾を挙げてください。

4つあって、外向けにまず VOICE の発行。VOICE に差し挟んだ町歩きマップの発行。また、石巻川開き祭りに合わせて、ノロシを上げるお祭りをやろうと7月23日から10日間、STAND UP WEEK を始めました。そしてそのコンテンツの1つでもあった復興バーですね。

—震災直後でも川開き祭りは続けることになりましたが、一緒に加わる感じでしたか。

伝統あるお祭りとは別のベクトルで、やんちゃな、野外ライブ、プロジェクションマッピング、バー、カルチャーの匂いのするイベントを被災地、瓦礫の中でやろうというのが一つと、いろんな意見がある中、石巻最大のお祭りをやるのが決まり、勝手に盛り上げに一役買おうという、二つの側面がありましたね。

—復興バーはどんな発想から。

闇鍋のアイデアで「自分たちのバーがあつたらいいね」(笑)って。町歩きしながら、使えそうな店を探しました。そこは大家さんも知り合いで快く格安で貸して下さって、津波で壊滅したけど手づくりで清

掃から改修までみんなでやって、オープンしました。STAND UP WEEK の企画の一つでもあったので、無理やり7月に間に合わせて。仲間と話せる拠点・基地になるし、プロバガンダというか（笑）、ISHINOMAKI 2・0 的な思想を、説教臭くなく、バーのカウンターを通した楽しい交流から広められるのではという下心も。非常に効果を発揮しましたね。石巻の飲食店で当時、3 番目ぐらいに開いたレベルで、新規店舗ではもちろん最初です。「地元の人間がオープンさせた」というので、耳ざとい人はこぞって来てくれました。ノリと言うか、いかに楽しい、エンターテインメント的なものにするかは意識していました。最初は「被災地に来てみたかった」という研究者、ボランティアがほとんど。最初の入口が復興バーという方は相当いらっしやると思いますね。夜の時間を大事にしていたし、石巻のアイデンティティの一つとして、この繁華街があると思っていましたから。

—石巻に入る知り合いに「2・0に行けばたくさんの刊行物や情報がある」と勧めていました。

2・0 がプラットフォームになれるよう、柔らかく、多様で、意識的に戦略を持って、IRORI もフリーで誰でも利用できるようにしました。場を作るには、椅子、テーブル、できれば電源、Wi-Fi があればいい。2011 年だとゲストハウス同様、コワーキングスペースやシェアオフィスも、一般的ではなかった。建築家からの刺激的なアイデアで作りました。

—石巻に移住してもらうことにも、力を入れてきたと思いますが。

「人の誘致」は団体の立ち上げから掲げていました。ただ移住だけを求めたというのは事実ではないですね。逆に「移住しなくてもいいよ」、地元の人が「どうせ3年後にはなくなるんでしょ」と言ったら「いなくなってもいいじゃない」というのが我々の立場です。

奇抜な建築家、いろんなことを知っている面白い人、ヘンな人、ある意味天才がこの町を選ぶ状態を作りたい。STAND UP WEEK のようなイベントや、(インタビュー日の) 今日のイロリ博のようなイベントをした方が、そういう人たちは楽しいだろうし。便利なだけのビジネスホテルよりゲストハウスがあった方が町としてイケているし。お洒落なカフェやバーも必要という意識です。そういう人に届くメッセージの出し方も考えています。絆、頑張っています、復興という言葉だけでは目的を達成できないと最初から考えていましたね。

—絆、頑張ろう、復興（笑）ではなくて心掛けていた、キーワードはありますか。

面白さ、じゃないですかね。

—石巻に移住してきた人たちって、どれぐらいいるんでしょう。

何回かリサーチしましたが、どういう理由でどのくらいいたら移住になるのか、難しいですね。一応、200 人くらいと表現したことはあります。ボランティアをきっかけに、石巻で活動を続けたというのが定義ですね。起業だけでなく、漁師さんの手伝いをするような人も含めて。現在の ISHINOMAKI 2・0 スタッフの構成では地元出身が 59%、U ターンが 5%、I ターンと完全な移住が 36% ですね。

—宿泊施設が満室の中で、使われていない物件を手作業で改装した「復興民泊」も早くから。

11 年 9 月から 13 年 12 月まで 2 年 4 カ月。ボランティア向けの宿泊場所がないのは誰でも気付くニーズでしたけど、ゲストハウスの発想ですね。楽しみを作りたくて。共有のテーブルがあって、夜な夜な学生やボランティアのおじさんが交流を楽しんでいました。

—教育も、力を入れてきました。

教育プログラムの「いしのまき学校」は13年6月からですね。今も教育は、重点テーマの3本柱の一つです。今のメインは高校生が対象ですが、スタートは違います。慶應義塾大学のシステムデザイン・マネジメント学科と一緒にワークショップを始めました。石巻は課題だらけなので、資金繰りに困った経営者や、販路がなくなった魚屋さんといったお題ホルダーにお題を出してもらって、システム指向・デザイン指向の理論に沿って「プロジェクトの作り方や、思考の整理を学びましょう」と大人向けでした。ただ、皆さん、自分の生業が全然復興してないのに、そんなお遊びみたいところに来る余裕はなく、集客に苦戦して(笑)。いい内容だったと思うんですが、「未来を作るのは高校生」と目線を変えて。出る杭としてへんな高校生、教室やクラスでは浮いて居場所がないかもしれないけど、僕らみたいな高校生を作ろう(笑)と。高校生ゼミの第1回は13年8月に。小林武史さんが先生になったりして、まちづくりのワークショップをしました。

—出る杭は出てきましたか。

出ましたね、いっぱい。有名大学に入った子もいました。うちで教育事業を担当している斉藤誠太郎さんという理事はETICの右腕プロジェクトで入ってきました。教育畑なので、僕が「教育の世界は、だからダメなんだよ」と言って意見がぶつかることもあるんですけども(笑)。彼は出る杭、意識が高い一部の人間だけではなくて、広く教育の場を作ることを真摯にやって、すごいですね。県の事業を取ってきて、1つの学校の総合学習を年間通して任せてもらったりとか。今、関係している高校は6~7校あって、若手の社会人に直接触れあう企画がメインですね。

—学校に変態的な人を送り込むと、いろいろ衝突しないのですか(笑)。

そこは大人というか、小賢しく。無理のない範囲で、相手の事情を推察しながら「ここまでは許してくれるかな」というところを。もちろん、初期のいしのまき学校みたいに、出る杭が勝手に集まる場面は、無茶苦茶とんがった人を用意しますよ。

—ご自身を振り返っても、若いときにこういう出会いがあると大きいですか。

プレゼンでは暗黒の5年間と表現していますが、小学校高学年から中学3年までは思い出したくもないですね。明確ないじめを受けたわけではないけど、関係性に絶望していましたね。石巻だけじゃなくて閉鎖的、封建的な地域がほとんどです。いろんな対話があって、交流する場は中学時代の僕にこそほしかったですよ。つまらないマイルドヤンキーだけの教室ではなく、外にも理解し合える友達や先輩がいると希望を持た。だから外との距離を近くするのはやるべきことですね。昔は技術的、コスト的に、東京とつながるのはしんどかったですが、今はゼロコストで、東京の人とテレビ電話で話せるわけですから。

—3本柱、ほかの二つは何ですか。

一つがコミュニティ。もう一つがいい表現がなくて言葉にすると陳腐で嫌ですけども、地方創生的な(笑)、移住とか、地域資源を活用した起業ですね。

コミュニティは安定してインパクトを出し続けるのは難しいですけど、全国的展開から、石巻市も地域システム事業をすることになり、立ち上げサポートを委託事業でいただきました。2地域、山下という市街地エリアと桃生という農村エリアですね。両エリアで自治協議会を立ち上げたんですが、小さな自慢として、事業が終わってからも付き合いを続けさせていただいています。あとは、よりセーフティネット的な復興コミュニティですね。仮設住宅から災害公営住宅への移転サポートを市から受けて、説明会をさせ

ていただきましたし、県の助成金にエントリーして活用して、地域づくりの企画を、細々とやっています。

コミュニティってみんなやりたがらない。文化、食、音楽、子ども、いろいろなテーマでいちばん集客に苦戦します。コミュニティという言葉で「何かやらされるんじゃないか」(笑)という警戒感がある領域に残念ながらなっていますね。やらされる、仕方なく町内会長を引き受けるコミュニティではなく、自分たちで決められる、地域を経営できる。本当にやりたいお祭りをできるのはワクワクするよねという発想で、決してうまくいっていないですけど、そこに希望を持っています。頑張っている自治会長さんを応援して、参加者が増えるような企画と一緒に考えて「餅つきは外れ知らずのキラーコンテンツですよ」(笑)、「ハロウィーンは受けますよ」(笑) みたいに言って、盛り上げを手伝っています。

―市から委託を受けるなど、団体が行政から認められつつあるなど感じた時期は。

明確にありますね。市役所から大きなお金で、正式にお仕事として付き合えるようになったのは2012年かな、弘前大の北原先生がきっかけです。北原さんが、最前線である課長・課長補佐レベルの「課を横断した意見交換会をしてはどうか」とセットしてくださって「先進地である岩手県北上市など外部の情報を聞こう」という場で、「頑張っている人もいるよ」とISHINOMAKI2・0をPRしてくれて(笑)。主流に対するアンチテーゼのようなことをしていましたけれども、それがきっかけで、役所から目を掛けてもらうようになりましたね。

―行政の制約がある事業だと、2・0の暴れ馬的な良さが小さくなる懸念はないですか。

そこはさじ加減(笑)というか、僕の職能が発揮されるのはそのさじ加減で(笑)、いちばん大事にしています。難しいところもありますけど、それでもやっていかないと永遠に機会はないですから。ただ、そのバランス感覚は他の団体よりもあるかもしれませんし、市やお上が必要としている事情に自覚的に合わせていこうという視点も持っていますね。

―自治体からのお金と、団体の資金的な課題は。

公的なお金にズブズブ、ジャブジャブとお世話になっていますよ(笑)。「被災した中で地元の団体が頑張っている」と後押しもいただいて仕事をしていて、行政系の委託事業あるいは指定管理が圧倒的に大きいですね。助成金の割合は年々減っています。堂々と公共事業を取って、ちゃんとためになる成果を出していきたい。ただ、間もなく復興期間が終わりますので、我々がいただいている委託事業の財源もなくなるはず。その先も、単費でもちゃんと発注してもらえるようにするとか、市の方と一緒に提案して国のお金を引っ張ってくるという視点も持ちながら、持続可能な形で稼がないといけないという問題意識も持っていますね。

―石巻は2・0に続いて多くの起業家を輩出しています。2・0が代表団体の「コンソーシアムハグクミ」で「石巻ローカルベンチャー白書」を出すまでになりました。

我々は「人の誘致」を掲げていたわけですが、石巻に来ているローカルベンチャー、石巻独自の言い方で「なぞベン」、謎のベンチャーの略ですが、そういう人たちの存在が希望ですね。ボランティアをきっかけに移住して、小さな生業やプロジェクトを始めている人たちが相当数います。移住者だけではなく、寿司屋の息子さんが起業した家具メーカーが世界規模で展開していたり、呉服屋の3代目の方が立ち上げたこけしブランドが人気になったりしています。噂を聞きつけて、次の世代も関心を持って訪れています。

— 3・11 を挟んで今は、豪太さんが「自分 1 人だけではない」と思えるような状況に…。

阪神・淡路大震災もボランティア元年と言われ、コレクティブハウスが広がったりしましたが、3.11 の前と後も、パラダイムシフトと言うと大げさかもしれませんが、世の中の考え方が変わったと思うんです。ゲストハウス、コワーキングスペース、クラウドファンディングは、3.11 の前はそれほど一般的ではなかったけど、今は誰でも知っている。サイクルツーリズムもそうです。そういったものに 3.11 はきっと関係なくはないという仮説を持っています。お金をうまく稼ぐのではなく、思いを集めるとか、みんながつながって考える楽しさが 3.11 以降…、もちろんたくさんボランティアが泥だらけになった経験も含めて、あると思っているんです。そういう価値の広がりを一緒に進めたいというのはありますね。

— 石巻に対し「イケるじゃないか」と見方が変わったタイミングは。

震災を通してですね。まだ電気が開通しない非常事態の中で、面白い、濃い人たちがいると知って、触れ合えたことですね。音楽に造詣の深い、学生服を扱っている洋品店の店主（笑）、体制なのか反体制なのかわからない、マリファナ文化好きの人（笑）。呉服店のご夫婦のように本当に素敵な方、魅力的かつ包容力のある人たちが多いことに気づきましたし、そういう人と一緒に活動できるようになったのは大きいですね。

— 地元の閉塞感というのは全国でも感じている人は多数います。石巻では打破するのに震災がきっかけになりましたが、地域をかき回すのにほかに余地がありますか。

おっしゃる通りで、石巻だから、被災地だから、2・0 のような活動が成り立つものではないという仮説を立てていて、2・0 の暖簾分けみたいなことを初期から掲げました。フランチャイズでお金を取るのではなく、震災があったから生まれた・気付くことができたアイデアは、どこでも汎用性のあるものになり得るという意味です。JC や商工会議所みたいなものにもヒントがあると思っていますし、本当にやりたい人が選択して集まれる場、機会をどう作るかというところに関心がありますね。

— 地方都市を元気にするため、どうすれば。

一つは、多様な価値観・多様な経験を持った人との交流の場を保証し、機会を作る。それは行政がやるのか、JC 的な存在がやるのか。もう一つは、ショック療法的に現状のヤバさを明確に自覚する人を増やして、「新しいプレイヤーを入れないと、誰もいなくなるよ」と認知する機会も持つべきですね。あとは拠点ですね。うちの IRORI のようにオープンで理由なく集まれる、柔らかな場を、いかに面白い形で設定できるかだと思います。

— 豪太さんのまちぐるみ結婚式にも言及しますか（笑）。14 年 2 月、人前式を呉服店でして、日本料理店などを披露宴会場として回り、料理人が腕を振るって。

パートナー（で理事の）渡邊享子さんが（笑）、すごい幅広く活躍しているというアウトプットはあります（笑）。既成概念や決めつけにとらわれない空間の使い方を意識していて、まちぐるみ結婚式は、アウトプットの集大成みたいな部分はありますね。映画館が流されてできた広場にベンチを並べ残ったビルの壁に映すとか、ガレージを改修すればイベントスペースができるとか、スナックで女子力をテーマにしたシンポジウムをしたらとか、常に面白さを作ろうとしてきました。まちぐるみ結婚式も、IRORI 前のこの通りを会場にして、いろんなポイント、ポイントを、第〇式場にして廻って、中継したら楽しいんじゃないかというノリでやったわけですけども。

むすびにかえて

今回インタビューさせていただいた4人は東日本大震災の被災地、宮城県石巻市で早い時期からそれぞれ団体を立ち上げ、この9年間、文字通り奔走してきた方々である。多くの人を巻き込みながら、掲げたテーマに真摯に向き合ってきた結果、いずれも石巻を代表する団体となり、いまや宮城県外でも名前が知られた存在だ。

4人の方々は面識があって、これまでの活動に深い敬意を抱いてきたので、私はこのインタビューが楽しみで仕方がなかった。既に数多くの取材を受けてきているのに、あらためて貴重な時間を提供して下さり、感謝申し上げたい。それぞれ2〜3時間に及んだインタビューは内容が実に豊富で、宝のような言葉群だった。テープ起こし原稿を何度も読み返してそれぞれの歩みを共有させていただく作業はこの上ない喜びであった一方、限られた紙幅に収めるべく、割愛せざるを得ない作業はつらくもあった。

今回の4人は東日本大震災から社会的な活動を本格的に始めたという点で共通している。地域づくりや子育て支援といった全国的な課題に取り組んできた開拓者であるし、起業家であるし、地域住民の伴走者でもある。仮設住宅が解消されて新しい局面に差し掛かった石巻のリーダー像に触れていただけたらと思う。その活躍ぶりから「震災前は何もしていませんでした」という言葉がにわかには信じ難い。もともとリーダーの資質が備わっていた方々なのだろう。

災害があると多くのNPOや一般社団法人等が誕生し、起業する人が出てくるのはほかの被災地でもよく見られる。新潟県中越地震や熊本地震などもそうだし、東日本大震災のほかの自治体でも容易にリーダーの顔が浮かぶ。災害という悲しい出来事がそれらの人々の背中を押し、スイッチが入って様々なことに取り組んでいく。阪神・淡路大震災以降の災害を見てきた研究者が提唱した「復興バネ」¹⁰という言葉も存在する。

なぜなのだろうか？ 地域外からのさまざまな支援者に勇気づけられ、秘めていた力が引き出されるからだろうか。地域での自分の立ち位置が明確になり、災害であぶり出された課題が決定的に「自分ごと」と化すからだろうか。声を上げにくい障壁だったしがらみや異質なものを排除する空気が一掃され、肩書がない人でも動きやすい環境ができるからだろうか。生き残った者の使命感、一緒にいることがかなわなくなった人の存在が行動を促すのだろうか。解はないが、そうした視点で聞き取り内容をまた振り返ってみたいと思う。

¹⁰ 「被災という辛い体験でくじけるのではなく、逆にこの逆境を糧にして人として成長し、新しい災害文化を形成していくことを意味する…。復興バネという造語は、阪神・淡路大震災（1995）で生まれ、新潟県中越地震（2004）で市民権を得た」（2015年復興・減災フォーラム「届け 震災バネが伝える復興への想い〜KOBÉからTOHOKUへ」）。

関西学院大学災害復興制度研究所 HP : <http://www.fukkou.net/research/symposium/20141203.html>

被災地であろうがなかろうが、どの地域にも今回取り上げたような素敵な人がいるはずだ。東日本大震災のほかの自治体でもこうしたインタビューシリーズ化が可能なら、尊敬する方々がいる。災害のように、地域全体にインパクトを与える悲しい出来事がないと、くすぶっている才能が開花しないのではもったいない。4人のうち、もともと石巻に住んでいた3人が石巻や北上の出身ではなく、若いころに石巻を出た経験がある人もいることは興味深い。俯瞰した目で地域を見ることができる。松村豪太さんが指摘するように、災害ではない形で、各地の眠れる力をどう引き出すのか。よそ者を入れることや、いったんは地域を出る経験は無駄ではないかもしれない。高齢化が進み活力が低下した日本全体で考えなければいけないことで、面白い人々と交流する場づくり、感受性が高い高校生の巻き込みといったインタビューに登場する模索がもっと共有されたらと願う。

リーダーの周囲や地域にも素晴らしい人たちがいることが分かる。佐藤尚美さんにアンケート結果を丁寧に報告するお年寄りや復興応援隊のメンバー、海水浴場を盛り上げる地域内外の人たち…。吉澤武彦さんを全国の被災地で手伝う人たち、ドライバー経験から自治会役員になった人、パチンコさんまだったが住民の送迎に生きがいを感じるドライバー…。荒木裕美さんに「考え、いいよ」と惜しみなく肯定的な言葉を掛けた人たち、産休中もカバーし、文集や刊行物を手伝った人たち。松村さんの思いやアイデアと一緒に実現した仲間、商店街などの「魅力的かつ包容力あふれた」人たち…。リーダーの思いや志に共感した輪があってこそ実現してきた活動である。

この4人が市役所との関係を良好に保ってきたことも特筆される。総じてNPO等には個性が強くて行政との協調が苦手なリーダーも少なくない。行政には「新興勢力」である団体への警戒感もあるだろうし、信頼関係が構築されなければ公金を投じて委託事業などを任せることにならない。北上の集団移転事業で佐藤さんの活動は行政と一体だったし、吉澤さんにとって市の補助や亀山市長の応援は心強い支えだっただろう。荒木さんや松村さんは粘り強く市と関わりながら指定管理や事業を委託されるなど一目置かれる存在になった。日本カーシェアリング協会の倉敷市や武雄市での活動を見ても、行政がNPOを支えることは被災者や市民の支援につながる。行政の限界や制度の隙間を埋めて地域と関わる団体の意義を自治体はきちんと認識して欲しい。石巻の実情は正直「行政と民間の協働」というレベルに達していないと私は思うが、一歩ずつ、が大事である。松村さんが指摘したように、民間側から働き掛けないと協働の機会は「永遠に訪れない」とみられる自治体が多い。有力な民間団体に職員を一定期間出向させたり、人事交流をするような自治体が出てくることを期待している。

前回のインタビュー(『専修大学社会科学研究所月報』No.672)で取り上げた「石巻じちれん」増田敬さんの活動は外部から入ってきた吉澤さんとの出会いが端緒とも言える。移動支援 Rera

の村島弘子さんは移動困難者を対象にした活動で、吉澤さんの違う形でのアプローチと併せて読むと気づきがある。増田さんが常駐する集会所で荒木さんのイベントが行われている。豊かなつながりをインタビューシリーズとして報告できるのもうれしいことだ。

新型コロナウイルスの影響についても触れたい。2月のインタビュー時は流行という段階ではなかったが、その後の感染拡大で石巻も団体の対外的な活動はほぼ停止に追い込まれた。イベントの参加費や事業収入、寄付といった資金面で苦境に陥り、職員の給与支払いに悩む団体も少なくない。活動の拠点が閉鎖され、イベント等でスタッフや市民が交流することもままならない。民間団体がいちばんの価値を置き、心を砕いてきた人同士のつながりや場づくりができない。NPO法が阪神・淡路大震災を契機に成立してから22年、市民活動の最大の危機であると感じている。事業主や飲食店の苦境は比較的知られているが、NPOや一般社団法人に対する支援は心もとない。休業要請に伴う感染拡大防止協力金に、NPO側の働きかけでようやく支援対象になったという話も聞く。民間活動に対する行政の理解や想像力が問われている。休眠預金の有効活用や、助成財団の適切な支援がないと、活動休止や廃業に追い込まれる団体が相当出ると危惧している。

最後に、今回のインタビューでお世話になった4人それぞれに言及したい。

石巻市の北上地区は震災前、美しいヨシ原や釣石神社、追分温泉に行ったことがあり、震災の1カ月後に訪れた光景に衝撃を受けた。道路沿いの住宅がみな姿を消していた。佐藤尚美さんは宮城県が開催した復興応援隊の研修会¹¹でご挨拶したのが最初で、その後、地区最大の仮設住宅団地へ向かう上り道の入り口にある店舗にお邪魔した。集団移転に取り組んでいた福島県新地町をご案内したこともあるが、各集落の合意形成を本当に地道に支えてくれたと思う。本人も語ったように、これほど黒子役に徹して地域を支えた復興応援隊はないのではないかと。地域の話し合いのお膳立てをしていく作業の連続だった。インタビューを打診した際に「事業として何かをしたわけではないから」とおっしゃっていたが、佐藤さんが大変なご苦労をしながらも、北上にこだわり続けてきたその思いを、何より知りたかった。その一端をお伝えすることができたのではないだろうか。

佐賀の支援まっただ中の吉澤武彦さんにインタビューしたのは昨年9月だが、その後に台風19号が襲来し、石巻の事務所も浸水して何台かの車が使えなくなった。多数の車が水没した各地からSOSが殺到し、地元の宮城県の丸森町にまず拠点をつくった。福島県いわき市、栃木県と次々に展開し、目の回るような忙しさだったと思う。あとがき執筆中、九州支部設立のメールニュースが配信されてきた。課題解決に取り組む団体の本部が東京である必要はないし、先

¹¹ 第一回復興応援隊員等合同研修会「ゆるやかにつながろうミーティング」(2012.12.20@エルパーク仙台セミナーホール)。 <https://www.pref.miyagi.jp/uploaded/attachment/124147.pdf>

駆けとして成長してほしい。コロナ禍でお茶っこやお出かけも自粛が続いているが、石巻の利用者がドライバーを気遣ってマスクをプレゼントしたとか、カーシェア会の会員がお菓子を配りながら高齢会員の様子を確認したといった話にほっとするし、厳しい中でも続く支え合いが、吉澤さんの歩みに対する地域からの「答え」だ。

荒木裕美さんは団体初の刊行物である文集をたまたま手にしたのが取材のきっかけだった。その後は事務所があるマンションの一室やイベント会場等でお会いし、拠点が欲しいというお話をうかがっていた。インタビューはその念願の自前の建物で行われた。イベントは盛況続きだし、市の委託事業も引き受けるようになって成長ぶりは著しい。どんなママも受け入れる肯定的な空間づくりを心掛けてきたからだろう。人見知りの子どもを抱えて不安だったという母親がイベントに出向き、荒木さんに「泣いても大丈夫！」と声を掛けてもらい、今はスタッフになったという話が印象に残る。各地で「孤育て」している母親を支える場が増えることを願うし、人は「支えられる側」から「支える側」に転換し得るということだと思う。コロナ禍のオンラインシンポジウム¹²で「当たり前前に聞けていた声が聞こえなくなった」と厳しい現状を紹介されていたが、悩んでいる母親や子どもたちに「それでいいんだよ」と再び声を掛けられる日が早く来てほしい。

松村豪太さんからは、これまでもお話を断片的にうかがってきたが、手掛ける事業があまりにも多彩で、十分フォローできていなかった。中身を逐一聞きたいとも思ったが、一つのテーマだけでも相当なやりとりになって、制限の紙幅を超えてしまうことは容易に想像できた。そこで、現在のメディアでは「今さら」聞けないし、関心もないかもしれない震災当時や直後の話を中心にうかがうことにした。震災前の石巻に対する感情も含めて ISHINOMAKI 2・0 の原点を示せばという方針で臨んだ。かつての模索や、直後の動きを記録として読んでいただけたらと思う。震災直後からずらりとそろえた情報群は東北随一で「本気」を感じたし、「情報プラットフォーム」空間が早くから実現していた。ゲストハウス、コワーキングスペース…。時代を先取るだけでなく、多様さやわくわくするような面白さを備えた空間を今後も定期的に訪ねてみたい。

(5 月末執筆、所澤新一郎)

¹² 2020.5.12、石巻において、このコロナ禍、学校休業中の子どもたちの現状や支援の在り方などを話し合う ZOOM オンライン・シンポジウム「いしのまき×こどもトークライブ」が、子ども支援に取り組む NPO 法人 TEDIC によって開催された。 <https://www.tedic.jp/2020-05-09/>

参考文献

- ◇ベビースマイル石巻有志の会, 2013, 『子どもたちへ～ママたちがいま、伝えたいこと～』金港堂出版部
- ◇コンソーシアムハグクミ, 2019, 『石巻ローカルベンチャー2019』
- ◇コンソーシアムハグクミ, 2019, 『石巻 2025 会議平成 30 年度報告書』
- ◇ISHINOMAKI2・0 事務局, 2011, 『石巻 VOICE』vol.1
- ◇いしのまき浜日和製作委員会, 2013, 『いしのまき浜日和～浜の暮らしと旅の本～』ISHINOMAKI2・0
- ◇石巻市北上地区復興応援隊, 2018, 『北上復興かわらばん特別編』
- ◇復興庁, 2019, 『「新しい東北」事例集』
- ◇復興庁, 2019, 『コミュニティ・カーシェアリングを拓けよう』
- ◇日本カーシェアリング協会, 2019, 『コミュニティ・カーシェアリング実践ガイドブック vol.2』
- ◇日本カーシェアリング協会, 2019, 『石巻カーシェア道中記 Vol.2』
- ◇P. A. Sorokin, 1942, *Man and Society in Calamity*, DUTTON. 大矢根淳訳, 1999, 『災害における人と社会』文化書房博文社。
- ◇桜井政成編著, 2013, 『東日本大震災とNPO・ボランティア』ミネルヴァ書房)
- ◇所澤新一郎・大矢根淳, 2019, 「減災サイクルのステークホルダーと事前復興への取り組みの実相(Ⅰ)―被災地石巻での聞き取り調査から:「仮設住宅」生活を射程に―」『専修大学社会科学研究所月報』No.672。
- ◇津久井進, 2020, 『災害ケースマネジメント』合同出版。

Historical origin and customary land tenancy of rural community in Nigeria

Regina Hoi Yee Fu

Introduction

This paper is a record of the historical origin and customary land tenancy of the agricultural villages in Nigeria, West Africa. The ethnic group of the people concerned are the Nupe, which is the most dominant ethnic group in Niger State of Nigeria. The research was conducted in the area locates on the so-called “Middle Belt” which stretches across central Nigeria longitudinally between the eighth and the twelfth parallels north. The Middle Belt is populated largely by minority ethnic groups and is characterized by a heterogeneity and diversity of peoples and cultures. In the Niger State, the other major ethnic groups apart from the Nupe are the Hausa, the Gwari, the Fulani and the Kumuka. Literature concerning the rural Nupe community are very rare (Nadel, 1942, 1954; Forde, 1955; Masuda, 2002). The contents of this paper are mainly based on the information gathered by direct observation and unstructured interviews with local people during interrupted fieldwork conducted between 2004 and 2009. This paper aims to fill the information gap about the rural society in Nigeria, as information about the society of this country has been limited due to prolonged political instability since the 1980s.

Research Area

The area in which I conducted fieldwork for this paper is the “Cis-Kaduna” region of the Bida Emirate of the Niger State. Niger State locates on the central-north geopolitical zone of Nigeria¹. The drainage of the state is dominated by the Niger River which forms its southern boundary. Bida Emirate is one of the eight tradition authorities of the Niger State, a successor to the old Nupe Kingdom established in the fifteenth century. Figure 1 indicates the location of the research area covered by this study. The term “Cis-Kaduna” was found in the Gazetteer of Nupe province published in 1920 (Dupigny, 1920: 6). It is a geographical term used to describe the districts east of Kaduna River (Nadel, 1942, 181). The river is the largest tributary of the Niger in the state. It runs in the middle of the Bida Emirate from north to south. On the opposite side of the Cis-Kaduna is the “Trans-Kaduna” region. These two terms originated from the Nupe name of the Kaduna River, *Lavun*. Cis-Kaduna is the district east of Kaduna River, and Trans-Kaduna is the district west of Kaduna River. The domain of the current Bida Emirate covers territory of

¹ Niger State came into existence in 1976. The State was carved out of the former North Western State and comprised most of what was before then known as Niger Province. During the British protectorate from 1900 to 1960, the region where the Nupe people lived was called the Nupe Province which was put under Northern Nigeria. While the Niger State is now officially recognized as locating at central Nigeria, historical literature referred the state as a section of the northern region.

six Local Government Area (LGA)², which are Katcha, Gbako, Bida, Lavun, Edati and Mokwa.

The largest town in this area is Bida, which is the second largest city in the Niger State. It is the headquarter of the Bida Emirate ruled by Bida *Emir*, who also possesses the title of *Etsu Nupe* (king of Nupe). The dominant ethnic group of the research area is Nupe, with an absolute majority of them being subsistence farmers. It is estimated that there are close to 1.5 million of Nupe in Nigeria, with majority of them reside in Niger State³. Table 1 indicates the population and population density of Bida Emirate and Niger State. The figures are taken from the 1963 and 2006 population censuses. Population and population density of the Niger State and the Bida Emirate has multiplied by three folds in four decades. The Bida Emirate takes up for 19% of the land area of the Niger State, and in 2006, 27% of the Niger State population inhabit in the Bida Emirate. It has a higher population density compared with other parts of the Niger State. Within the Emirate, the Cis-Kaduna region is especially dense. The difference in density of population east and west of the Kaduna River lies in the historical fact of the Fulani conquest of Nupe and the immigration of the Fulani rulers and their huge army, warriors, slaves, courtiers, and other dependents into the area east of the Kaduna, where they settled, occupied the land, and built their capital and numerous villages (Adeniyi, 1972a).

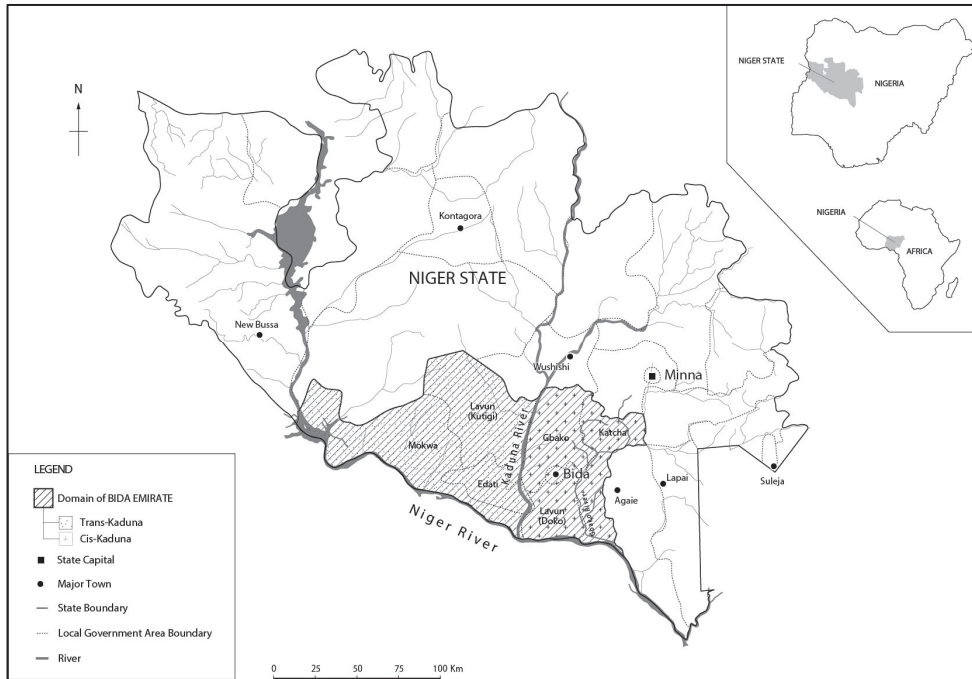
The Nupe Society

The Nupe people live in the heart of Nigeria in the low basin formed by the villages of the Niger and Kaduna Rivers (Forde, 1970:17). Nupe is the dominant group in Niger and Kwara States. They were first described in detail by ethnographer Siegfried Nadel, whose book *Black Byzantium*, remains as an anthropological classic. Accounts of the Nupe society can also be found in Forde (1970), Ibrahim (1992), Mason (1981) and Ismaila (2002). There are probably about a million Nupe, principally in Niger State³. They are primarily Muslims. Christianity was brought into the area since the mid-nineteenth Century. Traditional religion still exists but is weak. The Nupe trace their origin to *Tsoede* who fled the court of *Idah* and established a loose confederation of towns along the River Niger in the fifteenth century. Nadel refers to *Tsoede* as the culture-hero and mythical founder of the Nupe kingdom. The Nupe were converted to Islam at the end of the eighteenth century by Mallam Dendo, a wandering Fulani preacher, and were incorporated into the Fulani Empire established by the *jihād* led by Usman dan Fodio after 1804. Mallam Dendo's second son, Usman Zaki became *Etsu Nupe* (King of Nupe) in 1832 and the Fulani conquerors have been ruling the Nupe of the Bida Emirate since then. The city of Bida fell to the colonial British forces in 1897, but the traditional administration of Bida Emirate has been preserved until now.

² The modern public administration of Nigeria operates at a three tiers structure. The first tier is the Federal Government, the second tier is the State Government and the third tier is the Local Government (LG). There are 25 Local Government Area (LGA) in the Niger State as of the time of this research.

³ The Nigerian official census in 1991 placed the population of Nupe at 1,062,000. The most recent estimation made by the US Center for World Mission, a Christian organization, is 1,472,000. <http://www.uscwm.org/index.php/about/>. (Accessed on 30 August 2012). The World Christian Database estimates that 92% of Nupe are Muslims, 5.2% are Animists and 2.8% are Christians. <http://worldchristiandatabase.org/wcd/>. (Accessed on 13 July 2020). Nupe account for about 1% of the total population of Nigeria.

Figure 1. Location of the research area, Cis-Kaduna, Bida Emirate, Nigeria⁴.



Source: Produced by author based on information gathered in fieldwork.

Table 1. Population and Population Density of Bida Emirate and Niger State.

Locality	Population (2006)	Population Density per km ² (2006)	Population (1963)	Population Density per km ² (1963)
Bida Emirate	1,052,998 (27%)	80	385,093 (32%)	28
Cis-Kaduna ⁵	542,781.5 (14%)	94	196,963 (16%)	43
Trans-Kaduna	510,216.5 (13%)	69	188,130 (16%)	21
Niger State	3,950,249 (100%)	52	1,194,508 (100%)	16
Niger State (Excludes Bida Emirate)	2,897,251 (73%)	46	809,415 (68%)	14

Source: Data derived by author based on 1963 and 2006 population censuses.

⁴ It should be mentioned here that multiple sources of information have been combined in order to produce this map. First of all, official map indicating the boundary of all local government area of the state was almost inaccessible. What I could get was only a poor-quality copy of the map produced in 1997 by the Survey Division, Ministry of Works, Transport and Housing of the Niger State Government. Over the past years more Local Government Area has been created, from 9 in 1976 to 42 in 2002. However, some new LGAs have been dissolved because they were not gazetted by the National Assembly. The LGA number then went back to 25. This history leads to some confusion of the boundary of LGAs. Second, there is no available map showing the current domain of the Bida Emirate. I draw the boundary by referring to a few maps showing the ancient kingdom of Nigeria, as well as information provided by the Secretary of the Bida Emirate Council.

⁵ For figures of 2006, population of new Lavun LGA is evenly divided into two and allocate to Cis-Kaduna and Trans-Kaduna. For figures of 1963, data of the old Lavun LGA is used for Trans-Kaduna, and data of Gbako is used for Cis-Kaduna. Number and boundary of LGAs have substantially changed from 1963 to 2006.

Historical origin and customary land tenancy

1. Villages founded by migrants

Bida was the original habitation of the Beni sub-tribe of the ancient Nupe. Before the Fulani conquest in the early nineteenth century, Bida was just a small walled town of the Beni. It was after 1856 that the Fulani conquerors made Bida the new capital of the kingdom, after they had restored to power with the protection and help of Bida inhabitants to fight against the usurper (Ismaila, 2002: 58-61). In 1857 when the British delegation visited Bida, it was still a temporary war camp with an estimated population of 12,000 and most of the people lived in grass houses (Mason, 1981:73). From about 1860 during the reign of the second *Emir*, Masaba, Bida was transformed from a war camp into a fine capital city, and since then had become the political and cultural center of the Nupe even until today.

Changes brought by the Fulani conquerors have shaped the history of the rural communities in Cis-Kaduna region of the Bida Emirate. As one of the most intense battle-fields, there was serious bloodshed in Bida and its surrounding regions. After years of wars and rebellions, many indigenes were displaced, captured and killed. In order to hide from the warriors, some indigenes moved their settlements to different places, and some even hid on top of hills where living condition was very harsh (Masuda, 2002: 255). On the other hand, many new villages were established by new comers brought by the Fulani conquerors. In the conquest of Nupe country, the Fulani royal family appropriated three categories of tribal land: all no-man's land between villages; all village land which had been lying fallow for long; and finally the land reserve of some villages. These lands were basically divided up geographically between the three royal houses. Of the land owned by the royal houses by the right of conquest, the *Emir* or royal princes of highest rank bestowed parcels of land as fiefs on their followers, such as military leaders, members of the nobility, mallams or servants of high status, for the services rendered. These fief holders mostly lived in the capital and never worked their land themselves. They settled their slaves on it, and had it worked by their labor (Nadel, 1942: 195-199).

During the reigns of early Fulani *Emirs*, slave was the dominant force of production and slave raiding expeditions were carried out frequently. Slaves were captured from anywhere most importantly for the annual tribute to be submitted to the overlord in Gwandu⁶, and when there were excess slaves, they could be traded to the coast from the ports on River Niger (Mason, 1981, 71-113). Many slaves were also put to farm and work for the Fulani aristocrats. They were settled by fiefholders on their lands surrounding Bida and made to farm. These slave villages were called *tunga* (Nadel, 1942: 36, 196). Under slavery crops produced in *tunga* were mostly extracted by fiefholders, and a portion was in turn to be submitted to the Fulani royal houses as tribute. There were a lot of *tunga* villages being established especially during the reign of Masaba. In order to pay the British for the guns and powders traded, Masaba imposed taxes on

⁶ Masaba had to send 300 slaves to Gwandu as annual tributes. By 1867 the number of slaves requested increased to 400 (Mason, 1981: 90).

his vassals, mostly in the form of Shea butter obtained from *tunga*. In addition, as other emirates exchanged slaves for the guns and powders re-exported from Bida, these slaves were also made to fill newly founded *tunga*. It was recorded that Masaba had established 694 *tunga* during his reign (Mason, 1981, 85-94). In Umaru Majigi's reign the slave population settled in *tunga* still increased in a high annual rate (Ibid: 113). It was uncertain when slavery was actually abolished in the Nupe kingdom, but it was probably during the British colonization that slavery gradually ended.

There was another type of *tunga* villages which were founded by dependents of fiefholders. When fiefholders no longer needed soldiers for their private armies, and when they could no longer support a large household of henchmen and hangers-on in the town, they offered their lands to their followers. In some cases, they even settled some of their family members. These new settlers went out into the fiefs of their patrons and founded new farm settlements. These settlements scattered all over Cis-Kaduna and many of them were named after their landlords. The economic arrangement between fiefholder and dependents whom he settled on his land was on metayer system which also regulated the tenantry of the free peasant who accepted clientship in order to obtain land (Nadel, 1942: 195-199; Adeniyi, 1972b). The history of the Fulani conquest and the founding of many settlements by migrants, either by slaves captured somewhere or by new coming dependents of fiefholders, explained the background for the higher population density of the Cis-Kaduna region as compared with the rest of the Emirate.

2. Customary land tenure of rural community in Cis-Kaduna

Land ownership in the Cis-Kaduna region is complicated due to the history of the Fulani conquest. Nadel (1942: 180-256) offered a detailed description on the traditional land possession and distribution in the Nupe kingdom. The Cis-Kaduna region is mostly a "conquered territory", except some scattered islands of land that have not been taken away from the Nupe indigence. On the land that has been appropriated by the conquerors, multiple layers of ownership would exist as land got divided among the royal families, distributed to men high on the hierarchical scale, redistributed to dependents and slaves, sublet to settlement heads, and so on. The common situation can be simplified into a three-layered structure of land ownership (Masuda, 2002).

On the top level there are the *Bida Emir* and the three royal families. During the process of conquest, the lands were appropriated and divided between the three royal houses. The *Bida Emir* and the three royal families are the ultimate land owners of the territory of the Bida Emirate. There are three royal estates situated immediately outside the Bida town, which used to be overseen by the royal head slaves. In the past, the first cultivation in the year was always done by large-scale communal labor of slaves, dependents and farmers from the neighborhood. At present the use of communal labor of farmers from the neighborhood still occasionally happens when intensive work is needed for the royal farm. Following the tradition, the *Emir* has to arrange for plenty of good food for the people who contribute to the communal work. By being the ultimate land owner, the *Bida Emir* has the right to control activity on the territory of

the Emirate and has the judicial power over any land related dispute. The second layer of land ownership is the primary landlords which consist of absentee or sometimes resident landlords. The absentee landlords form the privileged class of town Fulani in Bida. They get bestowed permanent right to their fiefs and traditional title from the royal houses. Powerful absentee landlord would own large parcel of land that covers multiple farming settlements. The resident landlord probably originated from old slaves or dependents of the noble class, and they lead the life as land holding farmers.

On the third layer there are the secondary landlords who manage land at community level. They are the lineal descendants of the village founders and often also the village chiefs. In some cases, they can be the descendants of head slaves or dependents of former *tunga* villages that we have described in the former section. Following the abolishment of slavery and a century of political change, the economic relationship between *tunga* and fiefholders has changed. Unlike in the time of slavery when most of the crops produced were extracted by the landlords, former slaves were freed and allowed to remain on the land and to farm for their own. The right of secondary landlords to the land is bounded by the clientship under the primary landlord. Annual tribute in kind must be paid by a secondary landlord to show the acknowledgement of the dependence of the community on the patron.

The power of secondary landlords over the community land is restricted to allocation of farmland and management of vacant land. His power, however, can be overridden by the primary landlord. When a primary landlord wants to take back the land for his own use, or to shift the secondary landownership to another person, the secondary landlord can do nothing but to obey. This lack of exclusive right to the land can sometimes lead to hardship to farmers of the community. To ordinary farmers, it is the secondary landlord that they have to deal with when acquiring farmland. Secondary landlords enjoy the economic privilege, although nothing big, to receive land rent in kind from tenant farmers. The land rent is known as *dzanka*, an Arabic-Hausa word meaning tithe, a religious obligation for a Muslim to give out of his wealth or farm products in a prescribed portion with sincere and pious intention of giving. In principle, a tenant farmer in the Cis-Kaduna region is supposed to submit one tenth of his production, in terms of bundles of sorghum or millet, or tins of rice, to the secondary landlord of his farmland. The secondary landlords can also derive income from some fruit-bearing trees on the land.

Table 2 lists the population, origin and primary land ownership of some of the Nupe villages I have visited. These twenty-five villages scatter over the Cis-Kaduna region and are about 10 to 30km away from Bida town. Villages in Cis-Kaduna are often small in scale, with an estimated population not more than two hundred. Out of these twenty-five villages, sixteen are founded by migrants. I will quote some examples that I have got from the oral history of Nupe that I have interviewed. When Shabamaliki village was founded, a hundred young men and a hundred young women captured as slaves were brought to settle in a virgin forest which later turned into Shabamaliki. Ancestor of Nassarafu was an Islamic preacher from Borno who followed the Fulani warriors down to the Nupeland. Similarly, ancestors of Kpatagi were originally from Sokoto. Today it is difficult to tell whether these villages are founded by former slaves or

by dependents of the Fulani conquerors, because nowadays there is almost no difference among villages regardless of their background. Most of the young farmers do not even know the origin of their ancestors. As Adeniyi (1980) has pointed out, there is the tendency for smaller tribes to be absorbed by larger or ruling tribes. After the passage of a century of time, decedents of the former migrants have already been “Nupe-ized” and embraced the Nupe language and culture. The process of islamization brought by the Fulani conquerors should have accelerated the abandonment of their original cultural traits. It is only when one digs deep into the oral history and the land ownership that one can find hints on the origin of the village ancestors. These villages are not very far away from each other, but within a rather limited area of land, numerous primary landlords exist. It reflects the history of land division resulted from the land appropriation and distribution brought by the conquerors. Powerful title holders like *Natsu* and *Tsoyida* own large parcel of land that cover the boundary of multiple villages.

For the villages with Nupe indigence originality, the founders of these villages were usually chased to be the hunters that when wandered around seeking for animals found the unoccupied lands and then settled down. During the Fulani conquest, some indigenes moved into the protection of the hill-side in order to escape from the Fulani raiders. The tradition of Kuchiworo village can be an interesting case as it is a typical instance at first but an unusual instance later. According to the oral history of the village head, the great ancestor of Kuchiworo was a hunter originally lived in Rotso, a place nearby Lokoja which was about 300km away from Bida. He wandered around hunting and as he moved, he settled in a number of places and founded hamlets. From Rotso he moved to Gbanguba, then to Fitigi and finally reached Kuchiyabata. When the Fulani conquerors came, some inhabitants of Kuchiyabata moved onto the hill to hide from the warriors. They endured the harsh living environment there for some decades and finally moved away from the hill when Christian missionary came to them, probably in the late nineteenth century. However, as they were Christianized, they could not return to the original village as it has been Islamized after the conquest. They therefore needed to beg for land from a Fulani landlord and established a new village called Kucuiworo, in which “*woro*” means new in Nupe language. Meanwhile some other inhabitants of Kuchiyabata moved to another place and founded another new village called Kuchigbako, in which “*gbako*” means old in Nupe language. It is the history of how one village has splatted into three due to the war.

Table 2. Population, origin and primary land ownership of Nupe villages.

	Village	Population*	Origin	Primary Landlord	Traditional title of primary landlord
1	Alukusu Tako	150	Migrant	Fulani absentee landlord	Tsoyida
2	Alukusu Tifin	50	Migrant	Fulani absentee landlord	Tsoyida
3	Ejeti	200	Migrant	Fulani absentee landlord	Shabama Mamudu
4	Emicheche	100	Indigene	Nupe landlord in another community	Kuchiyabata
5	Emigbari	50	Migrant	Fulani absentee landlord	Tutiginba
6	Emigilali	100	Migrant	Fulani absentee landlord	Natsu
7	Emisheshe Natsu	60	Migrant	Fulani absentee landlord	Natsu
8	Emisheshikacha	50	Migrant	Fulani absentee landlord	Nynadalu
9	Emitete	100	Migrant	Fulani absentee landlord	Nakordi
10	Emitsundadan	177	Migrant	Fulani absentee landlord	Daniya
11	Eyagi	86	Indigene	Nupe indigene	
12	Fikin	200	Indigene	Nupe indigene	
13	Fitigi	100	Indigene	Nupe indigene	
14	Gadza	303	Migrant	Fulani absentee landlords	Tsoyida/Natsu
15	Gbranchitako	100	Migrant	Fulani absentee landlords	Etsu Umaru
16	Kpatagi	200	Migrant	Absentee landlord in Bida	
17	Kuchigbako	100	Indigene	Nupe indigene	
18	Kuchiworo	200	Indigene	Fulani absentee landlord	Ejiko
19	Lemuta	80	Migrant	Fulani absentee landlords	Gbate
20	Mokwagi	100	Indigene	Nupe indigene	
21	Nassarafu	500	Migrant	Absentee landlord in Bida	
22	Patinda	200	Migrant	Fulani absentee landlord	Rani
23	Shabamaliki	400	Migrant	Fulani absentee landlord	Nagenu
24	Takunkabagi	100	Migrant	Fulani absentee landlord	Ejiko
25	Tswatagi	100	Migrant	Fulani absentee landlord	Rani
	<i>Average</i>	<i>152</i>			

* Numbers of population were given by village heads or villagers interviewed. Most of the figures were rough estimations which seemed to be higher than the real figures could be. The population of Emigbari, Emitsundadan and Gadza were carefully counted by the author through detailed interviews.

Source: Produced by author based on fieldwork conducted in 2004-2009.

Discussion

This paper is part of a larger study which is conceived as an effort to examine the community economy and the indigenous development initiatives of the Nigerian rural community. Various works have already been drafted and published, yet it still requires a constant huge effort to make the history and circumstances of the rural Nigerian community more accessible to reader (Fu et al, 2009; Fu, 2013, 2018, 2019). Comprehensive study on the Nigerian society has become rare since the late 1980s due to increasing political instability and deteriorating social environment after the oil boom. After Nadel's (1942) research in the 1930s, the Nupe society have not been studied again for over half a century until the Japanese scholars conducted research on them in the mid-1990s. Decades have passed since Nadel's research and the Nupe society have undergone some changes. As a part of a research project to identify the possibility for inland valley farming intensification, a Nupe village called Gadza has been selected for socio-economic observation. Hirose (2002) analyzed its farming system and Masuda (2002) studied its land tenure system and tree distribution. Under the same project, Shikano (2002) conducted the first ethnographic research on the pastoral Fulani in the Nupe country. Their findings provide important background information for my study. A rich amount of first hand materials have been obtained through a prolonged period of interrupted fieldwork since 2004. This paper provides the record of the historical origin and customary land tenancy of the agricultural villages of Nigeria. Despite its importance as the political and economic giant of the emerging Africa, information on its local society is limited. Efforts will continue to reveal more detailed descriptions of selected villages, so that the information gap since Nadel's time, even though limited maybe due to various difficulties faced by the researcher, will be filled.

Acknowledgement

The researcher is grateful to the support of JSPS KAKENHI Grant Number 16K20982. This paper is also funded by a Senshu University research grant in 2020 and is part of the results of a project entitled "Local innovation for agricultural development of Africa".

References

- Adeniyi, E.O. (1972a) Land Tenure and Agricultural Development in Nupeland. *Nigerian Geographical Journal*, 15(1): 49-57.
- Adeniyi, E.O. (1972b) A Geographical Analysis of the Population and Rural Economic Development in the Middle Belt of Nigeria: A Case Study from Bida and Minna Divisions of Niger Province. Unpublished Ph.D. thesis, University of Ibadan.
- Adeniyi, E.O. (1980) Niger State: A Survey of Resources for Development. Nigerian Institute of Social and Economic Research. Ibadan, Nigeria.
- Dupigny, E.G.M. (1920) *Nigeria Northern Provinces: Gazetteer of Nupe Province*. Compiled by G.E.M. Dupigny. London: Waterlow & Sons Limited.

- Forde, C.D. (1955) The Nupe. In: Forde, D. (ed). *Peoples of the Niger-Benue Confluence*. London, International African Institute. Pp. 17-52.
- Fu, R.H.Y., Maruyama, M., Oladele, I., and Wakatsuki, T. (2009) Farmers adoption and propensity to abandoned adoption sawah-based rice farming in the inland valley of central Nigeria. *Journal of Food, Agriculture & Environment*, 7(2): 379-382.
- Fu, R.H.Y. (2013) Potential of local initiatives for agricultural development in Africa: Researches on livelihood and natural resource management of the central Nigerian rural community. Doctoral dissertation submitted to the Department of Advanced Social and International Studies, Graduate School of Arts and Sciences, The University of Tokyo.
- Fu, R.H.Y. (2018) Symbiosis Between Pastoralists and Agriculturalists - Corraling Contract and Interethnic Relationship of Fulani and Nupe in Central Nigeria, *International Journal of Public and Private Perspectives on Healthcare, Culture, and the Environment*, 2(1): 33-58.
- Fu, R.H.Y. (2019) A working paper on the local land access arrangement in rural Nigeria, *The Monthly Bulletin of the Institute for Social Science, Senshu University*, 674: 1-9.
- Hirose, S. (2002) Rice and upland farming in the Nupe community. In: Hirose, S., Wakatsuki, T. (eds) *Restoration of Inland Valley Ecosystems in West Africa*. Association of Agriculture and Forest Statistics, Tokyo. Pp.183-212.
- Ibrahim, S. (1992) *The Nupe and their neighbours from the 14th century*. Heinemann Educational Books (Nigeria) PLC.
- Ismaila, D. (2002) *Nupe in history (1300 to date)*. Olawale Publishing Company Ltd, Jos, Nigeria.
- Mason, M. (1981) *Foundations of the Bida Kingdom*. Ahmadu Bello University Press, Zaria, Nigeria.
- Nadel, S.F. (1942) *A Black Byzantium: the kingdom of Nupe in Nigeria*. London: Oxford University Press.
- Nadel, S.F. (1954) [1970]. *Nupe Religion: Traditional beliefs and the influence of Islam in a West African chiefdom*. New York: Schocken Books.
- Shikano, K. (2002) Ecological anthropological study on daily herding activities of pastoral Fulani in central Nigeria. In: Hirose, S. and Wakatsuki, T., (eds) *Restoration of Inland Valley Ecosystems in West Africa*. Association of Agriculture and Forest Statistics. Japan. Pp. 303-369.

韓国の男子学校生徒の身長—成長速度に即して日本との比較

森 宏

「身長は健康に対する投入の供給のみならず、それらの投入に対する需要を把握する真の尺度である」(R. H. Steckel, 1995)。

はじめに

戦後日本の若い人の背が高くなったのは、身近で自分の子供たちを見ている、大学でゼミの学生たちと付き合っている、「どうして？」を問うまでもなく分かっていた。退職後、総合体育館のプールやウエイト室を利用する前後に、1階のシャワー室を利用するようになったので(在職当時は教室から直行)、往きかえり、バスケット・コートの側を通る。70年近い大昔、学生時代にバスケット場の隅で空手の練習をしていたので、バスケット選手の背が高いのはよく知っていた。しかし昨今専修大学のバスケットの選手たちは、190 cmは優に超え、2メートルに近い人がいる。廊下や階段に脱ぎ捨ててあるシューズがまたでかい。筆者は韓国で生まれ育ったので、海外出張の行き帰りなど、韓国に立ち寄ることが多い。韓国の若い人は、日本同様近年背が高くなっている。

インターネット上で毎日目を通して『朝鮮日報』(日本語版)に、「韓国の高3男子、身長伸びず—10年前に比べ」(2016年2月25日)という短い記事があった。自分のゼミ生や、「経済学基礎ゼミ」などで、日常的に接してきた学生たちを観察し、日本では1990年代初めころから新入生たちの(平均)身長が伸び止まったとの感触を持っていた。韓国は、朝鮮戦争(1950-53年)による壊滅もあって、日本に比べ経済成長が遅れた分、子供たちの身長増進も遅れたのだろうくらいに思っていた。

数日後、インターネットで日本の学校生徒の平均身長を検索して、びっくりした。高3男子の平均身長は1990年代初めころから170.8 cmで、それ以降全く伸びていない。前出『朝鮮日報』によると、韓国の高3男子の平均は、173.7 cmで、日本の平均より、ほぼ3 cm高い。朝鮮日報社東京支局に連絡し、記事の基礎になった詳しい統計資料の提供を依頼した。Prof. Park, Soon-Woo, Catholic University of Daegu School of Medicineは、調査の実質的担当者、Prof. Moon, Jin Soo, School of Medicine, Seoul National Universityに、日本の物好き老教授の指導・協力がたを指示され、Moon教授は、基本的統計と重要な関連文献を送って下さった。(経緯は拙稿: “Changes in food consumption and secular changes in stature in Japan—

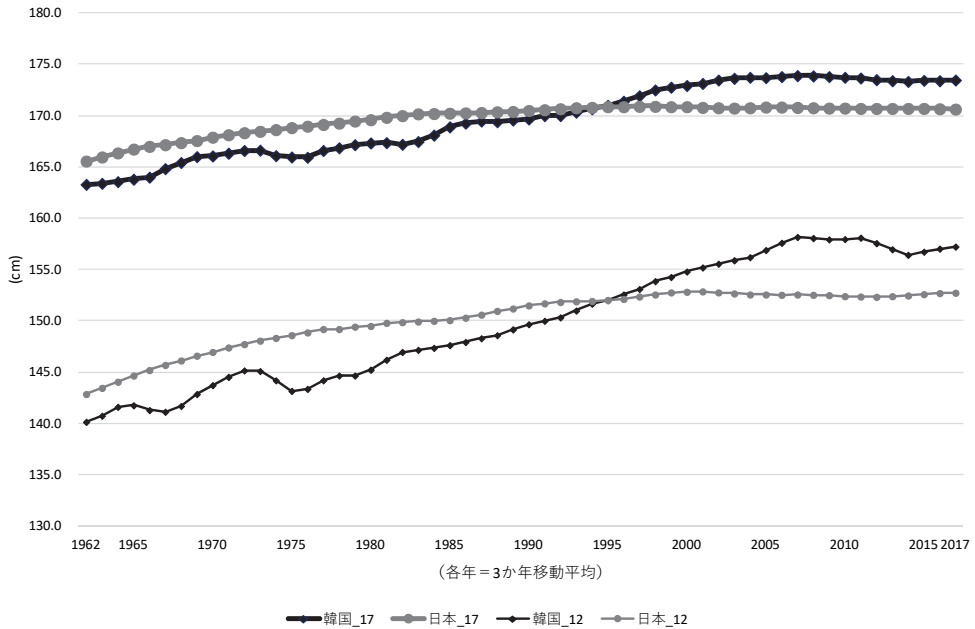
Comparison with South Korea,” Mori, Hiroshi (2016), 『専修経済学論集』 51 (1), 113-127; “Stature: key determinants”, 『社研月報』 644, 2017; など)。

それからまる 4 年が経過した。趣味のない筆者は、子供の身長の相対比較に「明け暮れた」。人類学や生理学の基礎的素養のない筆者は、農業経済専攻の研究者として、人の身長を決める「健康に対する投入」(R. Steckel, 1995、前出)の基本的要素の一つである、食料供給＝消費の観点から取り組んできた。歳とともに、数理モデルや厳密な統計分析は難しくなったので、目的変数である身長と説明変数である食料消費のいずれも、単純平均値の加減・乗除で通し、有意差検定とか、sensitivity-analysis などは縁遠い。

これまで関連学界において身長の決め手とされている、例えば牛乳消費の場合、国別・時代別の相関分析に使われる 1 人当たり消費量は、ある地方・ある時代の人口 1 人当たり単純平均値である(古くは、Silventoinen, 2003; Hatton, 2013; ごく最近のものでは、Grasgruber and Hrazdira, 2020 など)。50 歳を過ぎた女性の身長縮み防止に牛乳が有効であるのは想像できるが、思春期を過ぎた女性の牛乳消費は、身長の伸び・縮みには関係しない。顕著な経済変動・成長を経験している社会では、流行などに影響される特殊な食品に限らず、肉・魚や野菜などの消費についても顕著な年齢・世代効果が観察される(Mori, Inaba, and Dyck, 2016 など)。従って人口 1 人当たり単純平均は、成長期の子供たちの個人消費を代理しない恐れがある。その点に関し筆者は、日本と韓国の国別、時系列の比較分析において、1990 年代半ばから手掛けてきたコウホート分析の経験を活かし(森宏『社会科学のためのコウホート分析：考え方と手法』2014 年)、成長期の子供たちの個人消費を使用すべき配慮を意識した。

本論に入る前に、これまでの研究の結論を手短に紹介しておきたい。日本の子供たちは 1990 年代後半から 2000 年代にかけて、平均身長において韓国の子供たちに「追い越された」(図 1)が、それは「両国民の遺伝的差」を表しているとの見解に(Kang, He-yong, *Korea Times*, 2018, July 9 など)、筆者は与しない。日本の子供たちは、どの年齢階層も 1990 年代初めに伸びが止まったのだが、平均的に「民族的ポテンシャル」に達したと見るのではなく、もっと伸びるべくして*1、伸びが止まった。肉や牛乳の消費量が増えなくなった/減少したからではない。高 3 段階で韓国に比べ平均的に 3 cm も低くなった 2000 年代半の時点でも、1 人当たり肉類や牛乳の消費は、韓国より日本のほうがかなり多かった(後出表 1)。小・中校の学校給食に関しては、韓国の歴史は浅く、特に学給における牛乳供給は日本のほうがはるかに先輩格である(Huang, Yutsai, 2013)。それにも拘らず日本の若者の方が顕著に低くなったのは、1994 年度の『農業白書』が控えめに警告したように、「若者の果物離れ」、成長期の子供たちが果物を食べなくなった、同時に果物の場合ほど劇的ではないが、日本の若い人・子供たちは野菜を食べなくなったことが背景にある。「日本の若者の野菜離れ」の傾向は、年齢階級別に主要食品の摂取量を伝え

図1 韓国と日本の男子の平均身長、12歳と17歳、1962年から2017年
(各国『学校保健統計調査』)



る 1986 年度以降の『国民栄養調査』では分からないが、専修大学の学生食堂とソウルの代表的大学のキャフェテリアをさっと見比べるだけで十分すぎるほどである（拙著「韓国に追い抜かれた」『社研月報』673、2019. 7月、p. 43のsnap写真）。本稿の最後の「おち」になるのだが、韓国においても「若者の野菜離れ」がこの20年来急速に進行している。それが、はじめにに触れた韓国における高3男子の「伸び止まり」と無関係ではないらしいことを本稿で提起し、栄養学や人類生物学の研究者たちにも訴えたい。

*1 両親の背が特に高くなくとも（父親の背が165 cm前後）、息子が175 cm前後の例は全然珍しくない。逆に、1970年以降誕生の息子や娘が両親を超えない例も身近に観察される。

身長の成長速度—出生コウホートに合わせて

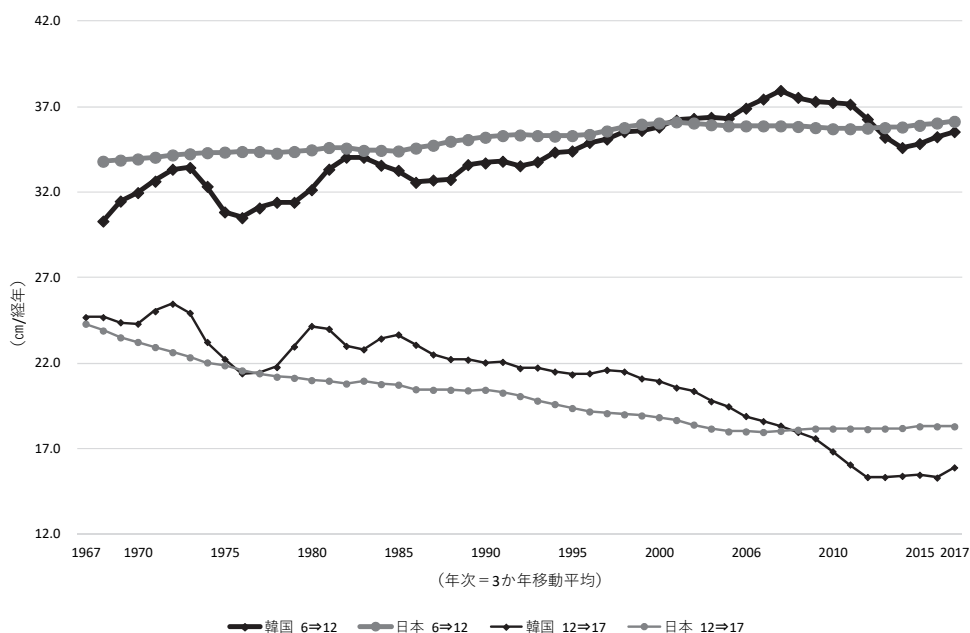
日本では、1948年から全国的な『国民栄養調査』が、毎年規則的に実施され、世帯主の年齢階級別に1人当たり栄養摂取と世帯構成員の年齢別肉体状況（身長・体重など）が公表されている。韓国でも類似の栄養調査は実施されてきたが、筆者の検索範囲では学术论文に引用されることは少なかった。量・質的に日本のそれをはるかに超える保健栄養調査が実施され、公表されたのは1998年度が最初で、2回目は2001年、3回目は2005年である（*Korea National*

Health and Nutrition Examination Surveys: KNHNES)。1960 - 70 年以降の過去半世紀における身長と栄養摂取（食料消費）の関連を特定したい本稿の用には、直接役立たない。供給は消費ではないが、消費は供給を超えることはない。本稿では、年度ごとの 1 人当たり実供給を示す『食料需給表』を、品目別消費変化の基礎的データ源として使用する。また、年齢別の身長の推移については、両国においてほとんど全く同じ要領で、毎年同じ学年時期（韓国は 3 月、日本は 4 月）に実施・公表されている『学校保健統計調査』に依拠する。日本では、幼稚園児（5 歳）と、大学・専門校（18 歳以上）をも対象にした年度があるが、韓国は小 1（6 歳）から、高 3（17 歳）までしか存在しない。

日本の『学校保健統計調査』の年齢別身長などに関する統計一覧に、参考として身長発育（パーセントイル）曲線が添付されている（後出参考図 1）。5 歳から 17 歳までの中央値（50%）、10%、- -、90% ごとに、1 歳刻みの成長度合いが示されている。韓国では、『学校保健統計』ではなく、上述の『保健・栄養調査』に基づくデータを使った成長曲線が幾年かの最近年次ごとに示され、児童の成長をめぐる専門家の解説が展開されている（J.S. Moon et al., *Growth Curves in S. Korea*, 2019; etc.）。共通しているのは、いずれの場合も、同年時における 6 歳から 17 歳までの児童の平均身長をトレースしている点である。「WHO の基準に従って」作表・図されているようだが、例えば、2018 年の 4 月（日本の場合）の 6 歳児は、2019 年の同月に 7 歳、2020 年に 8 歳に「成長」するわけで、同じ 2018 年にいきなり 17 歳に成長することはあり得ない。逆方向に、2018 年 4 月の 17 歳児が、6 歳だったのは 2007 年 4 月で、1 年に 1 歳ずつ加齢を重ね、2018 年 4 月に 17 歳に成長したのである。自分の子供なり孫たちも、年々そのようにして成長してきたわけである。高度成長を成し遂げた日本においても、筆者自身の観察から最初 25 年前に生まれた孫と、最近 10 年前に生まれた孫の間には、成長の仕方に何ほどの違いがあるように感じられる。いずれにせよ、人はモルモットと違い、生まれたその年に成人に達するわけではない。

本分析で最も新しい年次は 2017 年（2016 年 - 18 年の 3 年移動平均）、この年に高 3、17 歳は、2000 年に出生、2001 年に 1 歳、2006 年に小 1、6 歳、2012 年に中 1、12 歳であった。このコウホートが本稿対象の最も新しい出生世代である。他方、データが得られる一番古い年次は、1962 年（1961 - 63 年の平均）で、この年に小 1、6 歳は、1968 年に中 1、12 歳、1973 年に高 3、17 歳になっている。これが一番古いコウホートである。こうした生物学上の事実を踏まえ、出生コウホートに合わせてそれぞれ、小 1、6 歳から中 1、12 歳、中 1 から高 3、17 歳に至る成長の幅を単純引き算で算出、小学生グループと中高生グループに分けて、韓・日男子児童の成長速度を比較・グラフ化したのが図 2 である。

図2 6歳から12歳及び12歳から17歳に至る男子の平均身長の変化、
日本および韓国、1966年から2017年（各国『学校保健統計調査』）



まず、小1から中1（小6は6年生になったばかりの月の計測値だから、それから12か月経った中1が、小6の最後の月に近い）の成長幅（速度）は、1990年代半ばまでは日本のほうが上位で、韓国はかなり上下しながらも*2日本を追いかけ・追いつき、2000年代半ばには日本を3cm前後超えるが、2010年代初めに急落し、日本より2cm前後低くなっている。観察期間後半最後の数年間に見られる低落は、筆者の直感的予想を超え、差し当たり説明の用意がないが、注目に値するのは確かであろう。

中1、12歳から高3、17歳に至る思春期の成長幅は（平均的に高2から高3の身長増加は大きくない）、1970年代前半に韓国が日本を突然2cm前後上回るが、1980年代後半には急落して日本と同水準まで低下し、2-3年後再び急上昇し、2000年代半ばまでほぼ安定的に日本の成長幅を2-3cm前後超えて推移する。日本の男子の思春期の成長幅は、1970年代半ばにおける22.0cmから2000年代半ばの18.0cmまで安定的な漸落傾向をたどり、それ以降はその水準に留まっている。他方韓国のそれは1980年代初めの24cmから、1990年代後半の19cmに漸落し、その後はより急カーブで低落し、2010年代初めには日本より3cm低い15cm水準まで低下している。すでに触れたが、小1から中1までの成長幅も韓国は急落している。表面的には韓国の高3の平均身長はこの期間伸びが止まっただけで、期間を通し日本より3cm高いことに変わりないが（図1）、小1から中1、中1から高3に至る成長幅は、いずれもそれぞれ急落して

いる。4年前、*Am. J. Physical Anthropology*に紹介された1965年から2005年まで10年刻みの、1~20歳の平均身長の変動を日本と比べ、韓国の子供は日本に比べ、(恐らく「民族的特性」として)思春期後半の成長幅が大きいと観念していた筆者には、これまでの見方に変更を迫る、注目すべき現象である。

*2 統計誤差の範囲なのか、現実の反映なのか、筆者には明言できない。韓国の源統計に表れる学年別平均値は日本の統計に比べ年々の変動が大きい。そのこともあって、各年のデータは前後3か年の移動平均をとっている。

韓国児童の身長成長速度の低落傾向の背景—筆者の仮説

Human Biology (人類生理学)の世界で、人口の平均身長を決める重要な投入要素として、動物性蛋白をあげれるのが普通である(ごく最近の文献:Grasgruber, Hrazdira, 2020*³)。筆者は日本と韓国の比較で、動物蛋白消費の大小、時系列的な増減だけでは1990年以降の動向(韓・日の身長の変転)は説明しきれないことは繰り返し述べてきた。ただし両国における戦後半世紀にわたる動物性食品の着実な増加を伴う食生活の向上が、両国民の目覚ましい平均身

表1 1985年から2005年までの1人当たり肉類などの供給量の変化

日本と韓国

肉+卵			牛乳*	(kg/年)	
	日本	韓国		日本	韓国
1985	50.8	25.5	1985	80.3	26.0
1990	57.3	33.7	1990	83.4	42.0
1995	63.9	47.6	1995	87.5	49.5
2000	64.8	57.3	2000	85.2	55.6
2005	65.9	59.9	2005	80.8	56.9
2010	66.7	70.1	2010	74.7	54.0
2015	65.8	76.4	2015	63.1	50.9
果物			野菜		
	日本	韓国		日本	韓国
1985	51.9	35.2	1985	119.5	181.7
1990	50.2	47.0	1990	116.7	200.6
1995	53.2	59.6	1995	116.6	222.3
2000	51.4	69.6	2000	112.8	235.7
2005	60.3	76.1	2005	107.8	215.8
2010	49.1	67.6	2010	98.9	196.5
2015	34.5	57.1	2015	91.7	200.4

註：* 総供給量を総人口で割って算出。FAOSTATの1人当たり

牛乳供給は、計算上のミスで、韓国の推計値は異常に低い。

出所：FAOSTAT, *Food Balance Sheets*.

長の増進をもたらした重要な要因であったことを否定するわけではない。

ところで、前節で観察した 1990 年代後半以降に始まる韓国の思春期男児の成長速度の明らかな低下 (図 2) をもたらした要因は、何だったのであろうか。韓国における 1 人当たり肉類と牛乳の消費は、欧米諸国に比べかなり低いとはいえ、2015 年まで着実に増えているから、動物性蛋白摂取の動向が影響しているわけではない。国連 FAOSTAT によれば、韓国の人口 1 人当たり肉+卵の純供給/年は、1980 年代半ばの 25.5 kg から、2010 年代半ばの 76.4 kg に着実に伸びている (表 1)。また韓国の若者が肉類「離れ」をおこしているわけではない (後述)。牛乳消費は、東アジア諸国では民族的に「乳糖不耐性」があるのか、日本・台湾・韓国は欧米諸国に比べ、1 人当たり平均消費量は、5 分の 1 程度と少ない。それでも韓国における牛乳消費は、1985 年の 26.0 kg から 2015 年の 50.9 kg に倍増している (表 1)。

筆者は 1996 年に身長問題を手掛けるようになって間もなく、元果樹研究所所長の間苧谷氏のご紹介で、果樹研究所が浜松医大疫学教室と共同で取り組んでいる「三ヶ日町コウホート調査」の結果と含意を知るようになった。数年に及ぶ三ヶ日町民のみかんを中心とする果物摂取量と血液中の “high serum carotenoids” の間に高い相関が発見され、骨中のカルシウム沈着を助ける。果物をたくさん食べる中年女性は、閉経後の骨粗鬆症発生のリスクが少ない云々である (Sugiura, M. et al., 2008; 2012; Nakamura, M., M. Sugiura et al., 2016; etc.)。その関連で、欧米や中国における果物と野菜の摂取と発育期の青少年の骨密度、カルシウム沈着に関する文献に接することができた (Whiting, S., H. Vatanparast et al., 2004; Li, J.J., Z-W Huang et al., 2012; etc.)。牛乳や肉類をたくさん撮ると背が伸びるといった直接的な関係ではないが、果物や野菜の摂取が筋肉・骨格の形成に間接的な補助作用を働くことは、栄養学・疫学的研究によって示唆されている。ごく最近目にした、オランダの酪農団体の機関紙に、蛋白摂取を有効にするためには、1 日最低 2 単位の果物 (オレンジ 2 個程度) と 250 g²の野菜の摂取が必要であるとの国の指導方針が引用されている (Stephen Peters, *Putting protein transition into perspective*, 2020)。

平均的に韓国の高 3 男子が着実に高くなって、日本の高 3 男子を 3 cm 近く追い抜いた 2005 年時点で、韓国の人口 1 人当たり青果物の消費は、果物が 76.1 kg、野菜が 215.8 kg で、日本のそれぞれ 60.3 kg、107.8 kg を上回り、特に野菜では 2 倍前後多い (表 1)。筆者は、この最後の事実、韓国の人は「キムチ*4 でご飯をたくさん食べる」ことが韓国の若者の背が伸びるのに大きく貢献したと考えてきた。

韓国の統計データの提供などでお世話になっている韓国農村経済研究院 (KREI), Sanghyo Kim 氏が以前に送って下さった韓国の家計調査 (*Household Expenditure Surveys, classified by age-groups of household head, 1990 to 2016*) を分解して、世帯主年齢別の平均ではなく、

表 2 世帯員年齢階級別の 1 人当たり家計消費支出の変化、韓国、1990 - 2016

A: 野菜

各年とも 50 歳代=100

年齢階級	1990-91	1995-96	2000-01	2005-06	2009-10	2015-16
0-9	52.4	32.2	21.9	19.4	13.3	11.8
10~14	54.4	35.2	28.5	22.5	16.2	14.2
15~19	53.8	35.6	33.6	25.9	19.6	17.2
20~24	51.0	36.3	39.7	29.7	23.2	21.7
25~29	62.7	48.9	48.5	39.3	31.3	33.4
30~39	74.9	65.4	64.0	54.0	48.6	49.0
40~49	97.0	88.2	83.4	註	73.9	72.3
50~59	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
60~	96.6	99.1	111.0	107.0	116.9	122.2
純供給量 kg/1 人	131.7	156.4	165.2	149.7	143.4	135.9

出所：Household Expenditures Surveys, classified by age groups of household head, 1990 to 2016 (Kim Sanghyo 提供).

註：Per capita expenditures in current won, by age of individual household members are calculated by the author, using TMI model.

純供給量は KREI, Food Balance Sheets.

表 2 世帯員年齢階級別の 1 人当たり家計消費支出の変化、韓国、1990 - 2016

B: 果物

各年とも 50 歳代=100

年齢階級	1990-91	1995-96	2000-01	2005-06	2010-11	2015-16
0~9	55.8	42.7	45.3	45.1	42.1	33.1
10~14	56.7	43.4	46.9	43.1	40.0	34.2
15~19	55.1	42.7	47.6	43.5	36.8	35.1
20~24	56.0	45.3	50.8	46.6	33.4	35.8
25~29	67.4	60.3	61.4	60.4	45.1	46.6
30~39	75.2	72.5	71.3	71.3	64.6	64.0
40~49	90.9	88.3	87.9	83.3	86.5	83.4
50~59	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
60~	106.3	93.3	101.5	101.5	89.0	92.7
純供給量 kg/1 人	32.5	38	41.3	44.7	45.5	48.8

出所：表 A と同じ。

註：表 A と同じ。

表 2 世帯員年齢階級別の 1 人当たり家計消費支出の変化、
韓国、1990 - 2016

C: 肉類 各年とも 50 歳代=100

年齢階級	1990-91	2000-01	2010-11	2015-16
0-9	52.0	49.6	46.3	46.8
10~14	52.9	52.0	50.5	48.6
15~19	49.4	50.7	48.9	47.2
20~24	46.7	50.4	42.0	42.7
25~29	61.8	59.2	50.2	53.2
30~39	74.6	73.8	63.3	69.9
40~49	95.7	93.7	96.4	93.8
50~59	100.0	100.0	100.0	100.0
60~	103.6	96.1	87.9	86.5
純供給量 kg/1 人	24.8	37.9	44.0	54.5

出所：表 A と同じ。

註：表 A と同じ。

世帯の構成員の年齢別の家計消費の動向を析出した。筆者が手にしている韓国の『家計調査』データは、日本のそのように購入価格と購入量は出ていない。標本数が比較的多く統計的に安定した推計値が得られた 50 歳代世帯員の 1 人当たり消費支出を母数として、他の世帯員の年齢階級別の家計消費指数を、品目別に推計した。表 2 A.B.C.がそれぞれである。

韓国の学友、年代的には筆者より半世代、15 歳前後若い研究仲間が「最近の若い学生たちは、キムチより何でもケチャップ」と慨嘆するのを耳にしていたが、まさかこれ程までに「野菜離れ」が進んでいたとは思っていなかった。日本の若者は、野菜より果物「離れ」をしているが、韓国の「若者の果物離れ」はそれほど激烈な減退ではない。

筆者のこの推計結果では、韓国の 10 歳代の子供、20 歳代の成人も、50 歳代の中年層に比べ、肉類の家計消費がかなり低いように見える（表 2 C）。日本の『家計調査』同様、若年層のサンプル数が十分ではなく、近年さらに低下していることにも配慮すべきかもしれない。筆者が有している韓国の家計調査結果では、肉類は“meat-all”で、日本の『家計調査』のように、牛肉・豚肉・鶏肉の区別がなく、加工肉も含み、しかも購入量ではなく、支出金額である。若い層は経済的な理由もあり、相対的に高価な牛肉は避け、廉価な豚肉や鶏肉、さらに牛肉でも相対的に安いカットを購入するから、加工肉を含む肉類全体に対する支出金額と購入量=家計消費量とは一致しないことは、認識しておくべきだろう。

世帯主年齢階級別に区分された『家計支出調査』を、食品別に世帯員の年齢階級別に家計消

費の動向を析出した本稿の分析結果から、おそらく 1990 年前後から始まったらしい韓国における「若者の野菜離れ」の傾向が探知できたことは、貴重な発見であった。

1998 年に始められた *KNHNES*『韓国健康栄養調査』は日本のそれに比べ、標本規模と調査内容に関し、集約性が高いように思われる。本稿で利用した、『食料需給表』と『世帯消費支出調査』の結果と補完させながら、韓国における食料消費の動向がより明らかにされることが望ましい。

本節の仮の結論は、2000 年代の初めころから始まった韓国の子供たちの身長伸び止まりは、通常挙げられる動物蛋白の摂取動向ではなく、最近 15 - 20 年間に観察される劇的な「若者の野菜離れ」が関連しているのではないかと思う。しかし世代別嗜好変化の問題は、家計における調理の手間ヒマの経済分析では解き難いと強く感じている。栄養学だけでなく、社会心理学関係のご示唆を得たいと願っている。

*3 「(本稿の) 多変量回帰モデルにおいて、身長の最良の予測値は質を問わず蛋白源である」(要約)。

*4 “largest contributor to vegetable consumption (Lee, Duffey, and Popkin, 2012, p.619)。

参考文献

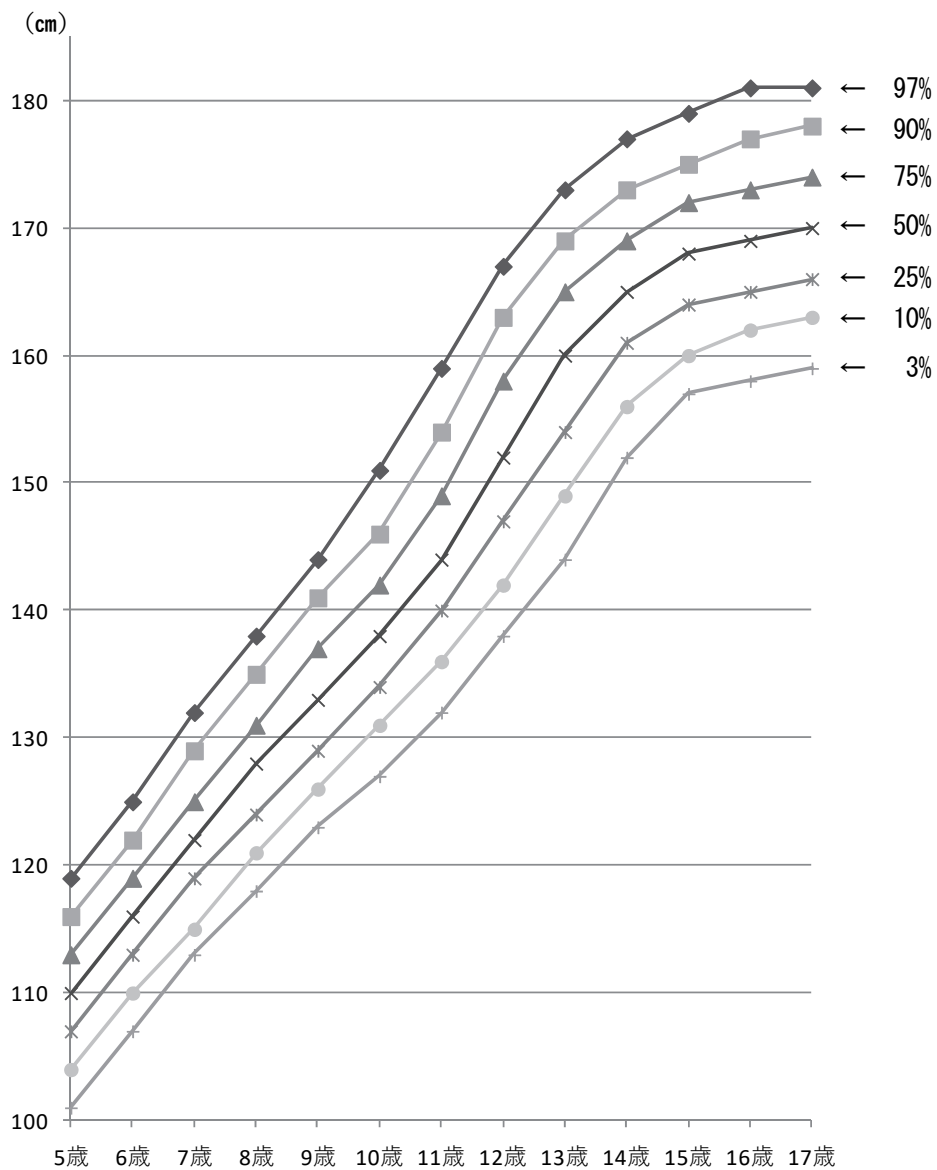
- 『朝鮮日報』(日本語版) 2016 年 2 月 15 日号 (インターネット)。
厚生省『国民栄養調査』各年版。
文部科学省『学校保健統計調査』各年版。
—『学校保健統計調査』「参考:身体発育値及び発育曲線」。
森宏 (2014)『社会科学のためのコウホート分析』東京、CAP。
— (2019)「日本の若者は 2000 年代に入って韓国の若者に身長で追い抜かれた—台湾の歴史的統計を勘案すると遺伝的差ではない」『専修大学社会科学月報』No.673, 24-46。
農林水産省 (1995)『農業白書—1994 年』。
Cole, Tim and Hiroshi Mori (2017) Fifty years of child height in Japan and South Korea: Contrasting secular trend patterns analyzed by SITAR, *American J Human Biology*: e23054, 1-13.
Deaton, Angus. Height, health, and development. PNAS, vol. 104. 2007. no. 33. 13232-13237.
FAO of the United Nations. FAOSTAT, *Food Balance Sheets*, by country and year, on line.
Federal Reserve Bank of St Louis, *Federal Reserve Economic Data*, downloaded from internet.
Grasgruber, P., Sebera, E. et al. (2016) Major correlates of male height: A study of 105 countries. *Economics and Human Biology*, 21, 172-195.

- Grasgruber, P. and E. Hrazdira (2020) Nutritional and socio-economic predictors of adult height in 152 world populations. *Economics and Human Biology*, 1-24 (in press).
- Hatton, Timothy J. (2013) How have Europeans grown so tall? *Oxford Economic Papers* (Advance Access, published September), Oxford University Press, 1-24.
- Huang, Yutsai (2013) Introduction of School Lunch Program in Japan and South Korea, FFTC Agricultural Policy Articles, downloaded from<http://ap.ffc.agent.org/ap_db.php?id=138>.
- Kang, He-young (2018) *Korea Times*, July 9.
- Kim, Y.S. (1982) Growth status of Korean schoolchildren in Japan. *Annals of Human Biology*, 9, 453-458.
- Lee H-S, K.J. Duffey, and B.M. Popkin (2012). South Korea's entry to the global food economy: shifts in consumption of food between 1998 and 2009. *Asia Pac J Clin Nutr*, 21(4), 618-629.
- Li, J-J, Z-W Huang et al. (2012). Fruit and vegetable intake and bone mass in Chinese adolescents, young and postmenopausal women. *Public Health Nutrition*: 16(1), 78-86.
- McGartland, C.P., P. J. Robson et al. (2004). Fruit and vegetable consumption and bone mineral density: Northern Ireland Young Hearts Project. *Am J Clin Nutr*, 80, 1019-23.
- Moon, Jin Soo et al. (2018) The 2017 Korean National Growth Charts for children and adolescents: development, improvement and prospects, *Korea J Pediatrics*, 61(5), May, 135-149.
- Mori, Hiroshi (2016). Changes in food consumption and secular changes in stature in Japan—comparison with S. Korea," *Economic Bulletin of Senshu University*, Vol. 51, No. 1, Senshu University, July, 113-127.
- (2017) "Stature: Key determinants of positive height trends—The cases of Japan and South Korea," *The Monthly Bulletin of Social Science*, No.644, Senshu University, February, 2140.
- (2018a). Why Koreans became taller than Japanese? *Annual Bulletin of Social Science*, No. 52, Senshu University, 177-195.
- (2018b). Secular trends in child height in post-war Japan: Nutrition throughout childhood," *Recent Advances in Food Sciences*, 2(1), 75-84 (Open Access Journal, Bucharest, Romania).
- (2019) Why did Japanese children cease to grow taller in height in the midst of a

- booming economy, in contrast with South Korean youth? *Annual Bulletin of Social Science*, No. 53, Senshu University, 223-240.
- Mori, Hiroshi (2020) *Structural changes in food consumption and human height in East Asia*, LAMBERT Academic Publishing, Berlin.
- Mori, H., T. Inaba, and J. Dyck (2016). Accounting for structural changes in demand for foods in the presence of age and cohort effects: the case of fresh fish in Japan, *Evolut Inst Econ Rev*, published on line: 19 September 2016.
- Mori, H. and S. Kim (2020). Child height and food consumption in Japan in the past century in comparison with South Korea: Animal proteins and other essential nutrients, *Global J Medical Research*, June (in press).
- Nakamura, M., M. Sugiura et al. (2016). Serum β -carotene derived from Satsuma mandarin and brachial-ankle pulse wave velocity: The Mikkabi cohort study,” *Nutrition, Metabolism & Cardiovascular Diseases*, 26, 808-814.
- Park, Junghyun. Dept. of Nutrition, Gachon University. 2018. courtesy.
- Prentice A, Ward K, Goldberg C, Jarjou L, Moor S, et al. Critical windows for nutritional interventions against stunting. *Am J Clin Nutr*. 2013. 97. 911-8.
- Republic of Korea, Korea Centers for Disease Control and Prevention, *Korea National Health and Nutrition Examination Survey*, various issues.
- Republic of Korea, Department of Education, Center for Educational Statistics, *Statistical Yearbook of Education*, various issues.
- Republic of Korea government, KREI, *Food Balance Sheets*, various issues.
- Silventoinem, Karri (2003) Determinants of variation in adult body height, *Journal of Biosocial Science*, Cambridge University Press, 266-286.
- Steckel, R.H. (1995) Statue and the standard of living. *Journal of Economic Literature*, XXXIII, 1903-1940.
- Stephen, Peters et al. (2020) Putting protein transitions into perspective, REPORT: *A sustainable and healthy diet*, VOEDING Magazine, 1
- Sugiura, M., M. Nakamura, K. Ogawa, Y. Ikoma, F. Ando, and M. Yano (2008). Bone mineral density in post-menopausal female subjects is associated with serum antioxidant carotenoids,” *Osteoporosis International*, 19-2, 211-219.
- Sugiura, M., M. Nakamura, K. Ogawa, Y. Ikoma, and M. Yano (2012). High serum carotenoids associated with lower risk for bone loss and osteoporosis in post-

- menopausal Japanese female subjects: prospective cohort study,” *PLOS ONE*, December, 7(12), 1-9.
- (2015). High serum carotenoids associated with lower risk for the metabolic syndrome and its components among Japanese subjects: Mikkabi prospective cohort study, *British Journal of Nutrition*, 114, 1674-1682.
- Vatanparast, H., A. Baxter-Jones, R.A. Faulkner, D.A. Bailey, and S.J. Whiting (2005). Positive effect of vegetable and fruit consumption and calcium intake on bone mineral accrual in boys during growth from childhood to adolescence: The University of Saskatchewan pediatric bone mineral accrual study. *Am J Clin Nutr*, 82, 700-706.
- Whiting S., H. Vatanparast et al. (2004). Factors that affect bone mineral accrual in the adolescent growth spurt. *J Nutr*, 134(3), 696S-700S.

参考図1 身長發育曲線 —男子生徒



出所：『学校保健統計調査』平成30年.

執筆者紹介

所澤新一郎 しよざわしんいちろう 本研究所客員研究員・共同通信社編集局気象・災害取材チーム長

大矢根 淳 おおやね じゅん 本学人間科学部教授

Regina Hoi Yee Fu ふい (傅 凱儀) 本学経済学部准教授

森 宏 もり ひろし 本研究所研究参与

〈編集後記〉

月報第 684 号をお届けする。今号には 3 本の論稿が収録されている。

所澤新一郎客員研究員と大矢根淳所員による「調査報告 減災サイクルのステークホルダーと事前復興への取り組みの実相(II)-被災地石巻での聞き取り調査から：(脱)仮説・「復興」から日常への収斂-」と傅凱儀所員による「Historical origin and customary land tenancy of Nupe villages in central Nigeria」、および森宏研究参与による「韓国の男子学校生徒の身長—成長速度に即して日本との比較」である。

「調査報告 減災サイクルのステークホルダーと事前復興への取り組みの実相(II)」は、2018 年度以来、社研グループ研究 A「減災サイクルのステークホルダーと事前復興への取り組みの実相」として 3 年間継続設置されている調査研究の 2 年度目の成果報告にあたる。

「Historical origin and customary land tenancy of Nupe villages in central Nigeria」は、アフリカ西部に位置するナイジェリアの中央部農村地帯の歴史的起源と慣習的な土地利用について記録したものである。調査は「Middle Belt」と呼ばれる地域を対象に行われている。

「韓国の男子学校生徒の身長—成長速度に即して日本との比較」は、2000 年代の初めころから始まった韓国の子供たちの身長の伸び止まりは、動物蛋白の摂取動向ではなく、最近 15-20 年間に観察される劇的な「若者の野菜離れ」が関連しているのではないかということ論じるものである。

上記 3 本の論考は、それぞれ継続した研究の一部をなし、蓄積された研究にさらなる知見を付け加えるものとなっている。

さて、全面オンラインで始まった授業だが、一部授業については対面授業が開始する。ただし「三密」を避ける工夫をしながらの実施だ。先が見通せないのは授業だけではない。研究計画もままならない。現地調査型の研究は、しばらく自粛するしかないのかもしれない。

(H.H)

2020 年 6 月 20 日発行

〒214-8580

神奈川県川崎市多摩区東三田 2 丁目 1 番 1 号 電話 (044)911-1089

専修大学社会科学研究所

The Institute for Social Science, Senshu University, Tokyo/Kawasaki, Japan

(発行者) 宮 寄 晃 臣

製 作 佐藤印刷株式会社

東京都渋谷区神宮前 2-10-2 電話 (03)3404-2561
